



# **FUJITSU Software**

## **Interstage Application Server/ Interstage Web Server Express**

### **システム設計ガイド**

Windows/Solaris/Linux

B1WS-1018-04Z0(00)  
2014年2月

# まえがき

---

## 本書の目的

本書は、Interstage Application Serverのシステム設計方法について説明しています。

## 本書の読者

本書を参照することによって、Interstage Application Serverのシステムの設計方法に関する情報を得ることができます。なお、本書を読むためには、以下の知識が必要です。

- ・インターネットに関する基本的な知識
- ・使用するOSに関する基本的な知識

## 本書の構成

本書は以下の構成になっています。

### 第1章 システム構成

Interstageのシステム構成について説明しています。

### 第2章 Java EEのシステム設計

Java EEのシステム設計について説明します。

EE

### 第3章 マルチ言語サービスのシステム設計

マルチ言語サービスのシステム設計について説明します。

### 第4章 ソフトウェア条件

Interstageの特定の機能を使用する場合に必要となるソフトウェアについて説明します。

### 第5章 動作OSの違いによる注意事項

動作OSに違いによる注意事項について説明します。

### 付録A ログ情報

Interstageが出力するログについて説明します。

### 付録B ポート番号

Interstageが使用するポート番号について説明します。

### 付録C プロセス情報

Interstageで監視が必要な常駐プロセスについて説明します。

### 付録D メッセージ情報

Interstageで監視が必要なメッセージについて説明します。

### 付録E Java実行環境に関する情報

Java実行環境と組合せ可能なJava(JDK/JRE)などについて説明します。

## ソフトウェア名称

本マニュアルでは、以下のソフトウェアの名称を略称で表記しています。

略称	ソフトウェア名称
RHEL-AS4(x86)	Red Hat Enterprise Linux AS (v.4 for x86)
RHEL-AS4(EM64T)	Red Hat Enterprise Linux AS (v.4 for EM64T)
RHEL5(x86)	Red Hat Enterprise Linux 5 (for x86)
RHEL5(Intel64)	Red Hat Enterprise Linux 5 (for Intel64)
RHEL6(x86)	Red Hat Enterprise Linux 6 (for x86)

略称	ソフトウェア名称
RHEL6(Intel64)	Red Hat Enterprise Linux 6 (for Intel64)

## 輸出許可

本ドキュメントを非居住者に提供する場合には、経済産業大臣の許可が必要となる場合がありますので、ご注意ください。

## 著作権

Copyright 2011-2014 FUJITSU LIMITED

2014年2月 第4版

2012年8月 初版

# 目 次

---

第1章 システム構成.....	1
1.1 シングルサーバ(スタンドアロン).....	1
1.2 クラスタシステム.....	1
1.3 負荷分散システム.....	2
1.4 マルチサーバ.....	3
1.5 シングル・サインオン.....	3
1.6 Web PackageによるWebサーバ.....	4
第2章 Java EEのシステム設計.....	6
2.1 システム形態.....	6
2.2 主な運用形態.....	6
2.2.1 Webサーバ経由の運用.....	7
2.2.2 単数マシンでの多重プロセス運用.....	7
2.2.3 複数マシンでの多重プロセス運用.....	8
第3章 マルチ言語サービスのシステム設計.....	10
第4章 ソフトウェア条件.....	11
4.1 アプリケーション開発時に必要なソフトウェア.....	11
4.1.1 Javaの開発環境.....	11
4.1.1.1 サーバアプリケーション.....	11
4.1.1.2 クライアントアプリケーション.....	12
4.1.2 C/C++関連の開発環境.....	12
4.1.2.1 サーバアプリケーション.....	12
4.1.2.2 クライアントアプリケーション.....	14
4.1.3 COBOL関連の開発環境.....	15
4.1.3.1 サーバアプリケーション.....	15
4.1.3.2 クライアントアプリケーション.....	16
4.1.4 フレームワーク.....	17
4.2 アプリケーション実行時に必要なソフトウェア.....	17
4.2.1 C/C++関連.....	17
4.2.2 COBOL関連.....	17
4.2.3 データベース関連(Java EE).....	19
4.2.4 データベース関連(データベース連携サービス).....	22
4.2.5 データベース関連(Interstage ディレクトリサービス).....	24
4.2.6 データベース関連(J2EE).....	26
4.2.7 セキュリティ.....	29
4.2.8 Webサーバ.....	29
4.2.9 管理コンソール.....	30
4.2.10 運用監視関連.....	30
4.2.11 高信頼機能.....	32
4.2.12 フレームワーク.....	32
4.2.13 その他.....	33
4.3 アプリケーション実行時に必要なクライアント側のソフトウェア.....	34
4.3.1 CORBAサービス／コンポーネントランザクションサービス／イベントサービス／データベース連携サービス.....	34
4.3.2 フレームワーク.....	36
4.3.3 その他.....	36
4.4 MessageQueueDirector使用時に必要なソフトウェア.....	37
4.5 MQ連携サービス使用時に必要なソフトウェア.....	38
4.6 グローバルサーバ／PRIMEFORCEのInterstage連携時に必要なソフトウェア.....	39
第5章 動作OSの違いによる注意事項.....	40
5.1 Windows Server(R) x64 Editions上での資源の移行についての注意事項.....	40
5.2 Windows Server(R) x64 Editionsの製品と、他のWindows製品間の差異について.....	40
5.3 Solaris 10で使用する場合の注意事項.....	42

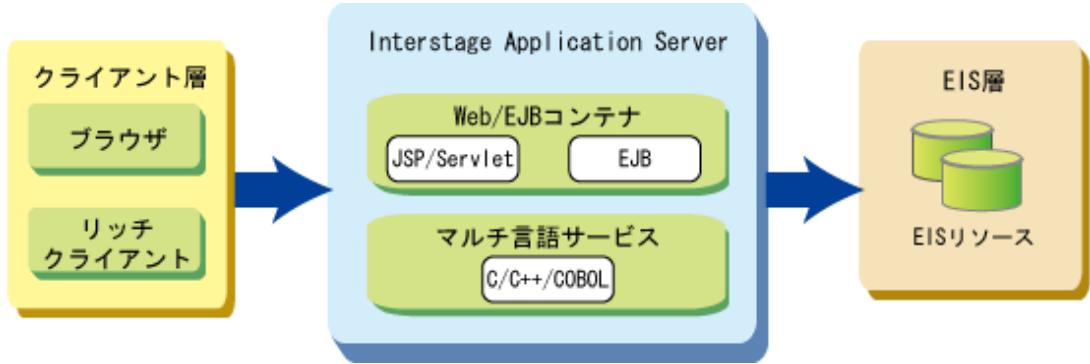
5.4 Solaris 11で使用する場合の注意事項.....	43
5.5 Linux上のアプリケーションの移行における注意事項 .....	44
5.6 Linux for Intel64上での資源の移行についての注意事項 .....	45
5.7 Linux for Intel64の製品と、他のLinux製品間の差異について .....	45
5.8 64bit版Solarisの製品と、他のSolaris製品間の差異について .....	47
<b>付録A ログ情報.....</b>	<b>51</b>
付録B ポート番号.....	97
付録C プロセス情報.....	117
<b>付録D メッセージ情報.....</b>	<b>154</b>
D.1 イベントログ .....	154
D.2 syslog.....	155
<b>付録E Java実行環境に関する情報.....</b>	<b>159</b>
<b>索引.....</b>	<b>161</b>

# 第1章 システム構成

本章では、Interstage Application Serverによるシステム構成について説明します。

## 1.1 シングルサーバ(スタンドアロン)

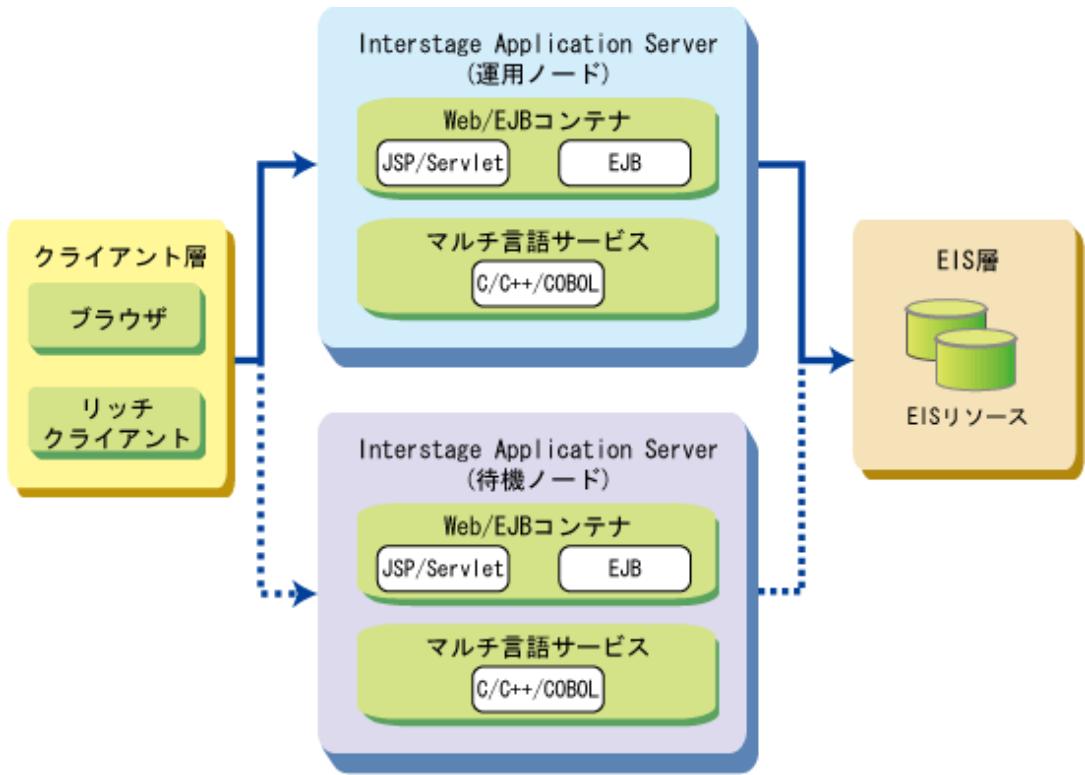
Interstage Application Serverの必要な機能をインストールした単体のサーバマシンで運用を行うシステムです。少ないシステム資源で簡単に構築できる半面、複数台のサーバマシンを使用する構成に比べると信頼性が劣るため、冗長化による信頼性の確保が要求されない、開発・テスト環境に適した構成です。



本構成の場合、インストール時に、サーバタイプの選択で、“アプリケーションサーバ機能をインストール”を選択します。標準インストールでは、Java EEアプリケーションの実行環境がインストールされます。その他の機能を使用する場合は、カスタムインストールで使用する機能を選択してください。  
インストールされる機能やインストール方法については、「インストールガイド」を参照してください。

## 1.2 クラスタシステム

業務運用中にハードウェア障害やソフトウェア障害など不測の事態が発生して、システムダウンなどに陥った場合に備え、クラスタサービス連携を使用することでシステムの高信頼化を実現できます。

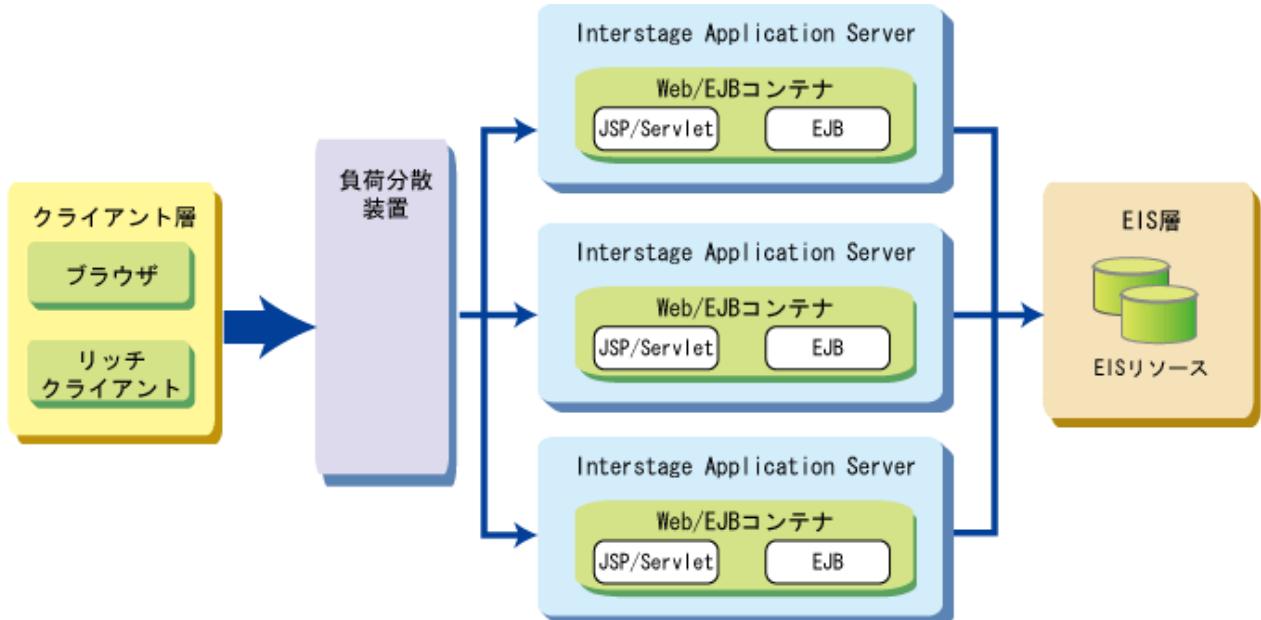


クラスタサービス連携を利用する場合、運用ノードと待機ノードのインストール構成は同じにします。  
クラスタサービス連携の詳細については、「高信頼性システム運用ガイド」を参照してください。

EE

## 1.3 負荷分散システム

同一構成のサーバマシンを2台以上用意し、クライアント層との間にIPCOMなどの負荷分散装置を配置することで、負荷分散システムを構築できます。



負荷分散システムにおいても、クラスタサービス連携を利用する場合と同様、すべてのノードのインストール構成は同じになります。

IPCOMとの連携機能については、「高信頼性システム運用ガイド」を参照してください。

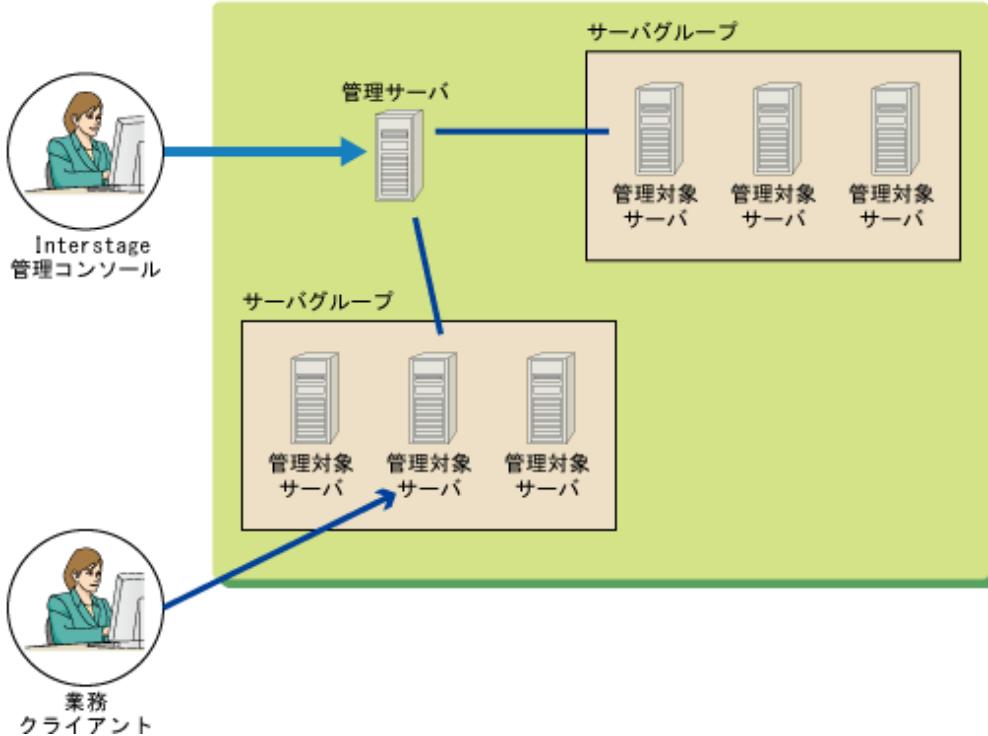
EE

## 1.4 マルチサーバ

Windows32/64 Solaris32 Linux32/64

マルチサーバとは、マルチサーバ管理機能を使用し、業務アプリケーションを複数のサーバで実行する環境です。マルチサーバ管理機能により、複数のサーバ(管理対象サーバ)で運用している業務を、管理サーバのInterstage管理コンソール上でサーバグループ単位に一括して管理することができます。

マルチサーバ管理の構成概略図を、以下に示します。



マルチサーバ管理機能については、「マルチサーバ運用ガイド」を参照してください。

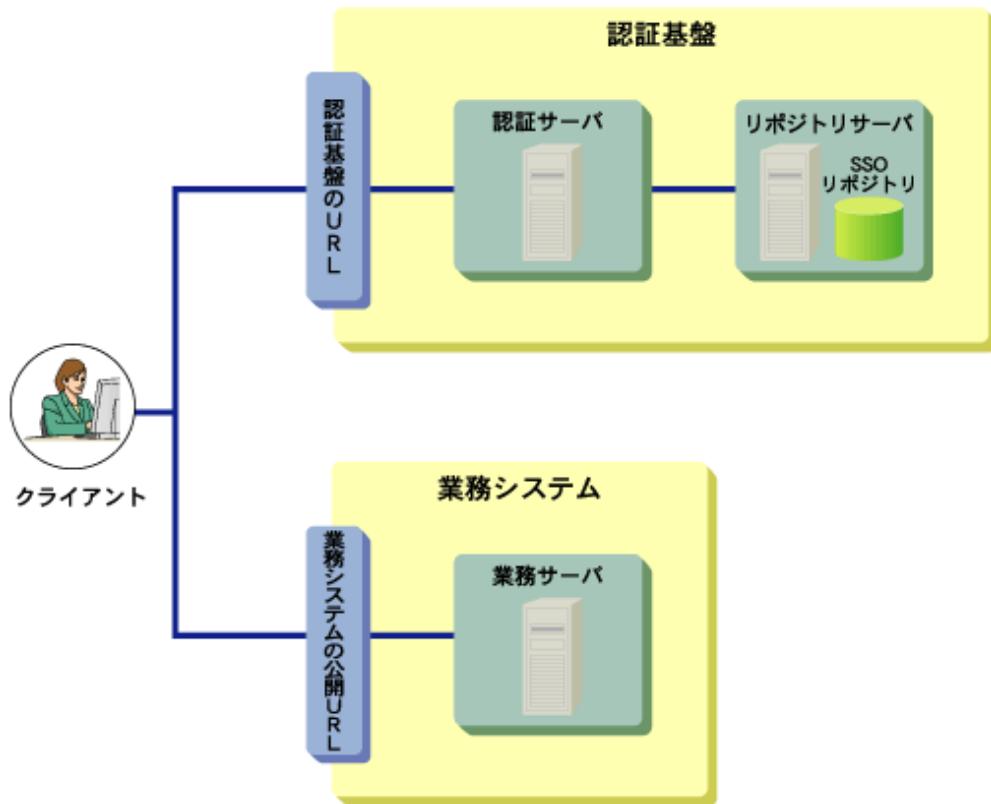
## 1.5 シングル・サインオン

シングル・サインオンとは、1度のサインオン(認証)で複数のWebサーバへのアクセスを可能(認可)とする機能です。

Interstage シングル・サインオンは、企業システムを構成する複数のWebサーバに対し、シングル・サインオン機能によって認証・認可の基盤を提供します。

Interstage シングル・サインオンのシステムは、認証基盤、業務システム、およびクライアントより構成されています。認証基盤には認証サーバ、リポジトリサーバ、およびSSOリポジトリが、業務システムには業務サーバが配置されています。

Interstage シングル・サインオンの基本的なシステム構成図は以下のとおりです。



認証基盤、および業務システムの機能は、それぞれ以下の製品で提供されています。

- 認証基盤
  - Interstage Application Server Enterprise Edition
  - Interstage Application Server Standard-J Edition
- 業務システム
  - Interstage Application Server Enterprise Edition
  - Interstage Application Server Standard-J Edition
  - Interstage Web Server Express

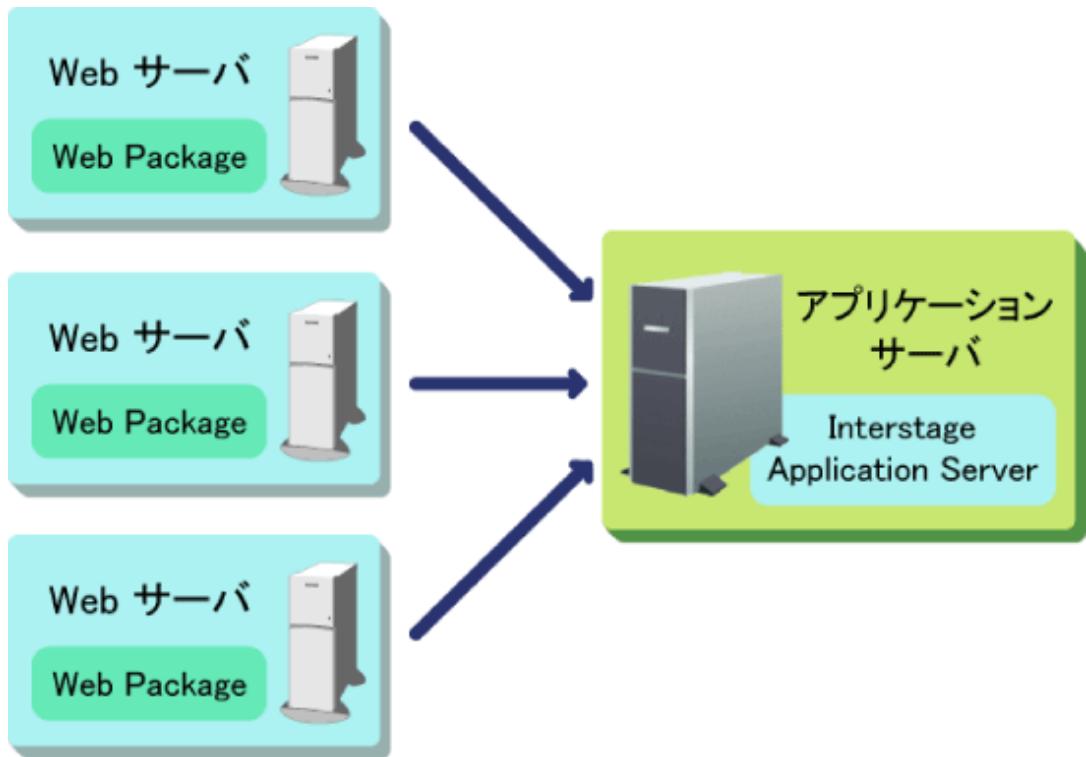
Interstage シングル・サインオン機能については、「シングル・サインオン運用ガイド」を参照してください。

## EE|SJE | 1.6 Web PackageによるWebサーバ Windows32 Solaris32 Linux32

Web Packageは、Webサーバ環境を構築・運用するための機能であり、以下の製品で提供されます。インストール時に、サーバタイプの選択で、“Web Package機能をインストール”を選択します。

- Interstage Application Server Enterprise Edition
- Interstage Application Server Standard-J Edition

Web Packageを使用すると、アプリケーションサーバのフロントサーバとして複数のWebサーバ環境を構築することができます。



Webサーバから、アプリケーションサーバで運用しているアプリケーションと通信できます。

また、Interstage Application Server Enterprise EditionのWeb Packageの場合、アプリケーションの運用マシンやアプリケーションの実行環境(IJServerクラスタのWebコンテナ、IJServerワークユニットのServletコンテナ)は、Webサーバコネクタの故障監視の監視対象にすることができます。これにより、故障した監視対象を自動的に振り分けの対象から除外したり、復旧した監視対象を自動的に振り分けの対象に戻すことができます。

Web Packageに関する機能の詳細は、以下を参照してください。

機能	参照マニュアル
Webサーバ全般	
Interstage HTTP Server(Apache HTTP Server Version 2.0ベースのWebサーバ)の場合	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」
Interstage HTTP Server 2.2(Apache HTTP Server Version 2.2ベースのWebサーバ)の場合	「Interstage HTTP Server 2.2 運用ガイド」
WebサーバコネクタおよびWebサーバコネクタの故障監視	
Java EE 5の場合	「Java EE運用ガイド」の「Java EEアプリケーションの運用」-「Webサーバコネクタにおけるリクエストの振り分け制御」
Java EE 6の場合	「Java EE運用ガイド(Java EE 6編)」の「Java EEアプリケーション実行環境の提供機能」-「Webサーバコネクタ」
J2EEの場合	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「J2EEアプリケーションの運用」-「Webサーバコネクタにおけるリクエストの振り分け制御」
コマンド	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「Web Packageで使用できるコマンド」

## 第2章 Java EEのシステム設計

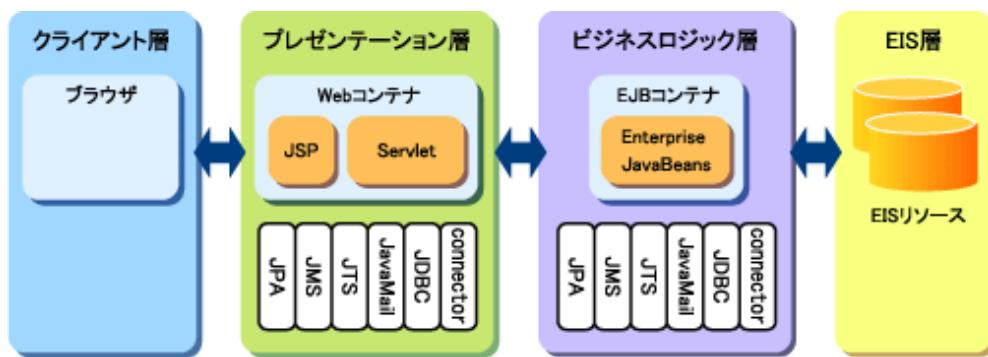
ここでは、Java EEのシステム設計について説明します。

### 2.1 システム形態

Java EEでは、以下のようなシステム形態を推奨しています。Java EE機能を使用してシステムを構築する場合は、このシステム形態を意識して設計します。

また、システムを構築する場合、システム設計者はInterstageが提供するJava EEのコンポーネントを組み合わせて自由にシステムを構築することができます。

Java EEの詳細については、「Java EE運用ガイド」を参照してください。



- **Client Layer**  
システムに接続するユーザインターフェースを提供します。Webブラウザを基本としていますが、Javaアプリケーションもクライアントとして想定されています。
- **Presentation Layer**  
プレゼンテーションのロジックをカプセル化した上で、システムを利用するクライアントからのリクエストを受け付け、ビジネスロジック層のサービスへの橋渡しなどを行ってレスポンスをクライアントに返送するサービスを提供します。この層では主として、ServletやJSPなどのコンポーネントが使用されます。
- **Business Logic Layer**  
プレゼンテーション層などからの要求に応じて業務処理やデータ提供などのビジネスサービスを供給します。一般的にこの層で業務に関する処理が行われますが、既存システムなどの資産がある場合はEIS層のリソースを利用する場合もあります。この層では主として、Enterprise JavaBeans やWebサービスを使用してビジネスロジックが実装されます。
- **EIS(Enterprise Information System)層**  
データベース、メインフレーム上で動作するレガシーシステムやパッケージソフトなどのリソースを提供します。

### 2.2 主な運用形態

ここでは、Java EEの主な運用形態について説明します。

運用形態を検討する場合、以下やその組み合わせについて考慮する必要があります。

- Webサーバを経由するか、どうか。
- 多重プロセスでの運用を行うか、どうか。

- 複数台のマシンでの運用を行うか、どうか。

詳細は以下を参照してください。

「Java EE運用ガイド」-「Java EEアプリケーションの運用」

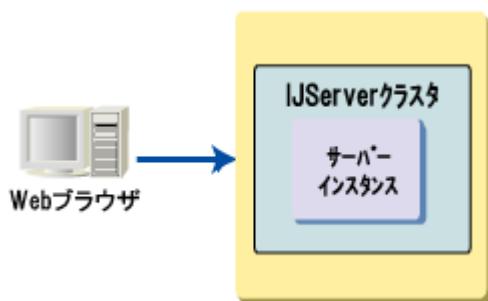
## 2.2.1 Webサーバ経由の運用

Webサーバ固有の機能を使用するかどうかによって、Webサーバを経由するかを決めます。

Webサーバ固有の機能については、「Java EE運用ガイド」の「Interstage HTTP Serverとの機能比較」を参照してください。

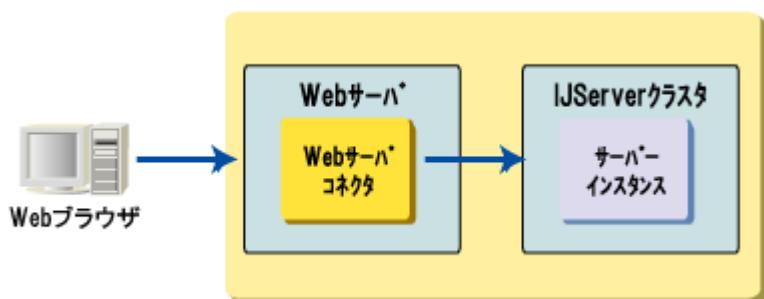
### ■Webサーバを経由しない場合

標準インストールで提供される運用形態です。



### ■Webサーバを経由する場合

カスタムインストールで"Webサーバコネクタ"機能を選択してインストールをしてください。

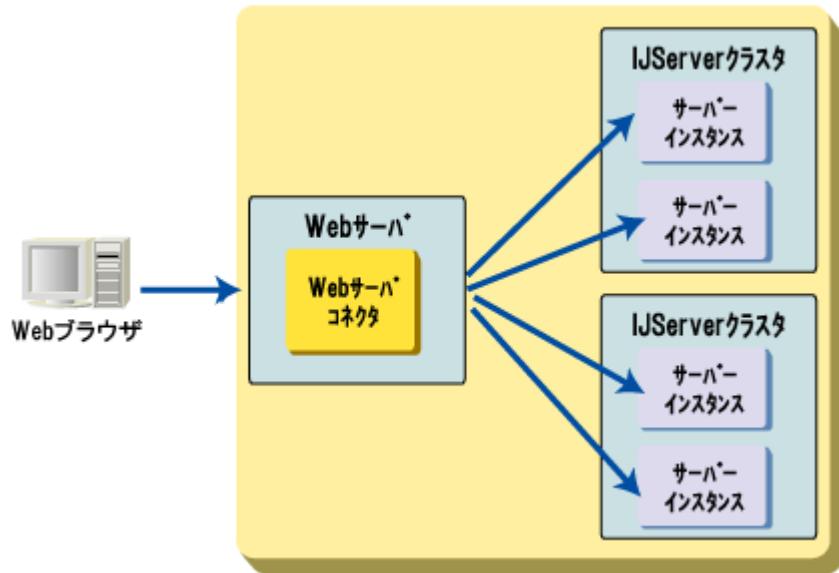


## 2.2.2 単数マシンでの多重プロセス運用

多重プロセスによる運用には、以下の場合があります。また、以下を組み合わせることもできます。

- 1つのIJServerクラスタの中に複数のサーバーインスタンスを作成する場合
- 複数のIJServerクラスタを作成して運用する場合

1台のマシンで多重プロセス運用を行う場合は、Webブラウザからのリクエストを各プロセスに振り分けるためにWebサーバ(Webサーバコネクタ)を使用します。



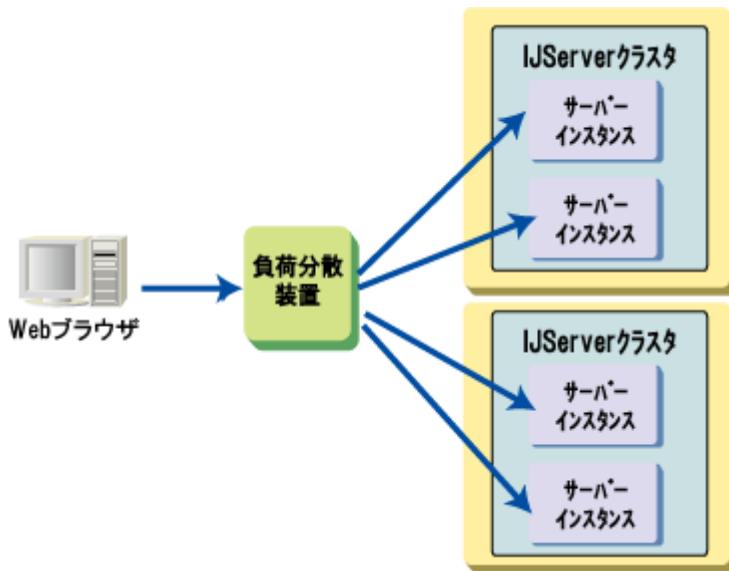
### 2.2.3 複数マシンでの多重プロセス運用

同一構成のマシンを複数台用意し、負荷分散を行う場合の運用形態です。多重プロセスによる運用については、単一マシンの場合と同じです。

Java EEのIJServerクラスタを運用するマシンの他に、負荷分散装置が必要になります。

#### ■Webサーバを経由しない場合

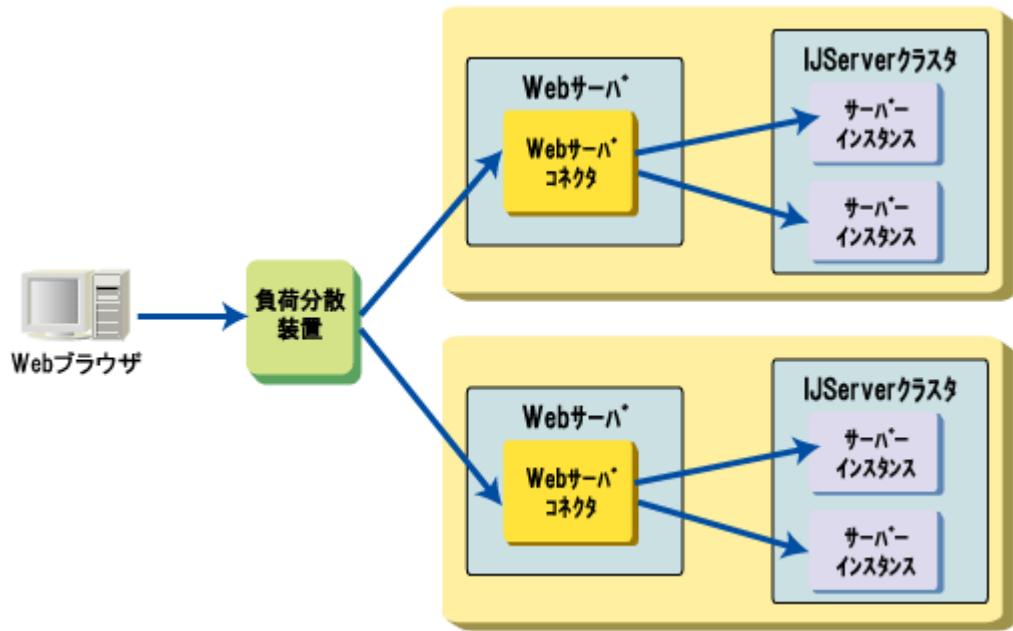
リクエストが適切なサーバーインスタンスに割り振られるように負荷分散装置を設定する必要があります。



#### ■Webサーバを経由する場合

リクエストが適切なサーバーに割り振られるように負荷分散装置を設定する必要があります。

サーバーに割り振られたリクエストはWebサーバ(WEBサーバコネクタ)によってサーバーインスタンスにリクエストが割り振られます。



## 第3章 マルチ言語サービスのシステム設計

本製品では、マルチ言語サービスとして、主に以下の機能(サービス)が提供されています。

- CORBAサービス
- イベントサービス
- データベース連携サービス Windows32/64 Solaris32 Linux32/64
- MessageQueueDirector Windows32/64 Solaris32 Linux32/64

マルチ言語サービスのシステム設計は、使用する機能(サービス)に応じて実施する必要があります。  
詳細は、各機能(サービス)に関するマニュアルを参照してください。

機能(サービス)名	関連マニュアル
CORBAサービス	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)
イベントサービス	アプリケーション作成ガイド(イベントサービス編)
<span style="background-color: green; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> <span style="background-color: orange; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32</span> <span style="background-color: red; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> データベース連携サービス	アプリケーション作成ガイド(データベース連携サービス編)
<span style="background-color: green; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> <span style="background-color: orange; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32</span> <span style="background-color: red; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> MessageQueueDirector	MessageQueueDirector説明書

## 第4章 ソフトウェア条件

本ソフトウェアの特定の機能を使用する場合に必要となるソフトウェアについて説明します。

### 4.1 アプリケーション開発時に必要なソフトウェア

アプリケーション開発時に必要なソフトウェアについて説明します。

アプリケーションの動作確認などを行う際に必要なソフトウェアについては、“[4.2 アプリケーション実行時に必要なソフトウェア](#)”または“[4.3 アプリケーション実行時に必要なクライアント側のソフトウェア](#)”を参照してください。

#### 4.1.1 Javaの開発環境

##### 4.1.1.1 サーバアプリケーション

機能名	製品名/バージョン・レベル	
Java EEアプリケーション開発 (注1)	Interstage Studio Enterprise Edition	V9.2.0 (注2)
	Interstage Studio Standard-J Edition	V10.0.0以降 (注2)
<b>EE</b> <b>SJE</b> J2EEアプリケーション開発 (注1)	Interstage Studio Enterprise Edition	V9.0.0～V9.2.0 (注2)
	Interstage Studio Standard-J Edition	V10.0.0以降 (注2)
Interstage シングル・サインオンを利用したJavaアプリケーション開発 (注1)	Interstage Studio Enterprise Edition	V9.0.0～V9.2.0 (注2)
	Interstage Studio Standard-J Edition	V10.0.0以降 (注2)
<b>EE</b> CORBAサービス ・Javaアプリケーション開発 (注3)  イベントサービス ・Javaアプリケーション開発 (注3)  Windows32/64 Solaris32 Linux32/64 データベース連携サービス ・Javaアプリケーションの開発 (注3)	Interstage Studio Enterprise Edition	V9.0.0～V9.2.0
	Interstage Studio Standard-J Edition	V10.0.0以降

##### 注1)

記載されている製品を推奨します。

また、Interstage Studio以外の開発環境を利用してアプリケーションを開発する場合、開発環境でデバッグ・実行した結果と、Interstage Application Server上での実行結果が異なる場合があります。

##### 注2)

開発環境(Interstage Studio)と運用環境(Interstage Application Server)のバージョンは一致させることを推奨します。また、IJServerビュー機能、JSPのリモートデバッグ機能、またはフレームワーク機能を使用する場合は、Interstage Application Serverと同じバージョンを使用してください。

##### 注3)

他の製品を使用して開発する場合は、“アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)”に説明されている範囲の機能、および本製品で提供しているIDLコンパイラで生成したJavaソースを使用して開発してください。

OMGのCORBA規約に準拠していない機能を使用したアプリケーション、および本製品のIDLコンパイラで生成したJavaソース以外を使用したCORBA-Javaアプリケーションは運用できません。

#### 4.1.1.2 クライアントアプリケーション

機能名	製品名/バージョン・レベル	
CORBAサービス ・Javaクライアントアプリケーション開発 <a href="#">(注1)</a>	Interstage Studio Enterprise Edition	V9.0.0～V9.2.0
イベントサービス ・Javaクライアントアプリケーション開発 <a href="#">(注1)</a>	Interstage Studio Standard-J Edition	V10.0.0以降

##### 注1)

他の製品を使用して開発する場合は、“アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)”に説明されている範囲の機能、および本製品で提供しているIDLコンパイラで生成したJavaソースを使用して開発してください。

OMGのCORBA規約に準拠していない機能を使用したアプリケーション、および本製品のIDLコンパイラで生成したJavaソース以外を使用したCORBA-Javaアプリケーションは運用できません。

EE

#### 4.1.2 C/C++関連の開発環境

##### 4.1.2.1 サーバアプリケーション

###### Windows (R)の場合 [Windows32/64](#)

機能名	製品名/バージョン・レベル	Windows32	Windows64
CORBAサービス ・Cアプリケーション開発 ・C++アプリケーション開発	Microsoft(R) Visual C++(R) .NET Standard 2003 Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Team Edition	<input type="radio"/>	—
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) Team System 2008	<input type="radio"/>	<a href="#">○ (注1)</a>
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Ultimate Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Premium Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Professional	<a href="#">○ (注1)</a>	<a href="#">○ (注1)</a>
コンポーネントトランザクションサービス ・Cアプリケーション開発 ・C++アプリケーション開発 ・tdlinkapmコマンド実行時	Microsoft(R) Visual C++(R) .NET Standard 2003 Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Team Edition	<input type="radio"/>	—
イベントサービス ・Cアプリケーション開発 ・C++アプリケーション開発	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Team Edition	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

機能名	製品名/バージョン・レベル	Windows32	Windows64
データベース連携サービス ・Cアプリケーション開発 ・リソース管理プログラム作成 ・XA連携用プログラム <b>Windows32</b> ・C++アプリケーション開発	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) Team System 2008	<input type="radio"/>	<input type="radio"/> (注2)
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Ultimate Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Premium Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Professional	<input type="radio"/> (注2)	<input type="radio"/> (注2)
LDAP SDKを使用するアプリケーションの開発	Microsoft(R) Visual C++(R) .NET Standard 2003 Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Team Edition	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) Team System 2008	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Ultimate Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Premium Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Professional	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
CORBAサービス ・OLEアプリケーション開発	Microsoft(R) Visual Basic 6.0	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

**注1)**

C++のサーバアプリケーションを開発する場合は、any型を使用できません。

**注2)**

C++のサーバアプリケーションを開発する場合は、本製品を使用できません。

**Solarisの場合** Solaris32/64

機能名	製品名/バージョン・レベル	Solaris32	Solaris64
C/C++アプリケーション開発	Oracle Solaris Studio 12.3	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	Oracle Solaris Studio 12.2	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

機能名	製品名/バージョン・レベル	Solaris32	Solaris64
	Sun Studio 12 Update 1	○	○
	Sun Studio 12	○	○
	Sun Studio 11	○	○
	Sun Studio 10	○	—
	Sun Studio 9	○	—
	Sun ONE Studio 8 シリーズ 以下のコンポーネントが使用可能です。 – Sun ONE Studio 8 Compiler C – Sun ONE Studio 8 Compiler C++	○	—
	Sun ONE Studio 7 シリーズ 以下のコンポーネントが使用可能です。 – Forte Developer 7 Compiler C – Forte Developer 7 Compiler C++	○	—
	Forte Developer 6 シリーズ 以下のコンポーネントが使用可能です。 – WS Compilers C 6 – WS Compilers C++ 6	○	—

#### Linuxの場合 Linux32/64

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
C/C++アプリケーション開発 IDLcコマンド実行	OS製品に含まれている以下のパッケージを使用してください。コンパイラはデフォルトのバージョンを使用してください。 binutils cpp gcc gcc-c++ libstdc++-devel glibc-devel glibc-headers glibc-kernheaders make	(注1)

#### 注1) Linux64

OSの標準インストールでは、パッケージがインストールされていない場合があります。“rpm”コマンドでパッケージがインストールされているか確認してください。インストールされていない場合はOS CDからインストールを行ってください。

#### 4.1.2.2 クライアントアプリケーション

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
CORBAサービス ・Cクライアントアプリケーション開発 ・C++クライアントアプリケーション開発	Microsoft(R) Visual C++(R) .NET Standard 2003 Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Team Edition	

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) Team System 2008	
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Ultimate Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Premium Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Professional	(注1)
イベントサービス ・Cクライアントアプリケーション開発 ・C++クライアントアプリケーション開発	Microsoft(R) Visual C++(R) .NET Standard 2003	
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Team Edition	
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) Team System 2008	
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Ultimate Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Premium Microsoft(R) Visual Studio(R) 2010 Professional	(注2)

#### 注1)

C++のクライアントアプリケーションを開発する場合は、any型を使用できません。

#### 注2)

C++のクライアントアプリケーションを開発する場合は、本製品を使用できません。

EE

### 4.1.3 COBOL関連の開発環境

#### 4.1.3.1 サーバアプリケーション

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
Windows32  CORBAサービス ・COBOLアプリケーション開発 ・OOCOBOLアプリケーションの開発  イベントサービス ・COBOLアプリケーション開発  データベース連携サービス ・COBOLアプリケーション開発  コンポーネントトランザクションサービス ・COBOLアプリケーション開発	NetCOBOL Base Edition for Windows NetCOBOL Standard Edition for Windows	V7.0
	NetCOBOL Base Edition 開発パッケージ for Windows NetCOBOL Standard Edition 開発パッケージ for Windows	V7.2 V8.0
	NetCOBOL Professional Edition 開発パッケージ for Windows	
	NetCOBOL Base Edition 開発パッケージ NetCOBOL Standard Edition 開発パッケージ NetCOBOL Professional Edition 開発パッケージ	V9.0 V10
	NetCOBOL Enterprise Edition 開発パッケージ	V10
Windows64  CORBAサービス ・COBOLアプリケーション開発  イベントサービス ・COBOLアプリケーション開発	NetCOBOL Base Edition 開発パッケージ (64bit) NetCOBOL Standard Edition 開発パッケージ (64bit) NetCOBOL Enterprise Edition 開発パッケージ (64bit)	V10 (注1)
Solaris32	NetCOBOL Base Edition 開発・運用パッケージ NetCOBOL Standard Edition 開発・運用パッケージ	V9 V10

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
CORBAサービス ・COBOLアプリケーション開発 ・OOCOBOLアプリケーション開発 イベントサービス ・COBOLアプリケーション開発 データベース連携サービス ・COBOLアプリケーション開発 コンポーネントトランザクションサービス ・COBOLアプリケーション開発	NetCOBOL Professional Edition 開発・運用パッケージ NetCOBOL Enterprise Edition 開発・運用パッケージ	
<b>Solaris64</b> CORBAサービス ・COBOLアプリケーション開発 イベントサービス ・COBOLアプリケーション開発	NetCOBOL Enterprise Edition 開発・運用パッケージ (64bit)	V10.5 (注1) (注2)
<b>Linux32</b> CORBAサービス ・COBOLアプリケーション開発 ・OOCOBOLアプリケーション開発 イベントサービス ・COBOLアプリケーション開発	NetCOBOL Base Edition 開発・運用パッケージ NetCOBOL Standard Edition 開発・運用パッケージ NetCOBOL Enterprise Edition 開発・運用パッケージ	V7.3
<b>Linux64</b> CORBAサービス ・COBOLアプリケーション開発 イベントサービス ・COBOLアプリケーション開発	NetCOBOL Base Edition 開発・運用パッケージ (64bit) NetCOBOL Standard Edition 開発・運用パッケージ (64bit) NetCOBOL Enterprise Edition 開発・運用パッケージ (64bit)	V10 (注1)

### 注1)

本製品と同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。

### 注2)

以下のパッチを適用して使用してください。

- T009135SP-01
- T009193SP-01

#### 4.1.3.2 クライアントアプリケーション

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
CORBAサービス ・COBOLクライアントアプリケーションの開発 ・OOCOBOLクライアントアプリケーション開発 イベントサービス	NetCOBOL Base Edition for Windows NetCOBOL Standard Edition for Windows	V7.0
	NetCOBOL Base Edition 開発パッケージ for Windows NetCOBOL Standard Edition 開発パッケージ for Windows NetCOBOL Professional Edition 開発パッケージ for Windows	V7.2 V8.0

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
・COBOLクライアントアプリケーション開発	NetCOBOL Base Edition 開発パッケージ NetCOBOL Standard Edition 開発パッケージ NetCOBOL Professional Edition 開発パッケージ NetCOBOL Enterprise Edition 開発パッケージ	V9.0 V10

EE SJE

#### 4.1.4 フレームワーク

機能名	製品名/バージョン・レベル
フレームワークのFlash連携機能を使用する場合	Flash(R) 8 ~11

上記以外のアプリケーション開発に必要なフレームワーク関連のソフトウェアについては、“アプリケーション実行時に必要なソフトウェア”的“[4.2.12 フレームワーク](#)”を参照してください。

#### 4.2 アプリケーション実行時に必要なソフトウェア

アプリケーション実行時に必要なソフトウェアについて説明します。

## 4.2.1 C/C++関連

機能名	製品名/バージョン・レベル
Visual Studio で作成したアプリケーションの運用	Visual Studio 付属の再頒布用ランタイム ( <a href="#">注1</a> )

注1)

再頒布用ランタイムの詳細はVisual Studioのマニュアルを参照してください。

Interstageをインストールすると“Microsoft Visual C++ 2005再頒布可能パッケージ”がインストールされる場合がありますが、その場合でも再頒布用ランタイムのインストールが必要になる場合があります。

EE

## 4.2.2 COBOL関連

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
<b>Windows32</b>		
CORBAサービス ・COBOLサーバアプリケーション運用 ・OODCBOLサーバアプリケーション運用 イベントサービス ・COBOLサーバアプリケーション運用 データベース連携サービス ・COBOLサーバアプリケーション運用	NetCOBOL Base Edition サーバ運用パッケージ for Windows NetCOBOL Standard Edition サーバ運用パッケージ for Windows  NetCOBOL Base Edition サーバ運用パッケージ NetCOBOL Standard Edition サーバ運用パッケージ NetCOBOL Enterprise Edition サーバ運用パッケージ	V7.0 V7.2 V8.0  V9.0 V10
		(注1)
		(注1)

機能名	製品名/バージョン・レベル	備考
コンポーネントランザクションサービス ・COBOLサーバアプリケーション運用		
<b>Windows64</b>  CORBAサービス ・COBOLサーバアプリケーション運用  イベントサービス ・COBOLサーバアプリケーション運用	NetCOBOL Base Edition サーバ運用パッケージ(64bit) NetCOBOL Standard Edition サーバ運用パッケージ(64bit) NetCOBOL Enterprise Edition サーバ運用パッケージ(64bit)	V10 (注2)
<b>Solaris32</b>  CORBAサービス ・COBOLアプリケーション運用 ・OOCOBOLアプリケーション運用  イベントサービス ・COBOLアプリケーション運用  データベース連携サービス ・COBOLアプリケーション運用  コンポーネントランザクションサービス ・COBOLアプリケーション運用	NetCOBOL Base Edition 運用パッケージ NetCOBOL Standard Edition 運用パッケージ NetCOBOL Enterprise Edition 運用パッケージ	V9 V10
<b>Solaris64</b>  CORBAサービス ・COBOLアプリケーション運用  イベントサービス ・COBOLアプリケーション運用	NetCOBOL Enterprise Edition 運用パッケージ(64bit)	V10. 5 (注2) (注3)
<b>Linux32</b>  CORBAサービス ・COBOLアプリケーション運用 ・OOCOBOLアプリケーション運用  イベントサービス ・COBOLアプリケーション運用	NetCOBOL Base Edition 運用パッケージ NetCOBOL Standard Edition 運用パッケージ NetCOBOL Enterprise Edition 運用パッケージ	V7.3
<b>Linux64</b>  CORBAサービス ・COBOLアプリケーション運用  イベントサービス ・COBOLアプリケーション運用	NetCOBOL Base Edition 運用パッケージ(64bit) NetCOBOL Standard Edition 運用パッケージ(64bit) NetCOBOL Enterprise Edition 運用パッケージ(64bit)	V10 (注2)

**注1)**

NetCOBOLシリーズには、開発系製品および運用系製品（運用パッケージ）があります。COBOLアプリケーションを実行するには、運用系製品が必要です。なお、開発系製品でも実行可能です。

**注2)**

本製品と同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。

### 注3)

以下のパッチを適用して使用してください。

- T009135SP-01

## 4.2.3 データベース関連(Java EE)



### 注意

- ・ アプリケーション開発時には製品に同梱されているJava DBを使用することにより、開発効率が向上します。Java DBは、アプリケーションの開発効率向上だけを目的として同梱しているため開発時にのみ使用してください。詳細は、「Java EE運用ガイド」-「Java DB」を参照してください。
- ・ 利用するOSによってデータベースおよびJDBCドライバの動作条件が異なります。  
データベースおよびJDBCドライバの動作条件、サポート範囲については提供元に確認してください。
- ・ **Solaris32/64**  
OSが32ビットの場合は32ビット版のJDBCドライバ、64ビットの場合は64ビット版のJDBCドライバを使用してください。  
Solaris 11を使用する場合はSolaris 11をサポートしているJDBCドライバを利用してください。

業務運用時には、以下のいずれかのデータベースを必ず使用してください。

### Symfoware Serverを使用したアプリケーションを運用する場合

Symfoware ServerのNativeインターフェースを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Serverクライアント機能	10.0以降
Solaris	Symfoware Serverクライアント機能	10.0以降
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Serverクライアント機能	10.0以降
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Serverクライアント機能	10.1以降

Symfoware ServerのOpenインターフェースを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Serverクライアント機能	12.0以降
Solaris	Symfoware Serverクライアント機能	12.0以降
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Serverクライアント機能	12.0以降
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Serverクライアント機能	12.0以降

- ・ Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしているJDBCドライバを使用してください。

- ・ Symfoware ServerのNativeインターフェースを使用する場合、Symfoware Server Connection Manager機能の使用を推奨します。

### Oracleを使用したアプリケーションを運用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Oracle JDBC Driver	11.1、11.2、12.1
Solaris	Oracle JDBC Driver	11.1、11.2、12.1
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Oracle JDBC Driver	11.1、11.2、12.1
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Oracle JDBC Driver	11.2、12.1

- ・ Oracleを使用する場合、Oracle社が提供するJDBCドライバを使用してください。
- ・ トランザクションサービス、またはJTAによるグローバルトランザクション機能を使用する場合、実行ユーザに対し以下の権限を付与してください。
  - SYS.DBMS\_SYSTEM上のEXECUTE権限
- ・ グローバルトランザクションのリカバリを実行する場合は、実行ユーザに対して以下の権限を付与してください。
  - DBA\_PENDING\_TRANSACTIONS上のSELECT権限
  - SYS.DBMS\_XA上のEXECUTE権限
  - SYS.PENDING\_TRANS\$上のSELECT権限
- Oracle Database 11g Release 1以前のバージョンのOracleデータベースサーバかつOracle Bug#5945463の修正を含むOracleパッチを適用しない場合は、更に以下の権限も付与してください。
  - SYS.DBMS\_SYSTEM上のEXECUTE権限
- ・ 各JDBCドライバによってサポートするJava SEが異なりますので、使用するJava SEに応じたJDBCドライバを選択してください。
  - ・ Oracle JDBC Driverのバージョンが11.1.0.6の場合、ConnectionEventListenerが未実装です。このため、リソースタイプに以下を指定すると誤動作する場合があります。以下のリソースタイプを使用する場合には、ConnectionEventListenerが実装されている修正パッチを、Oracle製品のSupportDesk契約に基づいて、SupportDeskから入手して適用してください。
    - javax.sql.XADataSource
    - javax.sql.ConnectionPoolDataSource
- ・ Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしているJDBCドライバを使用してください。
- ・ Oracleを利用する時、Oracle Universal Connection Pool(UCP)for JDBC機能を利用できます。
  - Oracle Universal Connection Pool(UCP)for JDBC機能をする場合、接続プールの詳細属性「プーリング」を「false」に設定してください。(注1)
- ・ Oracleを利用する時、Oracle Real Application Clustersと連携できます。
  - Oracle10g以降のRAC環境において高速接続フェイルオーバー機能を利用する場合、接続プールの詳細属性「プーリング」を「false」に設定してください。(注1)
  - Oracle RACと連携する場合、接続プールの詳細属性「作成再試行回数」、「再試行間隔」を設定した運用を推奨します。(注1)
  - グローバルトランザクション(XADataSource)でOracle RACを使用する場合は、Oracle Universal Connection Pool(UCP)for JDBC機能を使用してください。

- Oracle JDBC Driverのバージョン12.1でサポートしたJDBC4.1規約範囲の機能は使用できません。

注1):接続プールの詳細属性の設定は、「Java EE運用ガイド」—「JDBC接続プールの定義項目」を参照してください。

### SQL Serverを使用したアプリケーションを運用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Microsoft SQL Server JDBC Driver	2.0、3.0
	Microsoft JDBC Driver for SQL Server	4.0
Solaris	Microsoft SQL Server JDBC Driver	2.0、3.0
	Microsoft JDBC Driver for SQL Server	4.0
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Microsoft SQL Server JDBC Driver	2.0、3.0
	Microsoft JDBC Driver for SQL Server	4.0
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Microsoft SQL Server JDBC Driver	2.0、3.0
	Microsoft JDBC Driver for SQL Server	4.0

- Windows Server(R) 2003 x64 Editionsで使用する場合、Service Pack 4以降を使用してください。

### PowerGres Plusを使用したアプリケーションを運用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)(x64)	PowerGres Plusクライアント	V9
RHEL5(Intel64)	PowerGres Plusクライアント	V9
RHEL6(Intel64)	PowerGres Plusクライアント	V9

- 上表に記載されているプラットフォームは、PowerGres Plus側のドライバがサポートするOSです。  
32bit版のInterstage Application Serverで使用する場合は、Interstage Application ServerをIntel 64またはx64アーキテクチャのプラットフォームにインストールしてください。
- PostgreSQLは分散トランザクションをサポートしないため、分散トランザクション機能を使用する場合、PowerGres Plusは使用できません。

### FUJITSU Integrated System HA Database Ready SX1を使用したJava EEアプリケーションを運用する場合

Native SQLを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Server Client	V11.0.2
Solaris(32bit)	Symfoware Server Client	V11.0.2

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Server Client	V11.0.2
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Server Client	V11.0.2

- Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしているJDBCドライバを使用してください。
- Symfoware Server Connection Manager機能を使用してください。

Open SQLを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Open SQL Client	V1.0.0
Solaris(32bit)	Open SQL Client	V1.0.0
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Open SQL Client	V1.0.0
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Open SQL Client	V1.0.0

- 分散トランザクション機能は、使用できません。

EE

#### 4.2.4 データベース関連(データベース連携サービス)

Windows32/64 Solaris32

Linux32/64

データベース連携サービスが対応しているデータベース製品を以下に示します。

##### Symfoware/RDBを使用する場合(アプリケーション開発時/実行時)

データベースを運用するプラットフォーム	製品名/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	8.0.0以降
	Symfoware Server Lite Edition	10.1.1A以降
Solaris	Symfoware Server Enterprise Extended Edition Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	8.0.0以降
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	9.0.1以降
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	10.1.0以降

## アプリケーション開発時の注意事項

### 注1)

Symfoware/RDBが提供しているライブラリが必要です。Symfoware/RDBのサーバ機能、またはクライアント機能をインストールしてください。

## アプリケーション実行時の注意事項

### 注1)

Symfoware/RDBがV10以降の場合、データベース連携サービスとSymfoware Serverを別々のマシンで運用できます。データベース連携サービスとSymfoware Serverを別々のマシンで運用する場合は、データベース連携サービスを運用するマシンに、Symfoware Server クライアント機能をインストールしてください。

### 注2) Windows64 Linux64

データベース連携サービスを運用するマシンにインストールするSymfoware/RDBは、Interstageとアーキテクチャを合わせる必要があります。Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしているSymfoware/RDBを使用してください。

## Oracleデータベースを使用する場合(アプリケーション開発時／実行時)

データベースを運用するプラットフォーム	製品名/バージョン・レベル	
Windows(R)	Oracle Database Enterprise Edition Oracle Database Standard Edition Oracle Database Standard Edition One	10.1.0、10.2.0、 11.1、または11.2
Solaris	Oracle Database Enterprise Edition Oracle Database Standard Edition Oracle Database Standard Edition One	10.1.0、10.2.0、 11.1、または11.2
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Oracle Database Standard Edition Oracle Database Enterprise Edition	11.1、または11.2

## アプリケーション開発時の注意事項

### 注1)

Oracle Databaseが提供しているライブラリが必要です。Oracle Databaseのサーバ機能、またはクライアント機能をインストールしてください。

### 注2) Solaris32

Solaris版Oracleデータベース11.2を使用する場合は、Oracle Database Client (32-bit)をインストールしてください。

### 注3)

JTSを使用する場合は、J2EEがサポートしているJDBCドライバを確認し、利用可能なOracleデータベースを使用してください。J2EEがサポートしているJDBCドライバについては、「[4.2.6 データベース関連\(J2EE\)](#)」を参照してください。

## アプリケーション実行時の注意事項

### 注1)

データベース連携サービスとOracle Databaseを別々のマシンで運用する場合は、データベース連携サービスを運用するマシンに、Oracle Database Clientをインストールしてください。

### 注2) Solaris32

Solaris版Oracleデータベース11.2を使用する場合は、Oracle Database Client (32-bit)をインストールしてください。

### 注3) Windows64 Linux64

データベース連携サービスを運用するマシンにインストールするOracle Database Clientは、Interstageとアーキテクチャを合わせる必要があります。Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしているOracle Database Clientを使用してください。

### 注4)

JTSを使用する場合は、J2EEがサポートしているJDBCドライバを確認し、利用可能なOracleデータベースを使用してください。J2EEがサポートしているJDBCドライバについては、「[4.2.6 データベース関連\(J2EE\)](#)」を参照してください。

## SQL Serverを使用する場合(アプリケーション実行時)

データベースを運用するプラットフォーム	製品名/バージョン・レベル	
Windows(R)	SQL Server Enterprise Edition SQL Server Standard Edition SQL Server Personal Edition SQL Server Developer Edition SQL Server Enterprise Evaluation Edition SQL Server Workgroup Edition SQL Server Desktop Engine Edition	2000

### 注1)

SQL Serverを使用したデータベース連携サービスのアプリケーションの運用は、V7.0L11以前のInterstage Application Server(開発環境としてMicrosoft(R) Visual C++ 6.0をサポートしている製品)で作成したアプリケーションだけをサポートしています。

### 注2)

SQL Server 2000 Service Pack 3 以降を使用してください。

### 注3)

Windows Server(R) 2003 x64 Editionsで使用する場合、Service Pack 4以降を使用してください。

## 4.2.5 データベース関連(Interstage ディレクトリサービス)

Interstage ディレクトリサービスが対応しているデータベース製品を示します。

## リポジトリのデータベースとしてSymfoware/RDBを使用する場合

データベースを運用するプラットフォーム	製品名/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	8.0.0～11.0.0
	Symfoware Server Lite Edition	10.1.1A～11.0.0
Solaris	Symfoware Server Enterprise Extended Edition Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	8.0.0～11.0.1
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	9.0.0～11.0.1
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	10.1.0～11.0.1

### 注1)

Interstage ディレクトリサービスとSymfoware Serverを別々のマシンで運用する場合は、Interstage ディレクトリサービスを運用するマシンに、Symfoware Server クライアント機能をインストールする必要があります。Symfoware Serverクライアント機能は、Symfoware Serverのサーバ機能と同一バージョンを使用してください。

#### Solaris32

32ビット版のJDBCドライバをサポートしているSymfoware Server クライアント機能を使用してください。

#### Solaris64

64ビット版のJDBCドライバをサポートしているSymfoware Server クライアント機能を使用してください。

### 注2) Windows64 Solaris64 Linux64

Interstage ディレクトリサービスを運用するマシンにインストールするSymfoware/RDBは、Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。

## Symfoware/RDBでレプリケーション運用する場合

データベースを運用するプラットフォーム	製品名/バージョン・レベル	
Windows(R)	Linkexpress Linkexpress Replication option	V4.0以降
Solaris	Linkexpress Linkexpress Replication option	4.0以降
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Linkexpress Linkexpress Replication option	V5.0L10以降
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Linkexpress Linkexpress Replication option	V5.0L11以降

### 注1)

Linkexpress、およびLinkexpress Replication optionは、Symfoware Server Enterprise Extended Edition、またはSymfoware Server Enterprise Editionに同梱されています。

## リポジトリのデータベースとしてOracleデータベースを使用する場合

データベースを運用するプラットフォーム	製品名/バージョン・レベル	
Windows(R)	Oracle Database Enterprise Edition Oracle Database Standard Edition Oracle Database Standard Edition One	10.2.0、11.1、または11.2
Solaris	Oracle Database Enterprise Edition Oracle Database Standard Edition Oracle Database Standard Edition One	10.2.0、11.1、または11.2
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Oracle Database Enterprise Edition Oracle Database Standard Edition	11.1、または11.2
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Oracle Database Enterprise Edition Oracle Database Standard Edition	11.2

### 注1)

Interstage ディレクトリサービスとOracle Databaseを別々のマシンで運用する場合は、Interstage ディレクトリサービスを運用するマシンに、Oracle Database Clientをインストールする必要があります。Oracle Database Clientは、Oracle Databaseと同一バージョンのOracle Netソフトウェアを含むものを使用してください。なお、Interstage ディレクトリサービスでは、Oracle Database Clientの「Instant Client」は使用できません。

### 注2) Windows64 Solaris64 Linux64

Interstage ディレクトリサービスを運用するマシンにインストールするOracleデータベースは、Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。

EE SJE

## 4.2.6 データベース関連(J2EE)

J2EEアプリケーションで利用できるJDBCドライバについて説明します。

使用するJDBCドライバがサポートしているJDBC規約がJDBC 3.0以降の場合でも、J2EEアプリケーションはJDBC 2.0規約の範囲のみ使用できます。

JDBCドライバがサポートするデータベースや動作条件については各JDBCドライバの提供元に確認してください。

### Symfowareを使用したアプリケーションを運用する場合

Symfoware ServerのNativeインターフェースを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Server クライアント機能	10.0.0以降
Solaris	Symfoware Server クライアント機能	10.0.0以降
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Server クライアント機能	10.0.0以降
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Server クライアント機能	10.1.0以降

### 注意

- 最新の修正プログラムを適用してください。
- Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。
- 分散トランザクション機能は、使用できません。

Symfoware ServerのOpenインターフェースを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Server クライアント機能	12.0以降
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Server クライアント機能	12.0以降
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Server クライアント機能	12.0以降

### 注意

- 最新の修正プログラムを適用してください。
- 分散トランザクション機能は、使用できません。

## Oracleを使用したアプリケーションを運用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Oracle JDBC Driver	11.1、11.2または12.1
Solaris	Oracle JDBC Driver	11.1、11.2または12.1
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Oracle JDBC Driver	11.1、11.2または12.1
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Oracle JDBC Driver	11.1、11.2または12.1

### 注意

- Oracle JDBC Driverのバージョンが11.1.0.6以前の場合、ConnectionEventListenerが未実装です。このため、以下の機能を使用すると誤動作する場合があります。以下の機能を使用する場合には、ConnectionEventListenerが実装されている修正パッチを、Oracle製品のSupportDesk契約に基づいて、SupportDeskから入手して適用してください。
  - Interstageがコネクションをプールする(`oracle.jdbc.pool.OracleConnectionPoolDataSource`)
  - 分散トランザクションを使用する(`oracle.jdbc.xa.OracleXADatasource`)
- サポートする機能範囲はOracle JDBC Driver 11.1の機能範囲で、Oracle Universal Connection Pool(UCP) for JDBC機能はサポートしていません。
- OCIドライバを使用する場合は、Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。

## SQL Serverを使用したアプリケーションを運用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Microsoft SQL Server JDBC Driver	3.0
Solaris	Microsoft SQL Server JDBC Driver	3.0
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Microsoft SQL Server JDBC Driver	3.0
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Microsoft SQL Server JDBC Driver	3.0

### 注意

分散トランザクション機能は、使用できません。

## PowerGres Plusを使用したJ2EEアプリケーションを運用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)(x64)	PowerGres Plusクライアント	V9
RHEL5(Intel64)	PowerGres Plusクライアント	V9
RHEL6(Intel64)	PowerGres Plusクライアント	V9

## 注意

- 分散トランザクション機能は、使用できません。
- 上表に記載されているプラットフォームは、JDBCドライバがサポートするOSです。  
32bit版のInterstage Application Serverで使用する場合は、Interstage Application ServerをIntel 64またはx64アーキテクチャのプラットフォームにインストールしてください。

## FUJITSU Integrated System HA Database Ready SX1を使用したJ2EEアプリケーションを運用する場合

Native SQLを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Symfoware Server Client	V11.0.2
 Solaris	Symfoware Server Client	V11.0.2
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Symfoware Server Client	V11.0.2
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Symfoware Server Client	V11.0.2

## 注意

- 最新の修正プログラムを適用してください。
- Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしているJDBCドライバを使用してください。
- 分散トランザクション機能は、使用できません。
- Symfoware Server Connection Manager機能を使用してください。
- JDBCリソースを作成する場合は、以下の設定にしてください。
  - データベースタイプ:Symfoware
  - プロトコル:ローカル
  - データ資源名:Symfoware Server Connection Manager機能のAPC動作環境ファイルで、定義種別SQLSERVERに指定した"SQLサーバ名"

Open SQLを使用する場合

プラットフォーム	サポートするJDBCドライバ/バージョン・レベル	
Windows(R)	Open SQL Client	V1.0.0
RHEL5(x86) RHEL5(Intel64)	Open SQL Client	V1.0.0
RHEL6(x86) RHEL6(Intel64)	Open SQL Client	V1.0.0

## 注意

- 分散トランザクション機能は、使用できません。
- JDBCリソースを作成する場合は、以下の設定にしてください。
  - データベースタイプ:PostgreSQL
  - クライアントバージョン:V5(Interstage 管理コンソールでは、"PowerGres Plus V5")
  - 接続ポート番号:デフォルトで5432が表示されますが、適宜変更してください(データベースサーバ側のデフォルトは、26551です)

### 4.2.7 セキュリティ

機能名	製品名/バージョン・レベル	
SSL機能 (証明書を作成するための証明書発行局を構築する場合のみに右記が必要です。証明書を証明書発行機関などから入手する場合は必要ありません。)	Systemwalker PKI Manager	V12.0L10以降 (Windows版) 12.0以降(Solaris版)

### 4.2.8 Webサーバ

本製品で提供されるWebサーバ(Interstage HTTP Serverなど)以外に、以下を使用できます。

機能名	製品名/バージョン・レベル	
 Java EEのWebコンテナ	 Microsoft(R) Internet Information Services	6.0、7.0、7.5、8.0
 CORBAサービスのHTTPトンネリング	 Microsoft(R) Internet Information Services	6.0、7.0
 Interstage シングル・サインオン(業務サーバ機能)	 Microsoft(R) Internet Information Services	6.0、7.0、7.5、8.0 <a href="#">(注1)</a>
	 Sun Java System Web Server <a href="#">(注2)</a>	6.1
 Servletサービス	 Microsoft(R) Internet Information Services	6.0、7.0、7.5、8.0
	 Sun Java System Web Server <a href="#">(注2)</a>	6.1

#### 注1)

Microsoft(R) Internet Information Services 7.0以降を使用する場合、Interstage シングル・サインオンの認可時に発生するエラー要因に対するメッセージのカスタマイズはできません。メッセージのカスタマイズについては、“シングル・サインオン運用ガイド”の“シングル・サインオンのカスタマイズ”－“Webブラウザに表示するメッセージのカスタマイズ”を参照してください。

#### 注2)

Solaris 11ではサポートしていません。

## 4.2.9 管理コンソール

機能名	製品名/バージョン・レベル	
Interstage Java EE管理コンソール Interstage管理コンソール	32ビット版 Windows(R) Internet Explorer(R)	7、8、9、10

## 4.2.10 運用監視関連

機能名	製品名/バージョン・レベル	
<b>EE SJE</b> <span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> Systemwalkerと連携した稼動監視および性能監視ツールでリアルタイム監視を行う場合 <a href="#">(注1)</a> <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> Systemwalkerと連携した稼動監視および性能情報のリアルタイム監視 <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> Systemwalkerと連携した稼動監視を行う場合	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32</span> <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> Systemwalker Centric Manager Enterprise Edition、または Systemwalker Centric Manager Standard Edition <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows64</span> <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> Systemwalker Centric Manager Enterprise Edition	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32</span> V11.0L10以降 <a href="#">(注2)</a> <span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows64</span> V13.4.0以降 <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> 11.0以降 <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> V13.2.0以降
<b>EE SJE</b> Systemwalkerと連携した自動運転を行う場合	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32</span> Systemwalker Operation Manager Enterprise Edition、または Systemwalker Operation Manager Standard Edition <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32</span> Systemwalker Operation Manager Enterprise Edition、または Systemwalker Operation Manager Standard Edition <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> Systemwalker Operation Manager Enterprise Edition	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32</span> V11.0L10以降 <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32</span> 11.0以降 <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> V13.2.0以降
<b>EE SJE</b> <span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> ネットワーク管理マネージャによる性能情報のリアルタイム監視機能(MIBによる監視)	SNMPサービス <a href="#">(注2)</a>	-
<b>EE</b> <span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32</span> <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32</span> <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32</span> Systemwalkerと連携したアプリケーション配付・世代管理を行う場合	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32</span> Systemwalker Software Delivery、または Systemwalker Centric Manager Enterprise Edition <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32</span> <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32</span> Systemwalker Software Delivery	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32</span> <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32</span> 12.0/V12.0L10以降 <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32</span> 13.0/V13.0L10以降
<b>EE</b> <span style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32</span> <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32</span> Systemwalker Resource Coordinatorと連携した動的ダウンリカバリ	Systemwalker Resource Coordinator <a href="#">(注3)</a>	V11.0以降

機能名	製品名/バージョン・レベル
Systemwalker Centric Managerの監査ログ管理機能を使用してセキュリティ監査証跡機能の監査ログを収集する場合	Systemwalker Centric Manager Enterprise Edition、または Systemwalker Centric Manager Standard Edition V13.0.0以降
<b>EE SJE</b>     Systemwalker Service Quality Coordinatorと連携したトランザクション内訳分析(J2EEアプリケーションのコンポーネントごとの処理時間測定)を使用する場合	Systemwalker Service Quality Coordinator (Agent) <a href="#">(注4)</a> <a href="#">(注5)</a> V13.2以降
<b>EE SJE</b>     Systemwalker Service Quality Coordinatorと連携したトランザクション内訳分析(Java EEアプリケーションのコンポーネントごとの処理時間測定)を使用する場合	Systemwalker Service Quality Coordinator (Agent) <a href="#">(注4)</a> <a href="#">(注6)</a> V15.0以降
  Systemwalker Software Configuration Managerと連携した仮想システムの自動配備を行う場合	Systemwalker Software Configuration Manager V14.0以降

**注1)**

InterstageとSystemwalkerを同一システムにインストールする場合は同じオペレーティング・システムの製品でのみ使用可能です。

**注2)**

SNMPサービスは、OSから提供される機能です。

**注3)**

ServerView Resource Coordinator VE／ServerView Resource Orchestratorと連携して動的ダウンリカバリを使用することはできません。

**注4)**

Interstageと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。

**注5)**

トランザクション内訳分析機能を使用する場合、Systemwalker Service Quality CoordinatorのPG56793の修正を適用してください。

**注6)**

トランザクション内訳分析機能を使用する場合、Systemwalker Service Quality CoordinatorのPG90780の修正を適用してください。

## 4.2.11 高信頼機能

機能名	製品名/バージョン・レベル	
IPCOMと連携した負荷分散システムの構築	IPCOM (注1)	—
<b>Solaris32/64 Linux32/64</b> PRIMECLUSTERを使用した高信頼化システムの構築 (注2)	PRIMECLUSTER	4.2以降
<b>Windows32/64</b> Microsoft Cluster Service(MSCS)を使用した高信頼化システムの構築	<b>Windows32/64</b> Microsoft Cluster Service(MSCS) Microsoft(R) Windows Server(R)のフェールオーバー クラスタリング機能	—

**注1)**

IPCOM連携機能を使用してIIOP負荷分散を行うには、IIOP負荷分散に対応した機種のIPCOMが必要です。詳細はIPCOMのマニュアルを参照してください。

**注2)**

PRIMECLUSTERでのInterstage Application Serverの使用方法については、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

## 4.2.12 フレームワーク

機能名	製品名/バージョン・レベル	
フレームワークのデータベース連携部品を使用する場合	Oracle Database Enterprise Edition Oracle Database Standard Edition	10.2.0、11.1または11.2
	<b>Solaris32 Linux64</b> Symfoware Server Enterprise Extended Edition	9.x、10.xまたは11.x
	<b>Windows32/64 Solaris32 Linux32</b> <b>Linux64</b> Symfoware Server Enterprise Edition	9.x、10.xまたは11.x
	<b>Windows32 Solaris32 Linux32</b> Symfoware Server Standard Edition	9.x、10.xまたは11.x
フレームワークのXML連携機能を利用する場合	Fujitsu XMLプロセッサ (注1) - Fujitsu XML Library for Java - Fujitsu XSLT Library for Java	V5.2
	JDK/JRE 6または7 が提供するXMLプロセッサ (注2)	—
フレームワークのStruts連携機能を使用する場合	Struts	1.1または1.2.9
<b>Windows32 Solaris32</b> <b>Linux32/64</b>	Interstage Charset Manager Standard Edition Web Input Agent	V9.1、V9.2またはV9.3
外字入力機能を使用する場合		

**注1)**

**Windows32/64 Solaris32 Linux32/64**本製品に同梱されています。

**注2)**

本製品に同梱されています。

 **注意**

フレームワークを用いて作成したアプリケーションを運用する場合、Fujitsu XML プロセッサ2 V1.0は使用できません。

### 4.2.13 その他

機能名	製品名/バージョン・レベル		
<b>EE SJE</b> Interstage シングル・サインオン(統合 Windows認証を行う場合のみ)	Active Directory	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 <a href="#">(注1)</a> Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 <a href="#">(注1)(注2)</a> Microsoft(R) Windows Server(R) 2003(R2は除く) <a href="#">(注1)(注3)</a> Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2 <a href="#">(注1)</a>	
<b>EE</b> 外字のコード変換を行う場合	<b>Windows32</b> ADJUST	V2.1L50	
	Interstage Charset Manager <a href="#">(注4)</a>	<b>Windows32 Solaris32 Linux32/64</b> V7.0以降 <b>Windows64</b> V8.2以降 <b>Solaris64</b> V9.4以降	
	<b>Solaris32/64</b> 標準コード変換	1.2	
Interstage ディレクトリサービスのクライアント(Active Directory連携を行う場合)	Active Directory	<b>Windows32/64</b> Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 <a href="#">(注5)</a> Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 <a href="#">(注5)</a> Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 <a href="#">(注5)</a>	

**注1)**

Active Directoryを含むWindows(R)のバージョンであり、Interstage シングル・サインオンを構築するマシンのWindows(R)のバージョンではありません。

**注2)**

連携に必要なActive Directoryの更新プログラムを、連携するMicrosoft(R) Windows Server(R) 2008に適用する必要があります。適用するActive Directoryの更新プログラムは、連携するMicrosoft(R) Windows Server(R) 2008によって以下のように異なります。

ソフトウェア名称	更新プログラム
Windows Server(R) 2008 x86 Editions	KB951191
Windows Server(R) 2008 x64 Editions	KB951191 KB960830
Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 for Itanium-based Systems	KB960830

ただし、Service Pack2以上を適用している場合、またはMicrosoft(R) Windows Server(R) 2008 R2の場合、更新プログラムを適用する必要はありません。

**注3)**

統合Windows認証で使用する暗号方式に“RC4-HMAC”を使用する場合は、Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 Service Pack 1以降のサポートツールをインストールする必要があります。統合Windows認証で使用する暗号方式については、「シングル・サインオン運用ガイド」の「概要」-「認証」-「統合Windows認証」を参照してください。

**注4)**

Interstage Application Serverと同一のCPUのアーキテクチャをサポートしている製品を使用してください。

**注5) Windows32/64**

Active Directoryを含むWindows(R)のバージョンであり、Interstageディレクトリサービスを構築するマシンのWindows(R)のバージョンではありません。

また、Active Directoryの連携の場合、Interstage ディレクトリサービスのクライアントは、以下の範囲で利用できます。

**EE**

- Interstage ディレクトリサービス SDKがサポートしているすべての C API関数
- Interstage ディレクトリサービス SDKが提供するすべてのLDAPコマンド(ldapdelete、ldapmodify、ldapsearch)

## 4.3 アプリケーション実行時に必要なクライアント側のソフトウェア

**EE**

### 4.3.1 CORBAサービス／コンポーネントランザクションサービス／イベントサービス／データベース連携サービス

機能名	製品名/バージョン・レベル	
Visual Studio で作成したアプリケーションの運用	Visual Studio 付属の再頒布用ランタイム <a href="#">(注1)</a>	—
CORBAサービス ・Javaアプリケーション(Javaアプレット含む) <a href="#">(注2)</a> <a href="#">(注3)</a>	Interstage Studio クライアント運用パッケージ	V9.0以降
イベントサービス ・Javaアプリケーション(Javaアプレット含む) <a href="#">(注2)</a> <a href="#">(注3)</a>		
データベース連携サービス ・Javaアプリケーション <a href="#">(注3)</a>		
CORBAサービス ・JavaアプレットのWebブラウザ上での運用 <a href="#">(注4)</a> <a href="#">(注5)</a>	Windows(R) Internet Explorer(R)	7、8、9、10
イベントサービス ・JavaアプレットのWebブラウザ上での運用 <a href="#">(注4)</a> <a href="#">(注5)</a>		
CORBAサービス ・COBOLクライアントアプリケーション運用 ・OOCOBOLクライアントアプリケーション運用 <a href="#">(注6)</a>	NetCOBOL Base Edition クライアント運用パッケージ for Windows <a href="#">(注7)</a> NetCOBOL Standard Edition クライアント運用パッケージ for Windows <a href="#">(注7)</a>	V7.0 V7.2 V8.0
	NetCOBOL Base Edition クライアント運用パッケージ <a href="#">(注7)</a>	V9.0 V10

機能名	製品名/バージョン・レベル	
イベントサービス ・COBOLクライアントアプリケーション運用	NetCOBOL Standard Edition クライアント運用パッケージ <a href="#">(注7)</a>	
データベース連携サービス ・COBOLクライアントアプリケーション運用		
CORBAサービス ・OLEクライアントアプリケーション実行 <a href="#">(注6)</a>	Microsoft Visual Basic	5.0または6.0
CORBAサービス ・C/C++クライアントアプリケーション実行 <a href="#">(注6)</a>	—	—
イベントサービス ・C/C++クライアントアプリケーション実行 <a href="#">(注6)</a>		
データベース連携サービス ・C/C++クライアントアプリケーション実行 <a href="#">(注6)</a>		

### 注1)

再頒布用ランタイムの詳細はVisual Studioのマニュアルを参照してください。

Interstageをインストールすると“Microsoft Visual C++ 2005再頒布可能パッケージ”がインストールされる場合がありますが、その場合でも再頒布用ランタイムのインストールが必要になる場合があります。

### 注2)

Javaアプリケーションの運用には、以下の形態があります。

- Portable-ORBをインストールする形態:  
クライアントに、Portable-ORBをインストールしておく必要があります。
- CORBAサービスクライアントをインストールする形態:  
クライアントに、CORBAサービスクライアントをインストールしておく必要があります。

### 注3)

Interstage Application Serverのクライアントパッケージに同梱されているJBKプラグイン 6(または7)をインストールしてください。同梱されているJBKプラグインをインストールしない場合は、表内の製品を使用してください。

### 注4)

Javaアプレットの運用には、以下の形態があります。

- Portable-ORBをWebサーバからダウンロードする形態:  
Webサーバに、Portable-ORBをインストール(資源を格納)しておく必要があります。
- Portable-ORBをインストールする形態:  
クライアントに、Portable-ORBをインストールしておく必要があります。
- CORBAサービスクライアントをインストールする形態:  
クライアントに、CORBAサービスクライアントをインストールしておく必要があります。

### 注5)

JBKプラグインが必要です。

**注6)**

CORBAサービスクライアントをインストールする必要があります。

**注7)**

NetCOBOLシリーズには、開発系製品と運用系製品（運用パッケージ）があります。COBOLアプリケーションを実行するには、運用系製品が必要です。なお、開発系製品でも実行可能です。

EE SJE

### 4.3.2 フレームワーク

機能名	製品名/バージョン・レベル	
フレームワークを使用したWebアプリケーションのクライアントとしてWindows(R)を使用する場合	Windows(R) Internet Explorer(R) <a href="#">(注1)</a>	7、8、9、10
フレームワークのアプレット連携機能を使用する場合	次のいずれかが提供するJBKプラグイン Interstage Application Server V11.x Interstage Studio V11.x <a href="#">(注2)</a>	—
	Interstage Studio クライアント運用パッケージ V11.x Java Plug-in	1.6.0、1.7.0
フレームワークのFlash連携機能を使用する場合	対応するWebブラウザや運用時にクライアントで必要となるソフトウェアは、利用するFlash(R)の仕様に従います。	—

**注1)**

外字入力機能を使用する場合は、Interstage Charset Manager Standard Edition Web入力 Agentと本製品の両方が対応しているWebブラウザを使用してください。

**注2)**

デバッグ実行時のみ使用できます。

### 4.3.3 その他

機能名	製品名/バージョン・レベル	
Portable-ORBでJEFコード変換を使用する場合 <a href="#">(注1)</a>	Interstage Studio クライアント運用パッケージ	V9.0以降
Interstage シングル・サインオンを使用する場合	Windows(R) Internet Explorer(R)	7、8、9、10
	Mozilla(R) Firefox <a href="#">(注2)</a>	3.0～3.6、4.0、5.0、6.0、7.0、8.0、9.0、10.0、11.0、12.0、13.0、14.0、15.0、16.0、17.0、18.0、19.0、20.0、21.0、22.0、23.0、24.0
外字のコード変換	ADJUST	V2.1L50
	Interstage Charset Manager	V7.0以降
EJBサービスのJavaアプレット <a href="#">(注3)</a> <a href="#">(注4)</a>	Windows(R) Internet Explorer(R)	7、8、9、10

### 注1)

Interstage Application Serverのクライアントパッケージに同梱されているJBKプラグイン6(または7)をインストールしてください。同梱されているJBKプラグインをインストールしない場合は、表内の製品を使用してください。

### 注2)

サポートするオペレーティングシステムは、Windows(R)のみです。

### 注3)

Javaアプレットの運用には、以下の形態があります。

- Portable-ORBおよびEJBサービスのクライアントをWebサーバからダウンロードする形態:

Webサーバに、Portable-ORBおよびEJBサービスのクライアント用jarファイル(fjcontainer72\_plugin.jar)をインストール(資源を格納)しておく必要があります。

なお、Apworks V6.0L10の構成製品の“J Business Kit”より提供されるJBKプラグインが必要です。Apworksのダウンロードインストーラをインストールしておく必要があります。

- CORBAサービスクライアントおよびEJBサービスのクライアントをインストールする形態:

クライアントに、CORBAサービスクライアントとEJBサービスのクライアントをインストールしておく必要があります。

なお、カスタムインストールで“JBK”を選択しないでインストールした場合には、JBKプラグインをインストールしておく必要があります。

### 注4)

JBKプラグインが必要であり、Webブラウザは“Internet Explorer”が必要です。

## EE 4.4 MessageQueueDirector使用時に必要なソフトウェア Windows32/64

Solaris32 Linux32/64

### Windows (R)の場合 Windows32

機能名	製品名/バージョン・レベル	
COBOLアプリケーションの開発	NetCOBOL Base Edition for Windows NetCOBOL Standard Edition for Windows	V7.0
	NetCOBOL Base Edition 開発パッケージ for Windows NetCOBOL Standard Edition 開発パッケージ for Windows NetCOBOL Professional Edition 開発パッケージ for Windows	V7.2 V8.0
	NetCOBOL Base Edition 開発パッケージ NetCOBOL Standard Edition 開発パッケージ NetCOBOL Professional Edition 開発パッケージ	V9.0
	NetCOBOL Enterprise Edition 開発パッケージ	V10
Cアプリケーションの開発	Microsoft(R) Visual C++(R) .NET Standard 2003	—
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2005 Team Edition	—
	Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Standard Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) 2008 Professional Edition Microsoft(R) Visual Studio(R) Team System 2008	—
	IBM社MQSeriesとのメッセージ交換	MessageQueueDirector MQゲートウェイ
		1.0

機能名	製品名/バージョン・レベル	
メッセージ格納ファイルとして データベースを使用 (注1)	Symfoware Server Enterprise Extended Edition Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	V7.0

**注1)**

“インストールガイド”の“必要な修正プログラム”を参照し、必要なパッチを適用してください。

**Solarisの場合** Solaris32

機能名	製品名/バージョン・レベル	
COBOLアプリケーションの開発	NetCOBOL Base Edition 開発・運用パッケージ NetCOBOL Standard Edition 開発・運用パッケージ NetCOBOL Professional Edition 開発・運用パッケージ NetCOBOL Enterprise Edition 開発・運用パッケージ	V9 V10
Cアプリケーションの開発	Sun Studio 12 Sun Studio 11 Sun Studio 10 Sun Studio 9 Sun ONE Studio 8 シリーズ 以下のコンポーネントが使用可能です。 —Sun ONE Studio 8 Compiler C	— — — — — —
	Sun ONE Studio 7 シリーズ 以下のコンポーネントが使用可能です。 —Forte Developer 7 Compiler C	—
	Forte Developer 6 シリーズ 以下のコンポーネントが使用可能です。 — WS Compilers C 6	—
SMTP連携サービスの暗号化	Systemwalker PkiMGR	10.0
IBM社MQSeriesとのメッセージ交換	MessageQueueDirector MQゲートウェイ	1.0.1
メッセージ格納ファイルとして データベースを使用 (注1)	Symfoware Server Enterprise Extended Edition Symfoware Server Enterprise Edition Symfoware Server Standard Edition	7.0
Symfoware/RDBトランザクション連携機能を使用 (注1)	Symfoware Server Enterprise Extended Edition	7.0

**注1)**

“インストールガイド”の“必須パッチ”を参照し、必要なパッチを適用してください。

EE

**4.5 MQ連携サービス使用時に必要なソフトウェア** Windows32 Solaris32

### MQ連携サービス使用時の必須ソフトウェア

MQ連携サービスを使用する場合には、Interstage Application Server Enterprise Editionの以下のコンポーネントをインストールする必要があります。

コンポーネント	パッケージ名	バージョン・レベル
MessageQueueDirector	FJSVmqd Solaris32	5.0以降 Solaris32

### MQ連携サービス使用時のソフトウェア組合せ条件

MQ連携サービスを使用する場合に必要な相手システムのソフトウェアの組合せ条件を以下に示します。以下に記述した製品は、本製品と直接関連する製品だけです。これ以外に必要となる製品がありますので、各製品の“ソフトウェア説明書”を参照してください。

使用形態	OS種	製品名
MQ連携サービスとの非同期通信を実現する場合	OS/390	Interstage/MQDBRIDGE for OS/390 1.0 以降
	AIX	Interstage/MQDBRIDGE for AIX 1.0 以降

EE

## 4.6 グローバルサーバ／PRIMEFORCEのInterstage連携時に必要なソフトウェア

Windows32 Solaris32/64 Linux32

### グローバルサーバ／PRIMEFORCEのInterstage連携時の必須ソフトウェア・緊急修正

OS種	OS系の製品名	緊急修正が必要な製品名(注)	PTFレベル	修正番号
MSP	OS IV/MSP AFII V10L10 (PTF:C99101)以降	OS IV/MSP Interstage/ORB CommunicationBase V10L10	DLIB	UC98792
		OS IV/MSP Interstage/ORB CommunicationBase V10L20	DLIB	UC98791
		OS IV/MSP Interstage/ORB CommunicationBase V20L10	DLIB	UC98790
XSP	OS IV/XSP AFII V10L10 (PTF:V94121)以降	OS IV/XSP Interstage/ORB CommunicationBase V10L10	DLIB	UV83585
		OS IV/XSP Interstage/ORB CommunicationBase V10L20	DLIB	UV83584
		OS IV/XSP Interstage/ORB CommunicationBase V20L10	DLIB	UV83583

#### 注)

各製品は“Global System Software 21 インターネットサーバパック”の構成製品です。

## 第5章 動作OSの違いによる注意事項

### 5.1 Windows Server(R) x64 Editions上での資源の移行についての注意事項 Windows64

Windows Server(R) x64 Editions上における資源の移行について注意事項を説明します。

- Windows Server(R) x64 Editions(32ビット互換)にインストールしたInterstageからWindows Server(R) x64 Editions版Interstageへの資源の移行はサポートしていません。

### 5.2 Windows Server(R) x64 Editionsの製品と、他のWindows製品間の差異について Windows64

Windows Server(R) x64 Editionsの製品と、他のWindows製品のInterstage Application Serverにおける機能差異について説明します。

サービス	機能	説明	参照マニュアル
Web Package	無償配布用Webサーバ	提供していません。	—
JDK/JRE	JDK/JRE	Java HotSpot(TM) Client VMをサポートしていません。	—
	仮想メモリ量	32ビットOSでの使用量に対して大きく変化する場合があります。 マニュアルの情報を参照してください。	<ul style="list-style-type: none"><li>Javaヒープ<ul style="list-style-type: none"><li>使用上の注意 32ビットOSから64ビットOSへの移植時の注意事項</li><li>チューニングガイド Javaヒープのチューニング</li></ul></li><li>スタック<ul style="list-style-type: none"><li>使用上の注意 32ビットOSから64ビットOSへの移植時の注意事項</li></ul></li><li>malloc()用領域(RHEL6(x86)/RHEL6(Intel64)の場合)<ul style="list-style-type: none"><li>使用上の注意 Linux固有の注意事項 RHEL6(x86)/RHEL6(Intel64)におけるOSの仮想メモリ管理について</li></ul></li></ul>
CORBAサービス	アプリケーション開発	Interstage Application Server Enterprise Editionにおいて、サーバアプリケーション開発で使用可能な言語はC、C++、Java、COBOLです。OOcobolを使用することはできません。なお、C++言語のPOAは使用することができません。 IDLファイルから生成されるマッピング言語用のファイルは、アプリケーションが動作するシステムで作成したものを使用してください。	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)

サービス	機能	説明	参照マニュアル
	アプリケーション開発(コンパイルオプション)	Interstage Application Server Enterprise Editionでのアプリケーション開発において、32bitアプリケーションでは「構造体メンバのアライメント」の設定値は「4バイト」ですが、64bitアプリケーションでは設定値に「8バイト」を指定してください。	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)
	キュー制御機能	queue_policy定義ファイルを使用したキュー policy の設定はできません。	—
	ロードバランス	ネーミングサービスと連携したロードバランスの運用をすることはできません。負荷分散のために、IPCOMを利用してください。	高信頼性システム運用ガイド 「IPCOMを利用した負荷分散」
	COM/CORBA連携機能	COM/CORBA連携機能を使用することはできません。	—
コンポーネントトランザクションサービス	トランザクションアプリケーション	サポートしていません。既存のトランザクションアプリケーションを本製品による運用環境に移行する場合は、CORBAアプリケーションに変更してください。	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)「CORBAワークユニット」の「旧バージョンのアプリケーションからの移行方法」
ラッパーオブジェクト	ラッパーオブジェクト	提供していません。	—
運用操作	Interstage 運用 API	提供していません。	—
	Interstage統合コマンド	以下のコマンドにおいて、ロードバランスオプションは操作できません。 <ul style="list-style-type: none"><li>• isinit</li><li>• ismodifyservice</li><li>• isstart</li><li>• isstat</li><li>• isstop</li></ul> また、isregistdefコマンドで生成するInterstage動作環境定義において、LBO USEは使用できません。	リファレンスマニュアル(コマンド編) 「Interstage統合コマンド」
負荷分散	IPCOM連携	以下のInterstage特有の負荷分散ポリシーを使用することができます。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 最小待ちメッセージ数</li><li>• 最小通信バッファ使用率</li></ul>	—
MessageQueueDirector	MessageQueueDirector	提供機能は以下の通りです。詳細機能で未提供的機能もありますので、提供機能の詳細については「MessageQueueDirector説明書」を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>• イベントチャネル連携サービス</li></ul> 以下の機能は提供されません。 <ul style="list-style-type: none"><li>• プログラムインターフェース</li><li>• メッセージキュー</li></ul>	MessageQueueDirector説明書「イベントチャネル連携サービス」

サービス	機能	説明	参照マニュアル
		<ul style="list-style-type: none"> <li>MQDのシステム環境にデータベースを利用する</li> <li>同報配信サービス</li> <li>SMTP連携サービス</li> </ul>	
MQ連携サービス	MQ連携サービス	提供していません。	—
マルチサーバ管理機能 (Systemwalker Software Delivery連携)	アプリケーション配付・世代管理機能 (Systemwalker Software Delivery連携)	提供していません。	マルチサーバ運用ガイド
データベース連携サービス	アプリケーション開発	Interstage Application Server Enterprise Editionにおいて、サーバアプリケーション開発で使用可能な言語は、C、Javaです。C++、COBOLを使用することはできません。	アプリケーション作成ガイド(データベース連携サービス編)
その他	セション情報管理機能(SMO)	提供していません。	—
	サーバマシン状態監視機能(SMM)	提供していません。	—

なお、他のWindows製品で構築した環境の資源をバックアップして、Windows Server(R) x64 Editions上で構築した環境にリストアして運用することはできません。

## 5.3 Solaris 10で使用する場合の注意事項 Solaris32/64

---

本製品のサーバパッケージをSolaris 10で使用する場合における、以下の注意事項を説明します。

- RCプロシージャおよび状態遷移プロシージャについて
- Solarisゾーンでの運用について
- non-global zone作成時の注意事項

### RCプロシージャおよび状態遷移プロシージャについて

本製品のサーバパッケージでは、Solaris 10に対応したRCプロシージャおよび状態遷移プロシージャを提供しています。Solaris 10で使用する場合には、旧バージョン・レベルで使用していたRCプロシージャおよび状態遷移プロシージャを、そのまま本バージョン・レベルに移行せずに、本製品でインストールしたSolaris 10対応のRCプロシージャおよび状態遷移プロシージャを使用してください。修正する必要があれば、本製品でインストールしたSolaris 10対応のRCプロシージャおよび状態遷移プロシージャを修正して使用してください。

### Solarisゾーンでの運用について

Solaris 10のコンテナ機能であるSolarisゾーンのnon-global zoneで、Interstage Application Serverを運用できます。Solaris ゾーンでの運用については、「使用上の注意」も参照してください。

Interstage Application Serverが他のソフトウェア製品とローカルに連携する場合、そのソフトウェア製品のSolarisゾーンの

対応については、ソフトウェア製品のマニュアルを確認してください。  
Solarisゾーンの詳細は、Solarisのドキュメントを参照してください。

### non-global zone作成時の注意事項

Interstage Application Serverをインストールするnon-global zoneは、完全ルートゾーンとしてください。non-global zoneを作成する場合、inherit-pkg-dirは設定しないでください。  
non-global zone作成後はrootのパスワードは作成されていません。「zlogin -C」でzloginすることで、zoneの環境設定ができます。



#### 注意

global zoneまたはnon-global zoneで本製品を使用する場合は、使用するzoneの管理者(root)のパスワードを必ず設定してください。  
万が一、パスワードを設定しなかった場合、パスワードを指定せずに管理者権限による操作が可能となるため、セキュリティ上の問題が発生する危険性があります。また、Interstage管理コンソールの操作では、パスワードを指定せずに管理者権限ユーザ(root)でのログインが可能となるため、ログイン認証が正常に動作しません。

## 5.4 Solaris 11で使用する場合の注意事項 Solaris32/64

[5.3 Solaris 10で使用する場合の注意事項](#)に加えて、本製品のサーバパッケージをSolaris 11で使用する場合における、以下の注意事項を説明します。

- 未サポート機能
- ネットワークサービスの有効化
- rootユーザによるログイン
- サポートトロケール
- 日本語コード系を含むファイルの編集

### 未サポート機能

- Interstage シングル・サインオン(業務サーバ機能)、ServletサービスのWebサーバとして、Sun Java System Web Server はサポートしていません。
- Systemwalker Centric Managerによる性能情報のリアルタイム監視機能はサポートしていません。

### ネットワークサービスの有効化

本製品のサーバパッケージの導入前および運用前に、「netservices open」によりネットワークサービスを有効化してください。

### rootユーザによるログイン

Solaris 10以前では、デフォルトでrootというユーザアカウントが存在しました。Solaris 11では、デフォルトでrootは役割となつたため、rootとしてシステムに直接ログインできなくなります。

rootを役割として運用する場合、マニュアル上、rootユーザでログインするよう記載されている箇所を、一般ユーザアカウントでログインした後にsuコマンドなどでrootになる手順に読み替えてください。

Interstage Java EE運用環境のログイン認証にOS認証(デフォルト)を使用する場合、事前にrolemodコマンドを実行し、rootを役割からユーザアカウントへ変更してください。変更する手順の詳細は次を参照してください。

[http://docs.oracle.com/cd/E26924\\_01/html/E25887/rbactask-4.html#rbactask-20](http://docs.oracle.com/cd/E26924_01/html/E25887/rbactask-4.html#rbactask-20)

## サポートロケール

本製品のサーバーパッケージでサポートするロケールは以下です(○:サポート対象、-:サポート対象外)。

ロケール	Solaris 11	Solaris 10 / 9
ja	- (注1)	○
ja_JP.eucJP	○ (注2)	○
ja_JP.UTF-8	○	○
ja_JP.PCK	○ (注2)	○
C	○	○

### 注1)

Solaris 11から、Short form locale(jaなど)が廃止となりました。ja\_JP.eucJPを使用してください。

### 注2)

ja\_JP.UTF-8以外の日本語環境を利用する場合、必要に応じ、Solarisのパッケージ「system/locale/ja-extra」のインストールおよびロケールの変更を行ってください。



日本語ロケールを選択した環境でも、英語メッセージが出力される場合があります。

## 日本語コード系を含むファイルの編集

以下の機能では、日本語コード系がEUCであるテキストファイルを提供しています。これらのファイルをSolaris 11上で編集する場合、事前にSolarisのパッケージ「system/locale/ja-extra」のインストールおよびロケールの変更を行ってください。

- ・ シングル・サインオン

## 5.5 Linux上のアプリケーションの移行における注意事項 Linux32/64

以下のように、他のOS上のアプリケーションを移行する場合は、移行先の環境上でコンパイルし直す必要があります。

- ・ 以下から、Red Hat Enterprise Linux 6 (for x86)やRed Hat Enterprise Linux 6 (for Intel64)に移行する場合
  - Red Hat Enterprise Linux AS (v.2.1)
  - Red Hat Enterprise Linux ES (v.2.1)
  - Red Hat Enterprise Linux AS (v.3 for x86)
  - Red Hat Enterprise Linux ES (v.3 for x86)
  - Red Hat Enterprise Linux AS (v.4 for x86)
  - Red Hat Enterprise Linux AS (v.4 for EM64T)
  - Red Hat Enterprise Linux 5 (for x86)
  - Red Hat Enterprise Linux 5 (for Intel64)

なお、Linux for x86版Interstage Application Serverで作成したアプリケーションは、Linux for Intel64(32ビット互換)版Interstage Application Serverで動作させることができます。また、Linux for Intel64(32ビット互換)版Interstage Application Serverで、gcc/g++コマンドに"-m32 -mtune=i386"オプションを指定して作成したアプリケーションは、Linux for x86版Interstage Application Serverで動作させることができます。

## 5.6 Linux for Intel64上での資源の移行についての注意事項

Linux64

Linux for Intel64上における資源の移行について注意事項を説明します。

- Linux for Intel64(32ビット互換)にインストールしたInterstageからLinux for Intel64版Interstageへの資源の移行はサポートしていません。

## 5.7 Linux for Intel64の製品と、他のLinux製品間の差異について

Linux64

Linux for Intel64の製品と、他のLinux製品のInterstage Application Serverにおける機能差異について説明します。

サービス	機能	説明	参照マニュアル
Web Package	無償配布用Webサーバ	提供していません。	—
JDK/JRE	JDK/JRE	Java HotSpot(TM) Client VMをサポートしていません。	—
	仮想メモリ量	32ビットOSでの使用量に対して大きく変化する場合があります。 マニュアルの情報を参照してください。	<ul style="list-style-type: none"><li>• Javaヒープ<ul style="list-style-type: none"><li>• 使用上の注意 32ビットOSから64ビットOSへの移植時の注意事項</li><li>• チューニングガイド Javaヒープのチューニング</li></ul></li><li>• スタック<ul style="list-style-type: none"><li>• 使用上の注意 32ビットOSから64ビットOSへの移植時の注意事項</li></ul></li><li>• malloc()用領域(RHEL6(x86)/RHEL6(Intel64)の場合)<ul style="list-style-type: none"><li>• 使用上の注意 Linux固有の注意事項 RHEL6(x86)/RHEL6(Intel64)におけるOSの仮想メモリ管理について</li></ul></li></ul>
CORBAサービス	アプリケーション開発	Interstage Application Server Enterprise Editionにおいて、サーバアプリケーション開発で使用可能な言語はC、C++、Java、COBOLです。OOCOBOLを使用することはできません。なお、C++言語のPOAは使用することができます。 IDLファイルから生成されるマッピング言語用のファイルは、アプリケーションが動	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)

サービス	機能	説明	参照マニュアル
		<p>作するシステムで作成したものを使用してください。</p> <p>また、CORBAで定義されている基本データ型とC言語でのデータ型の対応について、以下の基本データ型は他のInterstage Application Server製品の場合と差異があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本製品 CORBA_longはintに対応 CORBA_unsigned_long は unsigned intに対応</li> <li>他のInterstage Application Server CORBA_longはlongに対応 CORBA_unsigned_long は unsigned longに対応</li> </ul>	
	キュー制御機能	キュー制御機能(queue_policy)を使用することはできません。	—
	ロードバランス	ネーミングサービスと連携したロードバランスの運用をすることはできません。負荷分散のために、IPCOMを利用してください。	高信頼性システム運用ガイド 「IPCOMを利用した負荷分散」
コンポーネントトランザクションサービス	トランザクションアプリケーション	サポートしていません。既存のトランザクションアプリケーションを本製品による運用環境に移行する場合は、CORBAアプリケーションに変更してください。	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)「CORBAワークユニット」の「旧バージョンのアプリケーションからの移行方法」
運用操作	Interstage 運用API	提供していません。	—
	Interstage統合コマンド	<p>以下のコマンドにおいて、ロードバランスオプションは操作できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>isinit</li> <li>ismodifyservice</li> <li>isstart</li> <li>isstat</li> <li>isstop</li> </ul> <p>また、isregistdefコマンドで生成するInterstage動作環境定義において、LBO USEは使用できません。</p>	リファレンスマニュアル(コマンド編) 「Interstage統合コマンド」
負荷分散	IPCOM連携	<p>以下のInterstage特有の負荷分散ポリシーを使用することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>最小待ちメッセージ数</li> <li>最小通信バッファ使用率</li> </ul>	—
マルチサーバ管理機能	アプリケーション配付・世代管理機能 (Systemwalker Software Delivery連携)	提供していません。	マルチサーバ運用ガイド

サービス	機能	説明	参照マニュアル
データベース連携サービス	アプリケーション開発	Interstage Application Server Enterprise Editionにおいて、サーバアプリケーション開発で使用可能な言語は、C、Javaです。C++を使用することはできません。	アプリケーション作成ガイド(データベース連携サービス編)
その他	セッション情報管理機能(SMO)	提供していません。	—
	サーバマシン状態監視機能(SMM)	提供していません。	—

なお、他のLinux製品で構築した環境の資源をバックアップして、Linux for Intel64上で構築した環境にリストアして運用することはできません。

## 5.8 64bit版Solarisの製品と、他のSolaris製品間の差異について

### Solaris64

64bit版Solarisの製品と、他のSolaris製品のInterstage Application Serverにおける機能差異について説明します。

サービス	機能	説明	参照マニュアル
Web Package	無償配布用Webサーバ	提供していません。	—
JDK/JRE	JDK/JRE	Java HotSpot(TM) Client VMをサポートしていません。	—
	仮想メモリ量	32ビットOSでの使用量に対して大きく変化する場合があります。 マニュアルの情報を参照してください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Javaヒープ           <ul style="list-style-type: none"> <li>• 使用上の注意 32ビットOSから64ビットOSへの移植時の注意事項</li> <li>• チューニングガイド Javaヒープのチューニング</li> </ul> </li> <li>• スタック           <ul style="list-style-type: none"> <li>• 使用上の注意 32ビットOSから64ビットOSへの移植時の注意事項</li> </ul> </li> </ul>
CORBAサービス	アプリケーション開発	<p>Interstage Application Server Enterprise Editionにおいて、サーバアプリケーション開発で使用可能な言語はC、C++、Java、COBOLです。OOCOBOLを使用することはできません。なお、C++言語のPOAは使用することができます。</p> <p>IDLファイルから生成されるマッピング言語用のファイルは、アプリケーションが動作するシステムで作成したものを使用してください。</p> <p>また、CORBAで定義されている基本データ型とC言語でのデータ型の対応について、以下の基本データ型は他のInterstage Application Server製品の場合と差異があります。</p>	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)

サービス	機能	説明	参照マニュアル
		<ul style="list-style-type: none"> <li>本製品 CORBA_longはintに対応 CORBA_unsigned_long は unsigned intに対応</li> <li>他のInterstage Application Server CORBA_longはlongに対応 CORBA_unsigned_long は unsigned longに対応</li> </ul>	
	キュー制御機能	キュー制御機能(queue_policy)を使用することはできません。	—
	ロードバランス	ネーミングサービスと連携したロードバランスの運用をすることはできません。負荷分散のために、IPCOMを利用して下さい。	高信頼性システム運用ガイド 「IPCOMを利用した負荷分散」
コンポーネントトランザクションサービス	トランザクションアプリケーション	サポートしていません。既存のトランザクションアプリケーションを本製品による運用環境に移行する場合はCORBAアプリケーションに変更してください。	アプリケーション作成ガイド(CORBAサービス編)「CORBAワークユニット」の「旧バージョンのアプリケーションからの移行方法」
ラッパーオブジェクト	ラッパーオブジェクト	提供していません。	—
運用操作	Interstage 運用 API	提供していません。	—
	Interstage統合コマンド	<p>以下のコマンドにおいて、ロードバランスオプションおよびデータベース連携サービスは操作できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>isinit</li> <li>ismodifyservice</li> <li>isstart</li> <li>isstat</li> <li>isstop</li> </ul> <p>また、isregistdefコマンドで生成するInterstage動作環境定義において、以下のステートメントは使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>LBO USE</li> <li>OTS Multiple degree</li> <li>OTS Recovery</li> <li>OTS path for system log</li> <li>OTS maximum Transaction</li> <li>OTS Setup mode</li> <li>OTS JTS's RMP multiple degree of Process</li> <li>OTS JTS's RMP multiple degree of Thread</li> <li>OTS Participate</li> </ul>	リファレンスマニュアル(コマンド編) 「Interstage統合コマンド」

サービス	機能	説明	参照マニュアル
		<ul style="list-style-type: none"> <li>OTS Host</li> <li>OTS Port</li> <li>OTS Locale</li> </ul>	
	Interstage管理コンソール	<p>以下の機能は、使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>トランザクションサービス(OTS)</li> <li>JDBCデータソースの分散トランザクション</li> <li>イベントサービスのグローバルトランザクション</li> <li>JMSのグローバルトランザクション</li> </ul>	—
負荷分散	IPCOM連携	<p>以下のInterstage特有の負荷分散ポリシーを使用することができません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>最小待ちメッセージ数</li> <li>最小通信バッファ使用率</li> </ul>	—
MessageQueueDirector	MessageQueue Director	提供していません。	—
MQ連携サービス	MQ連携サービス	提供していません。	—
マルチシステム機能	マルチシステム機能	<p>サポートしていません。 1つのサーバ上で複数のInterstageを使用したい場合は、non-global zoneに複数のInterstageをインストールして運用してください。</p>	—
マルチサーバ管理機能	マルチサーバ管理機能	提供していません。	—
データベース連携サービス	データベース連携サービス	提供していません。	—
イベントサービス	イベントサービス	<p>以下の機能は、使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グローバルトランザクション機能</li> <li>チャネル間連携機能</li> </ul>	—
J2EE	JTS	提供していません。	—
	JDBC	JDBCデータソースの分散トランザクション機能は、使用できません。	
	JMS	グローバルトランザクション機能は、使用できません。	—
Fujitsu XML Processor	Fujitsu XML Processor	提供していません。	—
その他	セッション情報管理機能(SMO)	提供していません。	—

サービス	機能	説明	参照マニュアル
	サーバマシン状態監視機能(SMM)	提供していません。	—

なお、他のSolaris製品で構築した環境の資源をバックアップして、64bit版Solarisの製品で構築した環境にリストアして運用することはできません。

## 付録A ログ情報

Interstage Application Serverが出力するログに関する情報を記載します。

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
CORBAサービスのアクセスログ	CORBAサービスのアクセスに関するログ	あり	accesslog accesslog.old	Windows32/64 C:\Interstage\ODWIN\var Solaris32/64 /var/opt/FSUNod Linux32/64 /var/opt/FJSVod	3MB×2	○	○	○
CORBAサービスのプロセスログ	CORBAサービスのプロセスに関するログ	あり	proclog proclog.old		3MB×2	○	○	○
	Windows32/64 CORBAサービスのプロセスに関するログ(クライアントライブラリ)	あり	proclogcl proclogcl.old		3MB×2	○	○	○
CORBAサービスのエラーログ	CORBAサービスの異常系の可能性に関するログ	あり	errlog errlog.old		3MB×2	○	○	○
	Windows32/64 CORBAサービスの異常系の可能性に関するログ(クライアントライブラリ)	あり	errlogcl errlogcl.old		3MB×2	○	○	○
CORBAサービスのインフォメーションログ	CORBAサービスの正常系の動作に関するログ	あり	infolog infolog.old		3MB×2	○	○	○
	Windows32/64 CORBAサービスの正常系の動作に関するログ(クライアントライブラリ)	あり	infologcl infologcl.old		3MB×2	○	○	○
CORBAサービスのIPCログ	Solaris32/64 Linux32/64 CORBAサービス起動時のIPC情報	あり	ipclog ipclog.old		0.1MB×2	○	○	○
CORBAサービスの内部ログ	CORBAサービスの内部情報に関するログ	なし	log log.old		10MB×2	○	○	○
	Windows32/64 CORBAサービス	なし	appXXXX.log appXXXX.		10MB×2×512	○	○	○

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
CORBAサービスの内部ログ	スの内部情報に関するログ		old (XXXX:英数字)		10MB × 2	○	○	○
	Windows32/64 CORBAサービスの内部情報に関するログ	なし	od.log od.old					
CORBAサービスのトレース情報	CORBAサービスの動作トレース情報	あり	traceXXX X.log traceXXX X.old (XXXX:英数字)	Windows32/64 C:\Interstage\ODWIN\var\trace Solaris32/64 /var/opt/FSUNod/trace Linux32/64 /var/opt/FJSVod/trace	10KB × 2 × 512 + 320KB × 2	○	○	○
CORBA-Javaランタイムの内部ログ	CORBA-Javaランタイムの内部ログ	なし	JVxxxxxxxx xxx.log JVxxxxxxxx xxx.bak (xxxxxxxxxx x:英数字)	CORBA-Javaアプリケーション実行時のカレントディレクトリ	10MB × 2	○	○	○
ネーミングサービスのユーザ例外発生時のログ	ネーミングサービスのユーザ例外発生時のログ	あり	cn_userexception_log cn_userexception_log.old	Windows32/64 C:\Interstage\ODWIN\var Solaris32/64 /var/opt/FSUNod Linux32/64 /var/opt/FJSVod	2MB × 2	—	○	○
インターフェースリポジトリの内部ログ	インターフェースリポジトリの内部ログ	なし	標準インターフェースの場合: iclogNNN irlogNNN (NNN:通番) valueインターフェースの場合:  iclog_eNN N (NNN:通番)		512KB × 無限	—	○	○
HTTP-IIOPゲートウェイの内部ログ	HTTP-IIOPゲートウェイの内部ログ	なし	httpgwX_0.log httpgwX_1.log (X:英数字)					
Interstage HTTP Server	Interstage HTTP Serverのアクセスログ	あり	accesslog accesslog.N	Windows32/64 C:\Interstage\F3FMihs\servers\[Webサーバ名]\logs\	1MB × 5	○	○	○

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
のアクセスログ			(N:0~999の通番)	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバ名]/logs/				
Interstage HTTP Server のエラーログ	Interstage HTTP Serverのエラーログ	あり	errorlog errorlog.N (N:0~999の通番)		1MB × 5	○	○	○
Interstage HTTP Server のトレースログ	Interstage HTTP Serverのトレースログ	あり	tracelog tracelog.N (N:0~999の通番)		2MB × 5	○	○	○
Interstage HTTP Server のオペレーションログ	Interstage HTTP Serverのオペレーションログ	あり	opelog opelog.old	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMihs\var\opelog\ <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVihs/var/opelog/	1MB × 2	○	○	○
Interstage HTTP Server の保守ログ	Interstage HTTP Serverの保守ログ	あり	ihsapi.log ihsapi.log.last	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMihs\var\ihsapi\ <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVihs/var/.ihsapi/	5MB × 2	○	○	○
Interstage JMSのコンソールログ	Interstage JMSのコンソールログ	あり	fjmsconsole.log fjmsconsole.logN (N:1~3の通番)	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\jms\var\ <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVjms/	1MB × 3	—	○	○
Interstage JMSのスナップログ	Interstage JMSのスナップログ	なし	なし	なし	上限なし × 1	—	○	○
Interstage管理コンソールのログ	Interstage管理コンソールのログ	あり	isadmin_logon0.log isadmin_logon1.log	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\gui\trc\ <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisgui/trc/	200KB × 2	○	○	○
Interstage管理コンソールのバックアップ時のエラーログ	Interstage管理コンソールのバックアップ時のエラーログ	あり	backup_error.log		上限なし × 1	○	○	○
Interstage管理コンソールのリストア時のエラーログ	Interstage管理コンソールのリストア時のエラーログ	あり	restore_error.log		上限なし × 1	○	○	○

ログ名称	用途	デ フ オ ル ト 出 力	デ フ オ ル ト ファ イ ル 名	デ フ オ ル ト パ ス	デ フ オ ル ト サ イ ズ × 世 代 ( × セ ッ ト 数)	WS	SJE	EE
Interstage管理コンソールのアクセスログ	Interstage管理コンソールのアクセスログ	あり	F3FMisgui.accesslog F3FMisgui.accesslog.0 F3FMisgui.accesslog.1 F3FMisgui.accesslog.2 F3FMisgui.accesslog.3		1MB × 5	○	○	○
J2EEセキュリティ機能の認証のログ	J2EEセキュリティ機能の認証のログ	なし	なし	なし	1MB × 2	—	○	○
IIServerのコンテナログ	IIServerのコンテナログ	あり	container.log	Windows32/64 C:\Interstage\J2EE\var\deployment\ijserver\[IIServer名]\log\[プロセス通番] Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVj2ee/deployment/ijserver/[IIServer名]/log/[プロセス通番]	1MB × 2	—	○	○
IIServerのコンテナ情報ログ	IIServerのコンテナ情報ログ	あり	info.log		1MB × 2	—	○	○
J2EEモニタログギングのログファイル	J2EEモニタログギングのログファイル	なし	monitor- JavaVM.log monitor- DataSource. log monitor- Transaction. log monitor- ServletCont ainer.log monitor- EJBContain er.log		デ フ オ ル ト サ イ ズ: な し デ フ オ ル ト 世 代: 2	—	○	○
Webサーバコネクタのログ	Webサーバコネクタのログ	あり	jk2.log	Windows32/64 C:\Interstage\F3FMjs5\logs\jk2\[Webサーバ名] Solaris32/64 Linux32/64 /opt/FJSVjs5/logs/jk2/[Webサーバ名]	1MB × 2	○	○	○
Webサービスクライアントログファイル	Webサービスクライアントログファイル	あり	標準エラー		10MB × 5	—	○	○
Interstage シングル・サンクションのリポジトリサーバ	リポジトリサーバのアクセスログ	あり	ssoatcsv.log		1MB × 無限	—	○	○

ログ名称	用途	デ フ オ ル ト 出 力	デ フ オ ル ト ファ イ ル 名	デ フ オ ル ト パ ス	デ フ オ ル ト サ イ ズ × 世 代 ( × セ ッ ト 数)	WS	SJE	EE
のアクセスログ				Linux32/64 /var/opt/FJSVssov/log/				
Interstage シングル・サイ ンオンの認証 サーバのア クセスログ	認証サーバのア クセスログ	あ り	ssoatcag.log	Windows32/64 C:\Interstage\F3FMssossoatcag log Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVssoac/log/	1MB × 無限	—	○	○
Interstage シ ングル・サイ ンオンの業務 サーバのア クセスログ	業務サーバのア クセスログ	あ り	ssoatzag_業 務システム 名.log	Windows32/64 C:\Interstage\F3FMssossoatzag log Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVssoaz/log/	1MB × 無限	○	○	○
Interstage シ ングル・サイ ンオンのセ ション管理ロ グ	セッション管理ロ グ	あ り	ssossmgr.lo g	Windows32/64 C:\Interstage\F3FMssossoatcsv log Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVssovsv/log/	1MB × 無限	—	○	○
Interstage シ ングル・サイ ンオンの認証 サーバ間連 携ログ	認証サーバ間 連携ログ	あ り	ssofsv.log	Windows32/64 C:\Interstage\F3FMssossofsv log Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVssofs/log/	1MB × 無限	—	○	○
Interstage デ ィレクトリ サービスのリ ポジトリのア クセスログ	リポジトリのア クセスログ	あ り	access_YY YYMMDD _XXXXX (XXXXXX:I nterstage ディレクトリ サービスの 	Windows32/64 C:\Interstage\IREP\var\[リポジト リ名]\log Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVirep/[リポジトリ 名]\log/	5MB × 2	—	○	○
Interstage デ ィレクトリ サービスを利 用するJNDI アプリケー ションのSSL 通信ログ	JNDIアプリケー ションのSSL通 信ログ	な し	sslcall.log	なし。JNDIアプリケーションで指 定した位置に出力されます。	2MB × 2	—	○	○
Interstage デ ィレクトリ サービスのリ ポジトリデータ 格納用テーブル の作成ログ	リポジトリデータ 格納用テーブル の作成ログ	あ り	ds_mktbl.lo g	Windows32/64 C:\Interstage\IREP\var\_system Solaris32/64	1MB × 4	—	—	○

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
タ格納用データベースの作成ログ				Linux32/64 /var/opt/FJSVirep/_system				
Portable-ORBの内部ログ	Portable-ORBの内部ログ	なし	アプリケーションの場合:  apllogNNN.log  apllogNNN.old (NNN:数字) アプレットの場合 (Windows(R)クライアント上): xxxxyy.log xxxxyy.old (xxx:アプレット名、 yyy:ホスト名)	アプリケーションの場合:  Windows32/64 C:\Interstage\PORB\var\ Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVporb/  アプレットの場合(Windows(R)クライアント上): 動作環境設定コマンドで指定した ログ格納フォルダ	10MB×2	—	○	○
イベントサービスのログ	イベントサービスのログ	あり	ESLOG.log ESLOG.old	Windows32/64 C:\Interstage\ESWIN\var\ Solaris32/64 Linux32/64 /var/opt/FJSVes/	1MB×2	—	○	○
イベントサービスの共有メモリ情報	イベントサービスの共有メモリ情報	なし	ES.nnn (nnn:001～999の通番)		上限なし ×999	—	○	○
イベントサービスのトレース情報	イベントサービスのトレース情報	あり	ESLOGnnn (nnn:001～999の通番) Linux32/64 ESLOGDU MPDAEM ON ESLOGDU MPFACTORY ESLOGDU MPグループ名 ESLOGDU MPインプリメンテーション名		1MB×50	—	○	○

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
フレームワークのログ	フレームワークと、フレームワークを利用したアプリケーションの動作ログ	あり	フレームワークのログを参照	フレームワークのログを参照	フレームワークのログを参照	—	○	○
MessageQueueDirectorのプロセスログ	MessageQueueDirectorのプロセス接続ログ	あり	MQDシステム名.process.log MQDシステム名.process.log.n (n:1~9の通番)	Windows32/64 C:\Interstage\ MessageQueueDirector\mqd MQDシステム名\var\trace Solaris32 Linux32/64 /opt/FJSVmqd/mqd/MQDシステム名\var\trace	1MB×10	—	○	—
FJVMログ	Java VM異常終了時の状態情報出力	あり (異常終了時)	fjvm_pid???.log (????:プロセスID)	javaコマンド実行時のカレントディレクトリ	不定×1	○	○	○
	Java VM終了時における状態情報のメッセージ出力	なし						
	java.lang.System.gc()実行時におけるスタックトレース出力	なし						
ガーベジコレクションログ	ガーベジコレクションログ	なし	なし	なし	上限なし×1	○	○	○
ヒープダンプファイル	ヒープダンプ出力	あり	fjvm-heapdump.\${pid}.\${date-time}\${pid}:プロセスID \${date-time}:MM DDhhmmss 形式の日時	<ul style="list-style-type: none"> <li>“-Djava.io.tmpdir=&lt;パス名&gt;”をJavaの実行時に指定している場合 指定したパスとなります。</li> <li>“-Djava.io.tmpdir=&lt;パス名&gt;”をJavaの実行時に指定していない場合 各OSで以下のように決定されます。</li> </ul>	上限なし×1	○	○	○
				Windows32/64 以下の順に決定されます。 (Windows API				

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
				GetTempPath()の仕様に従います) 1. TMP環境変数(注) 2. TEMP環境変数(注) 3. USERPROFILE環境変数(注) 4. Windowsディレクトリ(C:¥WINDOWSなど)  (注) Javaプロセスを起動した利用者の各環境変数に指定されているパスです。  <b>Solaris32/64</b> /var/tmp  <b>Linux32/64</b> /tmp				
サーバーログ	IJServerクラスタのサーバーログ	あり	server.log	<b>Windows32/64</b> C:¥Interstage¥F3FMisjee¥var¥nodeagents¥jna¥<サーバーインスタンス名>¥logs¥ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/jna/<サーバーインスタンス名>/logs/	1MB × 1	○	○	○
	Java EE DAS サービスのサーバーログ	あり	server.log	<b>Windows32/64</b> C:¥Interstage¥F3FMisjee¥var¥domains¥interstage¥logs¥ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/	1MB × 1	○	○	○
	Java EE Node Agentサービスのサーバーログ	あり	server.log	<b>Windows32/64</b> C:¥Interstage¥F3FMisjee¥var¥nodeagents¥jna¥agent¥logs¥ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/jna/agent/logs/	1MB × 1	○	○	○
Java VMログ	IJServerクラスタのJava VMログ	あり	jvm.log	<b>Windows32/64</b> C:¥Interstage¥F3FMisjee¥var¥nodeagents¥jna¥<サーバーインスタンス名>¥logs¥ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/jna/<サーバーインスタンス名>/logs/	1MB × 1	○	○	○

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
Java EEモニタリングのログファイル	IIServerクラスタのモニタリングのログファイル	あり	monitor-jvm.log monitor-connectionqueue.log monitor-httplistener.log monitor-connection.log monitor-threadpool.log monitor-statelesssession.log monitor-statefulsession.log monitor-messagedriver.log monitor-entitybean.log monitor-jdbcpool.log monitor-transaction.log monitor-connectorpool.log	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\<サーバーインスタンス名>\logs\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/<サーバーインスタンス名>/logs/	1MB × 1	○	○	○
Java EE DASサービスのモニタリングのログファイル	あり	monitor-jvm.log monitor-connectionqueue.log monitor-httplistener.log	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/	1MB × 1	○	○	○	

ログ名称	用途	デ フ オ ル ト 出 力	デフォルトファ イル名	デフォルトパス	デフォルト サイズ×世 代(×セッ ト 数)	WS	SJE	EE
			monitor-connection.log monitor-threadpool.log monitor-statelesssession.log monitor-statefulsession.log monitor-messagedriver.log monitor-entitybean.log monitor-jdbcpool.log monitor-transaction.log monitor-connectorpool.log					
HTTPアクセスログ	IIServerクラスタのHTTPアクセスログ	あり	server_access_log	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\<サーバーインスタンス名>\logs\http <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/<サーバーインスタンス名>/logs/http/	1MB × 5	○	○	○
	Java EE DASサービスのHTTPアクセスログ	あり	server_access_log	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\http <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/http/	1MB × 5	○	○	○

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
IIOPアクセスログ	IIIServerクラスタのIIOPアクセスログ	あり	iop_access.log	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\<サーバーインスタンス名>\logs\iop\ <span style="background-color: #FF8C00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; color: black; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span>  /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/<サーバーインスタンス名>/logs/iop/	3MB×2	○	○	○
	Java EE DASサービスのIIOPアクセスログ	あり	iop_access.log	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\iop\ <span style="background-color: #FF8C00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; color: black; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span>  /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/iop/	3MB×2	○	○	○
HTTPトレースログ	IIIServerクラスタのHTTPトレースログ	あり	trace.log	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\<サーバーインスタンス名>\logs\http\ <span style="background-color: #FF8C00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; color: black; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span>  /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/<サーバーインスタンス名>/logs/http/	10MB×10	○	○	○
	Java EE DASサービスのHTTPトレースログ	あり	trace.log	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\http\ <span style="background-color: #FF8C00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; color: black; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span>  /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/http/	10MB×10	○	○	○
メッセージブローカのログ	メッセージブローカのログ	あり	log.txt	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\imq\instances\<メッセージブローカ名>\log\ <span style="background-color: #FF8C00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; color: black; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span>  /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/imq/instances/<メッセージブローカ名>/log	256MB×10	—	○	○
メッセージブローカのアクセスログ	メッセージブローカのアクセスログ	あり	accesslog.txt	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\imq\instances\<メッセージブローカ名>\log\ <span style="background-color: #FF8C00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; color: black; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span>	256MB×10	—	○	○

ログ名称	用途	デフォルト出力	デフォルトファイル名	デフォルトパス	デフォルトサイズ×世代(×セット数)	WS	SJE	EE
				/var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/imq/instances/<メッセージブローカ名>/log				
Interstage JMXサービスのログインログ	Interstage JMXサービスへのログイン要求に対するログ	あり	isjmxlogin.log	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\jmx\var\log\isjmxruntimelog <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjmx/log/isjmxruntimelog	1MB × 2	○	○	○

## 注意

- Interstage HTTP Server 2.2が出力するログ情報については、「Interstage HTTP Server 2.2 運用ガイド」の「各種情報」—「ログ情報」を参照してください。
- Java EE 6機能が出力するログ情報については、「Java EE運用ガイド(Java EE 6編)」の「ログ情報」を参照してください。

## CORBAサービス

### CORBAサービスのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	accesslog、accesslog.old
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var <b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:3MB、最大値:2GB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はaccesslog.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「アクセスログのデータ」「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
設定箇所	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\config <b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/config

	<b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/config
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### CORBAサービスのプロセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	proclog、proclog.old <b>Windows32/64</b> proclogcl、proclogcl.old
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var <b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:3MB、最大値:2GB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はproclog.old、proclogcl.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「プロセスログのデータ」 「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
設定箇所	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\config <b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/config <b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/config
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### CORBAサービスのエラーログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	errlog、errlog.old <b>Windows32/64</b> errlogcl、errlogcl.old
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var <b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:3MB、最大値:2GB
レコード長	可変

ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はerrlog.old、errlogcl.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「エラーログ」 「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
設定箇所	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\config <b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/config <b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/config
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### CORBAサービスのインフォメーションログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	infolog、infolog.old <b>Windows32/64</b> infologcl、infologcl.old
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var <b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:3MB、最大値:2GB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はinfolog.old、infologcl.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「インフォメーションログ」 「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
設定箇所	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\config <b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/config <b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/config
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### CORBAサービスのIPCログ **Solaris32/64** **Linux32/64**

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ipclog、ipclog.old
デフォルトパス	<b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod

	<b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:0.1MB、最大値:0.1GB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はipclog.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「CORBAサービスのIPCログの採取」
設定箇所	設定できません。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### CORBAサービスの内部ログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	<b>Windows32/64</b> log, log.old <b>Windows32/64</b> appXXXX.log, appXXXX.old (XXXX:英数字) od.log, od.old
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var <b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:10MB、最大値:2GB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はlog.old、appXXXX.old、od.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
設定箇所	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\config <b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/config <b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/config
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	<b>Windows32/64</b> CORBAサービスの動作環境ファイル(config)のmax_processesパラメタの値の数だけappXXXX.log、appXXXX.oldは生成されます。

#### CORBAサービスのトレース情報

デフォルト出力	あり
---------	----

デフォルトファイル名	traceXXXX.log、traceXXXX.old (XXXX:英数字)
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var\trace</p> <p><b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod/trace</p> <p><b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod/trace</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:10KB、最大値:100MB
レコード長	可変
ローテーション条件	トレース情報のファイル出力時、古い情報はtraceXXXX.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「CORBAサービスのトレース情報の採取」「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
設定箇所	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\config</p> <p><b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/config</p> <p><b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/config</p>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	CORBAサービスの動作環境ファイル(config)のmax_processesパラメタの値の数だけtraceXXXX.log、traceXXXX.oldは生成されます。

#### CORBA-Javaランタイムの内部ログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	JVxxxxxxxxxx.log、JVxxxxxxxxxx.bak (xxxxxxxxxx:英数字)
デフォルトパス	CORBA-Javaアプリケーション実行時のカレントディレクトリ
世代数	デフォルト:2、最大値:2(固定)
サイズ	デフォルト:10MB、最大値:2GB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はJVxxxxxxxxxx.bakとなります。
マニュアル記載箇所	「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
設定箇所	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\config</p> <p><b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/config</p> <p><b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/config</p>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取されません。別途、ログファイルを採取してください。
備考	CORBA-Javaランタイムの運用中に出力します。

## ネーミングサービスのユーザ例外発生時のログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	cn_userexception_log、cn_userexception_log.old
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var\</p> <p><b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod/</p> <p><b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod/</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:2(固定)
サイズ	デフォルト:2MB、最大値:2MB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はcn_userexception_log.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「CORBAサービスのネーミングサービスのユーザ例外ログの採取」 「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「nsconfig」
設定箇所	以下の環境定義ファイルのcn_userexception_log_use、cn_userexception_log_sizeパラメタで設定します。 <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\nsconfig</p> <p><b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/nsconfig</p> <p><b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/nsconfig</p>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	ネーミングサービスのユーザ例外発生時に出力します。

## インターフェースリポジトリの内部ログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	標準インターフェースの場合: iclogNNN、irlogNNN (NNN:通番) valueインターフェースの場合: iclog_eNNN (NNN:通番)
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var\</p> <p><b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod/</p> <p><b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod/</p>
世代数	デフォルト:無限
サイズ	デフォルト:512KB、最大値:4096KB
レコード長	可変
ローテーション条件	irlogdumpコマンドの実行時に、通番(001～999)で出力します。

マニュアル記載箇所	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「irlogdump」 「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の 「irconfig」
設定箇所	以下の環境定義ファイルのlogging、logging memory sizeパラメタで 設定します。 <b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\irconfig <b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/irconfig <b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/irconfig
iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取されません。別途、ログファイルを採取してください。
備考	irlogdumpコマンドの実行ごとに、インターフェースリポジトリのログ情報を 出力します。 使用ディスクサイズの上限なしにログが採取されるため、ディスク容量不足が発生する可能性があります。適宜、不要になったログファイルを削除してください。

EE SJE

#### HTTP-IIOPゲートウェイの内部ログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	httpgwX_0.log、httpgwX_1.log (X:英数字)
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\var\ <b>Solaris32/64</b> /var/opt/FSUNod/ <b>Linux32/64</b> /var/opt/FJSVod/
世代数	デフォルト:2、最大値:2(固定)
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:10MB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はhttpgwX_1.logとなります。
マニュアル記載箇所	「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の 「gwconfig」
設定箇所	以下の環境定義ファイルのlogmode、max_log_file_sizeパラメタで 設定します。 <b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ODWIN\etc\gwconfig <b>Solaris32/64</b> /etc/opt/FSUNod/gwconfig <b>Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVod/gwconfig
iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### Interstage HTTP Server

##### Interstage HTTP Serverのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	accesslog、accesslog.N (N:0～999の通番)
デフォルトパス	<p style="background-color: #339966; color: white; padding: 2px;"><b>Windows32/64</b></p> C:\Interstage\F3FMihs\servers\[Webサーバ名]\logs\ <p style="background-color: #FF8C00; color: white; padding: 2px;"><b>Solaris32/64 Linux32/64</b></p> /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバ名]/logs/
世代数	デフォルト:5、最大値:999
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2047MB
レコード長	可変
ローテーション条件	<p>ログ出力によりログファイルを更新する際に、ファイルサイズが指定した最大ファイルサイズを超えた場合、古い情報はaccesslog.Nとなります。</p> <p>なお、デフォルトでは、ローテーションはファイルサイズ単位で設定されていますが、時刻単位／日付単位／曜日単位／日数単位で設定することも可能です。</p>
マニュアル記載箇所	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」の「運用・保守」－「アクセスログ」「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「ihsrlog」
設定箇所	<p>ログのファイル名、パス、および出力項目は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [サービス] &gt; [Webサーバ] &gt; [Webサーバ名] &gt; [環境設定]タブ &gt; [詳細設定[表示]]ボタン &gt; [アクセスログ]</li> <li>以下の環境定義ファイルのCustomLogディレクティブ  <p style="background-color: #339966; color: white; padding: 2px;"><b>Windows32/64</b></p>           C:\ Interstage\ F3FMihs\ servers\ [Webサーバ名]\ conf\ httpd.conf         <p style="background-color: #FF8C00; color: white; padding: 2px;"><b>Solaris32/64 Linux32/64</b></p>           /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバ名]/conf/httpd.conf         </li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	<p>採取対象</p> <p> <b>注意</b></p> <p>ログファイルの出力先をデフォルトパスから変更した場合、採取対象となりません。その場合、別途ログファイルを採取してください。</p>
備考	Webクライアントからのアクセス状況を出力します。

### Interstage HTTP Serverのエラーログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	errorlog、errorlog.N (N:0～999の通番)
デフォルトパス	<p style="background-color: #339966; color: white; padding: 2px;"><b>Windows32/64</b></p> C:\Interstage\F3FMihs\servers\[Webサーバ名]\logs\ <p style="background-color: #FF8C00; color: white; padding: 2px;"><b>Solaris32/64 Linux32/64</b></p> /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバ名]/logs/
世代数	デフォルト:5、最大値:999
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2047MB
レコード長	可変

ローテーション条件	ログ出力によりログファイルを更新する際に、ファイルサイズが指定した最大ファイルサイズを超えた場合、古い情報はerrorlog.Nとなります。なお、デフォルトでは、ローテーションはファイルサイズ単位で設定されていますが、時刻単位／日付単位／曜日単位／日数単位で設定することも可能です。
マニュアル記載箇所	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」の「運用・保守」－「エラーログ」「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「ihsrlog」
設定箇所	<p>ログのファイル名、およびパスは、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [サービス] &gt; [Webサーバー] &gt; [Webサーバー名] &gt; [環境設定]タブ &gt; [詳細設定[表示]]ボタン &gt; [エラーログ]</li> <li>以下の環境定義ファイルのErrorLogディレクティブ  <span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span>            C:¥Interstage¥F3FMihs¥servers¥[Webサーバー名]¥conf¥httpd.conf  <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span>            /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバー名]/conf/httpd.conf         </li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	<p>採取対象</p> <p> <b>注意</b></p> <p>ログファイルの出力先をデフォルトから変更した場合、対象となりません。その場合、別途ログファイルを採取してください。</p>
備考	Interstage HTTP Serverでエラーが発生した場合のエラーメッセージを出力します。

### Interstage HTTP Serverのトレースログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	tracelog、tracelog.N (N:0～999の通番)
デフォルトパス	<span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:¥Interstage¥F3FMihs¥servers¥[Webサーバー名]¥logs¥ <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバー名]/logs/
世代数	デフォルト:5、最大値:999
サイズ	デフォルト:2MB、最大値:2047MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ログ出力によりログファイルを更新する際に、ファイルサイズが指定した最大ファイルサイズを超えた場合、古い情報はtracelog.Nとなります。なお、デフォルトでは、ローテーションはファイルサイズ単位で設定されていますが、時刻単位／日付単位／曜日単位／日数単位で設定することも可能です。
マニュアル記載箇所	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」の「運用・保守」－「トレースログ」「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「ihsrlog」
設定箇所	<p>ログのファイル名、およびパスは、以下の環境定義ファイルのIHSTraceLogディレクティブで設定します。</p> <p><span style="background-color: #008000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span>            C:¥Interstage¥F3FMihs¥servers¥[Webサーバー名]¥conf¥httpd.conf  <span style="background-color: #FF0000; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span>            /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバー名]/conf/httpd.conf         </p>

iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象   <b>注意</b> ログファイルの出力先をデフォルトから変更した場合、対象となりません。その場合、別途ログファイルを採取してください。
備考	Webクライアントとの入出力情報、およびプラグインモジュールとの入出力情報を出力します。

#### Interstage HTTP Serverのオペレーションログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	opelog、opelog.old
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMihs\var\opelog <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVihs/var/opelog/
世代数	デフォルト:2、最大値:2(固定)
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:1MB(固定)
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はopelog.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」の「運用・保守」－「オペレーションログ」
設定箇所	設定できません。
iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象
備考	Interstage HTTP Serverに対する操作履歴を出力します。

#### Interstage HTTP Serverの保守ログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ihsapi.log、ihsapi.log.last
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMihs\var\ihsapi <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVihs/var/.ihsapi/
世代数	デフォルト:2、最大値:2(固定)
サイズ	デフォルト:5MB、最大値:5MB(固定)
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はihsapi.log.lastとなります。
マニュアル記載箇所	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」の「運用・保守」－「保守ログ」
設定箇所	設定できません。
iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象

備考	Interstage HTTP Serverの内部情報を出力します。
----	------------------------------------

EE SJE

## Interstage JMS

### Interstage JMSのコンソールログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	fjmsconsole.log、fjmsconsole.logN (N:1~3の通番)
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\jms\var</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVjms/</p>
世代数	デフォルト:3、最大値:3(固定)
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:1MB(固定)
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はfjmsconsole.logNとなります。
マニュアル記載箇所	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「Interstage JMSの異常時の対処」—「コンソールログ」
設定箇所	設定できません。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

### Interstage JMSのスナップログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	なし
デフォルトパス	なし
世代数	デフォルト:1、最大値:1(固定)
サイズ	デフォルト:上限なし、最大値:上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	なし
マニュアル記載箇所	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「Interstage JMSの異常時の対処」—「スナップログ」。
設定箇所	<p>以下のJava VMの起動時パラメタで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• -Dfjmssnapfile=ログファイル名</li> <li>• -Dfjmssnapplevel=ログの出力レベル</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	<p>ログファイルの出力先に以下のパスを指定した場合は、採取対象となります。以下のパス以外を指定した場合は、別途ログファイルを採取してください。</p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\jms\var</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVjms/</p>

	上記以外のパスを指定した場合は、別途ログファイルを採取してください。
備考	なし

## Interstage管理コンソール

### Interstage管理コンソールのログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	isadmin_logon0.log、isadmin_logon1.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\gui\trc\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisgui/trc/</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:2(固定)
サイズ	デフォルト:200KB、最大値:200KB(固定)
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、またはInterstage管理コンソールのサービス再起動時に、交互にローテーションを行います。
マニュアル記載箇所	「メッセージ集」の「Interstage管理コンソールが output するログメッセージ」—「Interstage管理コンソールのログ」
設定箇所	ログのファイル名、およびパスは、設定できません。 ログの出力条件は、以下の環境定義ファイルの「Logon Trace Flag:」で設定します。
	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\gui\etc\config</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVisgui/config</p>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

### Interstage管理コンソールのバックアップ時のエラーログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	backup_error.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\gui\trc\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisgui/trc/</p>
世代数	デフォルト:1、最大値:1(固定)
サイズ	デフォルト:上限なし、最大値:上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	なし
マニュアル記載箇所	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「バックアップコマンド」—「isguibackup」
設定箇所	設定できません。

iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### Interstage管理コンソールのリストア時のエラーログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	restore_error.log
デフォルトパス	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\gui\trc\ <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /var/opt/FJSVisgui/trc/
世代数	デフォルト:1、最大値:1(固定)
サイズ	デフォルト:上限なし、最大値:上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	なし
マニュアル記載箇所	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「バックアップコマンド」—「isgirestore」
設定箇所	設定できません。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### Interstage管理コンソールのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	F3FMisgui.accesslog、F3FMisgui.accesslog.0~3
デフォルトパス	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\gui\trc\ <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /var/opt/FJSVisgui/trc/
世代数	デフォルト:5、最大値:5
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:1MB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はF3FMisgui.accesslog.Nとなります。
マニュアル記載箇所	「セキュリティシステム運用ガイド」の「セキュリティ監査証跡機能」—「ログインログの運用」—「■Interstage管理コンソールの管理コンソール操作端末の特定」
設定箇所	設定できません。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## J2EE

EE SJE

### J2EEセキュリティ機能の認証のログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	なし
デフォルトパス	なし
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2048MB
レコード長	可変
ローテーション条件	指定ログサイズを超えた場合、古い情報は(ログファイル名).oldとなります。
マニュアル記載箇所	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「セキュリティ機能の認証のログ採取」
設定箇所	<p>以下のJava VMの起動時パラメタ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• -Dcom.fujitsu.interstage.j2ee.security.logfile=ログファイル名</li> <li>• -Dcom.fujitsu.interstage.j2ee.security.logsize=ログサイズ</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

### IJServerのコンテナログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	container.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\J2EE\var\deployment\ijserver\[IJServer名]\log\[プロセス通番]</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVj2ee/deployment/ijserver/[IJServer名]/log/[プロセス通番]</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:10
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:512MB
レコード長	可変
ローテーション条件	指定ログサイズ、または指定時間を超えた場合、古い情報はcontainer-YYYY_MM_DD-hh_mm_ss.logとなります。
マニュアル記載箇所	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「J2EEアプリケーション開発・運用時の異常」の「異常情報の参照」
設定箇所	<p>ログ出力先ディレクトリは以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• isj2eeadminコマンドのIJServer定義</li> <li>• Interstage管理コンソールの [ワークユニット] &gt; 「ワークユニット名」 &gt; [環境設定]タブ &gt; [詳細設定] &gt; [ワークユニット設定] &gt; [ログ出力ディレクトリ]</li> </ul> <p>ローテーション条件は以下で設定します。</p> <p>Interstage管理コンソールの [ワークユニット] &gt; 「ワークユニット名」 &gt; [ログ定義]</p>

iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### IJServerのコンテナ情報ログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	info.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\J2EE\var\deployment\ijserver\[IJServer名]\log\[プロセス通番]</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVj2ee/deployment/ijserver/[IJServer名]/log/[プロセス通番]</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:1MB
レコード長	可変
ローテーション条件	IJServer起動時に1MBを超えている場合、古い情報はinfo.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「J2EEアプリケーション開発・運用時の異常」の「異常情報の参照」
設定箇所	<p>ログ出力先ディレクトリは以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>isj2eeadminコマンドのIJServer定義</li> <li>Interstage管理コンソールの [ワークユニット] &gt; 「ワークユニット名」&gt; [環境設定]タブ &gt; [詳細設定] &gt; [ワークユニット設定] &gt; [ログ出力ディレクトリ]</li> </ul> <p>ローテーション条件は設定できません。</p>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### J2EEモニタリングのログファイル

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	monitor-JavaVM.log monitor-DataSource.log monitor-Transaction.log monitor-ServletContainer.log monitor-EJBContainer.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\J2EE\var\deployment\ijserver\[IJServer名]\log\[プロセス通番]</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVj2ee/deployment/ijserver/[IJServer名]/log/[プロセス通番]</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:64
サイズ	デフォルト:-、最大値:可変
レコード長	可変

ローテーション条件	指定時間を超えた場合、古い情報はmonitor-[ロギング対象名]-YYYY_MM_DD-hh_mm_ss.logとなります。
マニュアル記載箇所	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「J2EEモニタログのログファイル」
設定箇所	<p>ログ出力先ディレクトリは以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• isj2eeadminコマンドのIJServer定義</li> <li>• Interstage管理コンソールの [ワークユニット] &gt; 「ワークユニット名」 &gt; [環境設定]タブ &gt; [詳細設定] &gt; [ワークユニット設定] &gt; [ログ出力ディレクトリ]</li> </ul> <p>ローテーション条件は、isj2eemonitorコマンドのオプションで指定します。</p>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### Webサーバコネクタのログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	jk2.log
デフォルトパス	<p>Windows32/64 C:\Interstage\F3FMjs5\logs\jk2\[Webサーバ名]</p> <p>Solaris32/64 Linux32/64 /opt/FJSVjs5/logs/jk2/[Webサーバ名]</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:10
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:512MB
レコード長	可変
ローテーション条件	指定ログサイズ、または指定時間を超えた場合、古い情報はjk2_YY.MM.DD_hh.mm.ss.logとなります。
マニュアル記載箇所	Interstage管理コンソールの[サービス] > [Webサーバ] > 「Webサーバ名」 > [Webサーバコネクタ] > [ログ設定]のヘルプ
設定箇所	Interstage管理コンソールの [サービス] > [Webサーバ] > 「Webサーバ名」 > [Webサーバコネクタ] > [ログ設定]
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

EE SJE

#### Webサービスクライアントログファイル

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	標準エラー
デフォルトパス	なし
世代数	デフォルト:5、最大値:100
サイズ	デフォルト:10MB、最大値:2048MB
レコード長	可変

ローテーション条件	指定ログサイズを超えた場合、古い情報はxxxxxとなります。
マニュアル記載箇所	「J2EE ユーザーズガイド(旧版互換)」の「Webサービス(クライアント機能)の運用方法」の「クライアント機能のログ」
設定箇所	以下のシステムプロパティに設定されているWebサービス設定ファイル(config.properties) <ul style="list-style-type: none"> <li>• com.fujitsu.interstage.isws.configuration</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

### Interstage シングル・サインオン

EE SJE

#### リポジトリサーバのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ssoatcsv.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMssos\ssootcsv\log\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVssosv/log/</p>
世代数	デフォルト:無限
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2000MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ファイルサイズが指定した最大サイズを超えた場合、世代数によって古い情報は以下になります。 一世代だけ保存:アクセスログのファイル名.last 毎回別ファイルで保存:アクセスログのファイル名.YYYYMMDDHHMMSS
マニュアル記載箇所	「メッセージ集」の「シングル・サインオンのアクセスログ」-「リポジトリサーバのアクセスログ」
設定箇所	Interstage管理コンソール-[システム] > [セキュリティ] > [シングル・サインオン] > [認証基盤] > [リポジトリサーバ] > [環境設定]タブ > [アクセスログ]
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	Interstage管理コンソールのデフォルト設定のままでは使用ディスクサイズの上限なしにログが採取されます。ディスク不足発生を防止するために、定期的に不要になったログファイルを削除するか、ログの採取方法を変更してください。

EE SJE

#### 認証サーバのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ssoatcag.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMssos\ssootcag\log\</p>

	<b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVssoac/log/
世代数	デフォルト:無限
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2000MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ファイルサイズが指定した最大サイズを超えた場合、世代数によって古い情報は以下のようになります。 一世代だけ保存:アクセスログのファイル名.last 毎回別ファイルで保存:アクセスログのファイル名.YYYYMMDDHHMMSS
マニュアル記載箇所	「メッセージ集」の「シングル・サインオンのアクセスログ」-「認証サーバのアクセスログ」
設定箇所	Interstage管理コンソール-[システム] > [セキュリティ] > [シングル・サインオン] > [認証基盤] > [認証サーバ] > [環境設定]タブ > [アクセスログ]
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	Interstage管理コンソールのデフォルト設定のままでは使用ディスクサイズの上限なしにログが採取されます。ディスク不足発生を防止するために、定期的に不要になったログファイルを削除するか、ログの採取方法を変更してください。

#### 業務サーバのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ssoatzag_業務システム名.log
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMssossoatzag\log\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVssoaz/log/
世代数	デフォルト:無限
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2000MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ファイルサイズが指定した最大サイズを超えた場合、世代数によって古い情報は以下のようになります。 一世代だけ保存:アクセスログのファイル名.last 毎回別ファイルで保存:アクセスログのファイル名.YYYYMMDDHHMMSS
マニュアル記載箇所	「メッセージ集」の「シングル・サインオンのアクセスログ」-「業務サーバのアクセスログ」
設定箇所	Interstage管理コンソール-[システム] > [セキュリティ] > [シングル・サインオン] > [業務システム] > [業務システム名] > [環境設定]タブ > [アクセスログ]
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	Interstage管理コンソールのデフォルト設定のままでは使用ディスクサイズの上限なしにログが採取されます。ディスク不足発生を防止するために、定期的に不要になったログファイルを削除するか、ログの採取方法を変更してください。

## セッション管理ログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ssossmgr.log
デフォルトパス	<p style="background-color: #32CD32; color: white; padding: 2px;">Windows32/64</p> <p>C:\Interstage\F3FMssos\soatcsv\log\</p> <p style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px;">Solaris32/64 Linux32/64</p> <p>/var/opt/FJSVssosv/log/</p>
世代数	デフォルト:無限
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2000MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ファイルサイズが指定した最大サイズを超えた場合、世代数によって古い情報は以下のようになります。 一世代だけ保存:セッション管理ログのファイル名.last 毎回別ファイルで保存:セッション管理ログのファイル名.YYYYMMDDHHMMSS
マニュアル記載箇所	「メッセージ集」の「シングル・サインオンのセッション管理ログ」
設定箇所	Interstage管理コンソール-[システム] > [セキュリティ] > [シングル・サインオン] > [認証基盤] > [リポジトリサーバ] > [環境設定]タブ > [セッション管理ログ]
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	Interstage管理コンソールのデフォルト設定のままでは使用ディスクサイズの上限なしにログが採取されます。ディスク不足発生を防止するために、定期的に不要になったログファイルを削除するか、ログの採取方法を変更してください。

## 認証サーバ間連携ログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ssofsv.log
デフォルトパス	<p style="background-color: #32CD32; color: white; padding: 2px;">Windows32/64</p> <p>C:\Interstage\F3FMssos\sofs\log\</p> <p style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px;">Solaris32/64 Linux32/64</p> <p>/var/opt/FJSVssofs/log/</p>
世代数	デフォルト:無限
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:2000MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ファイルサイズが指定した最大サイズを超えた場合、世代数によって古い情報は以下のようになります。 一世代だけ保存:認証サーバ間連携ログのファイル名.last 毎回別ファイルで保存:認証サーバ間連携ログのファイル名.YYYYMMDDHHMMSS
マニュアル記載箇所	「メッセージ集」の「シングル・サインオンの認証サーバ間連携ログ」

設定箇所	Interstage管理コンソール-[システム] > [セキュリティ] > [シングル・サインオン] > [認証基盤] > [認証サーバ] > [環境設定]タブ > [認証サーバ間連携ログ]
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>認証サーバ間連携を行う場合にだけ出力されるログです。</li> <li>Interstage管理コンソールのデフォルト設定のままでは使用ディスクサイズの上限なしにログが採取されます。ディスク不足発生を防止するために、定期的に不要になったログファイルを削除するか、ログの採取方法を変更してください。</li> </ul>

## Interstageディレクトリサービス

EE SJE

### リポジトリのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	access_YYYYMMDD_XXXXXX (XXXXXX:Interstageディレクトリサービスの管理名。内容、桁数ともに可変。)
デフォルトパス	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\IREP\var\[リポジトリ名]\log <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /var/opt/FJSVirep/[リポジトリ名]/log/
世代数	デフォルト:2、最大値:99
サイズ	デフォルト:5MB、最大値:1024MB
レコード長	可変
ローテーション条件	Interstage管理コンソールで指定した条件です。以下の3種類があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>サイズ(初期値)</li> <li>月</li> <li>日</li> </ul>
マニュアル記載箇所	「ディレクトリサービス運用ガイド」の「リポジトリの運用監視」-「アクセスログの設定方法」
設定箇所	以下のいずれか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [システム] &gt; [サービス] &gt; [リポジトリ]の[新規作成]または[環境設定]の[アクセスログ定義]</li> <li>irepconfigコマンドの「createサブコマンド」および「modifyサブコマンド」のリポジトリ環境定義ファイルで指定する以下の項目 <ul style="list-style-type: none"> <li>output_accesslog(アクセスログの出力指定)</li> <li>accesslog_level(アクセスログの出力レベル)</li> <li>accesslog_dir(アクセスログの格納先)</li> <li>accesslog_rotation(アクセスログのローテーションタイプ)</li> <li>accesslog_size(アクセスログのサイズ)</li> <li>accesslog_backup(アクセスログの世代管理数)</li> </ul> </li> </ul>

iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象
備考	なし

EE SJE

**JNDIアプリケーションのSSL通信ログ**

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	sslcall.log
デフォルトパス	なし。JNDIアプリケーションで指定した位置に出力されます。
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:2MB、最大値:2MB
レコード長	可変
ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報は_sslcall.oldになります。
マニュアル記載箇所	「ディレクトリサービス運用ガイド」の「アプリケーションの作成(JNDI)」-「セッションのオープン、初期設定とユーザ認証」
設定箇所	ログファイルの出力先は、JNDIアプリケーションのシステムプロパティで指定します。ログファイルの名前、サイズ、世代数は変更できません。
iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象ではありません。
備考	なし

EE

**リポジトリデータ格納用テーブルの作成ログ**

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ds_mktbl.log
デフォルトパス	<p style="background-color: #339933; color: white; padding: 2px;">Windows32/64</p> C:\Interstage\IREP\var\_system <p style="background-color: #FF8C00; color: black; padding: 2px;">Solaris32/64</p> <p style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px;">Linux32/64</p> /var/opt/FJSVirep/_system
世代数	3
サイズ	1MB
レコード長	可変
ローテーション条件	3世代(3回実行分)までバックアップ管理されます。ファイルは、以下のように変名されながらローテーションされ、3世代以降は廃棄されます。 1. ds_mktbl.log 2. ds_mktbl.log.1 3. ds_mktbl.log.2 4. ds_mktbl.log.3 5. 廃棄
マニュアル記載箇所	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「irepconfig」-「mktblサブコマンド」
設定箇所	設定できません。

iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## EE [SJE] Portable-ORB

### Portable-ORBの内部ログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル 名	アプリケーションの場合: apllogNNN.log、apllogNNN.old (NNN:数字) アプレットの場合(Windows(R)クライアント上): xxxxyy.log、xxxxyy.old (xxx:アプレット名、yyy:ホスト名)
デフォルトパス	アプリケーションの場合: <b>Windows32/64</b> C:\Interstage\PORB\var\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVporb/ アプレットの場合(Windows(R)クライアント上): 動作環境設定コマンドで指定したログ格納フォルダ
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:10MB、最大値:2GB
レコード長	可変
ローテーション条 件	最大サイズを超えた場合、古い情報はapllogNNN.oldまたは xxxxyy.oldとなります。
マニュアル記載箇 所	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「porbeditenv」
設定箇所	ログファイルの採取、パス、およびファイルサイズは、porbeditenvコマ ンドを起動して表示される[Portable-ORB動作環境設定]画面の[ログ 情報を採取]、[ログファイルサイズ]、および[ログ格納ディレクトリ]で設 定します。
iscollectinfo時の 採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## EE [SJE] イベントサービス

### イベントサービスのログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル 名	ESLOG.log、ESLOG.old
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ESWIN\var\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVes/
世代数	デフォルト:2、最大値:2(固定)
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:512MB
レコード長	可変

ローテーション条件	最大サイズを超えた場合、古い情報はESLOG.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「メッセージ集」の「イベントサービスのログメッセージ」「アプリケーション作成ガイド(イベントサービス編)」の「ログ」
設定箇所	ログのファイル名、およびパスは、設定できません。 ログファイルサイズおよびエラー情報レベルは、esetcnfコマンドの-s -logsize、-s -loglevelオプションで設定します。esetcnfコマンドについては、「リファレンスマニュアル(コマンド編)」を参照してください。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	ノーティフィケーションサービス上に構築されたInterstage JMSがメッセージセレクタ機能を使用した場合にも出力されます。

#### イベントサービスの共有メモリ情報

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	ES.nnn (nnn:001～999の通番)
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ESWIN\var\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVes/
世代数	デフォルト:999、最大値:999
サイズ	デフォルト:上限なし、最大値:上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	esdumpコマンド実行による共用メモリ情報の出力時に、古い情報はES.nnnとなります。
マニュアル記載箇所	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「esdump」
設定箇所	設定できません。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### イベントサービスのトレース情報

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	ESLOGnnn (nnn:001～999の通番) <b>Linux32/64</b> ESLOGDUMPDAEMON、ESLOGDUMPFACTORY、 ESLOGDUMPグループ名、ESLOGDUMPインプリメンテーション名
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\ESWIN\var\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVes/
世代数	デフォルト:50、最大値:1000
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:10MB
レコード長	可変
ローテーション条件	eslogdumpコマンド実行またはエラー発生によるトレース情報の出力時に、古い情報はESLOGnnnとなります。

マニュアル記載箇所	「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「eslogdump」「チューニングガイド」の「イベントサービスの環境定義」—「traceconfig」
設定箇所	ログのファイル名、およびパスは、設定できません。 ファイルサイズ、および世代数は、以下の環境定義ファイルで設定します。  <b>Windows32/64</b> C:\Interstage\eswin\etc\traceconfig <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVes/traceconfig
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## EE [SJE] フレームワーク

### フレームワークのログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	デフォルトではIJServerのコンテナログに出力されます。 <a href="#">IJServerのコンテナログ</a> の説明を参照してください。
デフォルトパス	デフォルトではIJServerのコンテナログに出力されます。 <a href="#">IJServerのコンテナログ</a> の説明を参照してください。
世代数	デフォルトではIJServerのコンテナログに出力されます。 <a href="#">IJServerのコンテナログ</a> の説明を参照してください。 フレームワークのログ出力先を変更してファイルとした場合は、世代数を任意に指定可能です。
サイズ	デフォルトではIJServerのコンテナログに出力されます。 <a href="#">IJServerのコンテナログ</a> の説明を参照してください。 フレームワークのログ出力先を変更してファイルとした場合は、サイズを任意に指定可能です。
レコード長	可変
ローテーション条件	デフォルトではIJServerのコンテナログに出力されます。 <a href="#">IJServerのコンテナログ</a> の説明を参照してください。 フレームワークのログ出力先を変更してファイルとした場合は、アプリケーションの指定によります。
マニュアル記載箇所	「Apcoordinatorユーザーズガイド」の「アプリケーションログ」
設定箇所	設定はアプリケーションロジック内またはログ定義ファイルに記述します。
iscollectinfo時の採取対象であるか	IJServerのコンテナログに出力している場合は、 <a href="#">IJServerのコンテナログ</a> として採取されます。 フレームワークのログ出力先を変更している場合は採取されません。
備考	なし

## EE MessageQueueDirector

### MessageQueueDirectorのプロセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	MQDシステム名.process.log MQDシステム名.process.log.[n] (n:1~9の通番)

デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\MessageQueueDirector\mqd\MQDシステム名\var\trace <b>Solaris32 Linux32/64</b> /opt/FJSVmqd/mqd/MQDシステム名/var/trace
世代数	10
サイズ	1MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ログ出力によりログファイルを更新する際に、ファイルサイズが最大ファイルサイズを超えた場合、ローテーションします。
マニュアル記載箇所	<b>Windows32 Solaris32</b> 「MessageQueueDirector説明書」の「機能」の「プロセスログ」
設定箇所	ログのファイル名、パスは、世代数、サイズは設定できません。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## JDK/JRE

### FJVMログ

デフォルト出力	a)Java VM異常終了時の状態情報出力:あり(異常終了時) b)Java VM終了時における状態情報のメッセージ出力:なし c)java.lang.System.gc()実行時におけるスタックトレース出力:なし
デフォルトファイル名	fjvm_pid????.log (????はプロセスID) 標準出力へも並行して出力する(注) <b>EE SJE</b> 注) IIServer使用時はコンテナ情報ログ(info.log)
デフォルトパス	javaコマンド実行時のカレントディレクトリ
世代数	デフォルト:1、最大値:1(固定)
サイズ	a)実行するJavaアプリケーションにより可変(通常は数100KB～数MB程度) b)数10KB c)上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	なし
マニュアル記載箇所	「チューニングガイド」の「JDK/JREのチューニング」の以下 a)「FJVMログ」 b)「Java VM終了時における状態情報のメッセージ出力機能」 c)「java.lang.System.gc()実行時におけるスタックトレース出力機能」
設定箇所	a)なし b)Java VMオプション「-XX:+VMTerminatedMessage」指定により出力 c)Java VMオプション「-XX:+PrintJavaStackAtSystemGC」指定により出力
iscollectinfo時の採取対象であるか	<b>EE SJE</b> IIServer使用時はコンテナ情報ログ(info.log)として採取対象。 それ以外は対象となりません。
備考	なし

## ガーベジコレクションログ

デフォルト出力	なし
デフォルトファイル名	標準出力 <b>EE SJE</b> (IJServer使用時はコンテナ情報ログ(info.log))
デフォルトパス	なし
世代数	デフォルト:1、最大値:1(固定)
サイズ	上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	なし
マニュアル記載箇所	「チューニングガイド」の「JDK/JREのチューニング」の「ガーベジコレクションのログ出力」
設定箇所	Java VMオプション「-verbose:gc」指定により出力。 Java VMオプション「-Xloggc:<file>」指定により、出力先変更可能。
iscollectinfo時の採取対象であるか	<b>EE SJE</b> IJServer使用時はコンテナ情報ログ(info.log)として採取対象。 それ以外は対象となりません。
備考	なし

## ヒープダンプファイル

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	fjvm-heaptdump.\${pid}.\${date-time} \${pid}:プロセスID \${date-time}:MMDDhhmmss形式の日時
デフォルトパス	<ul style="list-style-type: none"> <li>“-Djava.io.tmpdir=&lt;パス名&gt;”をJavaの実行時に指定している場合 指定したパスとなります。</li> <li>“-Djava.io.tmpdir=&lt;パス名&gt;”をJavaの実行時に指定していない場合 各OSで以下のように決定されます。           <p><b>Windows32/64</b> 以下の順に決定されます。(Windows API GetTempPath()の仕様に従います)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. TMP環境変数 (注)</li> <li>2. TEMP環境変数 (注)</li> <li>3. USERPROFILE環境変数 (注)</li> <li>4. Windowsディレクトリ (C:¥WINDOWSなど)</li> </ol> <p>(注) Javaプロセスを起動した利用者の各環境変数に指定されているパスです。</p> <p><b>Solaris32/64</b> /var/tmp</p> <p><b>Linux32/64</b> /tmp</p> </li> </ul>
世代数	デフォルト:1、最大値:1(固定)

サイズ	上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	なし
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「Java監視機能」の「データ説明」
設定箇所	Java監視機能のクライアントから利用者の操作により出力します。
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象ではありません。
備考	なし

## Java EE

### サーバーログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	server.log
デフォルトパス	<p><b>IJServerクラスタのサーバーログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\&lt;サーバーインスタンス名&gt;\logs\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/&lt;サーバーインスタンス名&gt;/logs/</p> <p><b>Java EE DASサービスのサーバーログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/</p> <p><b>Java EE Node Agentサービスのサーバーログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\agent\logs\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/agent/logs/</p>
世代数	デフォルト:1、最大値:9
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:512MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ログサイズ/時刻を超えた場合、古い情報は server.log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ssとなります。 YYYY_MM_DD-hh_mm_ssは、ローテーションが実行された時刻です。
マニュアル記載箇所	<p><b>IJServerクラスタのサーバーログ/Java EE DASサービスのサーバーログ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「Java EE運用ガイド」の「Java EEアプリケーションのログ」</li> <li>・「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「configs.config.log-service の定義項目」</li> </ul>

	<p><b>Java EE Node Agentサービスのサーバーログ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「Java EE運用ガイド」の「Java EEアプリケーションのログ」</li> <li>・「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「node-agents.node-agent.log-serviceの定義項目」</li> </ul>
設定箇所	<p>ログファイルの出力先は、以下のいずれかで設定します。</p> <p><b>IJServerクラスタのサーバーログ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>・ asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul> <p><b>Java EE DASサービスのサーバーログ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Interstage管理コンソール [設定] &gt; [server-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>・ asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul> <p><b>Java EE Node Agentサービスのサーバーログ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Interstage管理コンソール [ノードエージェント] &gt; [ijna] &gt; [ロガーの設定]タブ</li> <li>・ asadminコマンドのsetサブコマンド node-agents.node-agent.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

### Java VMログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	jvm.log
デフォルトパス	<p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\&lt;サーバーインスタンス名&gt;\logs\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/&lt;サーバーインスタンス名&gt;/logs/</p>
世代数	デフォルト:1、最大値:9
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:512MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ログサイズ/時刻/世代数を超えた場合、古い情報は jvm.log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ssとなります。 YYYY_MM_DD-hh_mm_ssは、ローテーションが実行された時刻です。
マニュアル記載箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Java EE運用ガイド」の「Java EEアプリケーションのログ」</li> <li>・「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「configs.config.log-service の定義項目」</li> </ul>

設定箇所	ログファイルの出力先は、以下のいずれかで設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### Java EEモニタロギングのログファイル

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	monitor-jvm.log monitor-connectionqueue.log monitor-httplistener.log monitor-connection.log monitor-threadpool.log monitor-statelesssession.log monitor-statefulsession.log monitor-messagedriven.log monitor-entitybean.log monitor-jdbcpool.log monitor-transaction.log monitor-connectorpool.log
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\<サーバーインスタンス名>\logs\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/<サーバーインスタンス名>/logs/
世代数	デフォルト:1、最大値:9
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:512MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ログサイズ/時刻/世代数を超えた場合、古い情報はmonitor-[採取対象名].log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ssとなります。 YYYY_MM_DD-hh_mm_ssは、ローテーションが実行された時刻です。
マニュアル記載箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li>「チューニングガイド」の「モニタロギング」-「モニタロギングのログファイル」</li> <li>「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「configs.config.log-service の定義項目」、「configs.config.monitoring-service の定義項目」</li> </ul>
設定箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>IJServerクラスタのモニタロギングのログファイル</b></li> <li>ログファイルの出力先、ローテーションタイプ、世代数は、以下のいずれかで設定します。</li> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [ロガーの設定]</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」、「ローテーションのタイプ」、「ログサイズ」、「ログ収集時間」、「世代数」</li> </ul> <p>モニタロギングの有効、採取間隔は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [監視サービス]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.monitoring-serviceの定義項目の「モニタロギング」、「採取間隔」</li> <li><b>Java EE DASサービスのモニタロギングのログファイル</b></li> <li>ログファイルの出力先、ローテーションタイプ、世代数は、以下のいずれかで設定します。</li> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [server-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド server-config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」、「ローテーションのタイプ」、「ログサイズ」、「ログ収集時間」、「世代数」</li> </ul> <p>モニタロギングの有効、採取間隔は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [server-config] &gt; [監視サービス]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド server-config.monitoring-serviceの定義項目の「モニタロギング」、「採取間隔」</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

#### HTTPアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	server_access_log
デフォルトパス	<p><b>IJServerクラスタのHTTPアクセスログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\&lt;サーバーインスタンス名&gt;\logs\http\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/&lt;サーバーインスタンス名&gt;/logs/http/</p> <p><b>Java EE DASサービスのHTTPアクセスログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\http\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/http/</p>
世代数	デフォルト:5、最大値:999

サイズ	デフォルト:1MB、最大値:512MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ログサイズ/時刻を超えた場合、古い情報は server_access_log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ssとなります。 前回のローテーションから1秒以内にローテーションが実行された場合は、server_access_log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ss.通し番号となります。 YYYY_MM_DD-hh_mm_ssは、ローテーションが実行された時刻です。
マニュアル記載箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Java EE運用ガイド」の「Java EEアプリケーションのログ」</li> <li>「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「configs.config.log-serviceの定義項目」、「configs.config.http-serviceの定義項目」</li> </ul>
設定箇所	<p><b>IJServerクラスタのHTTPアクセスログ</b></p> <p>ログの有効、ローテーションタイプ、世代数、形式は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [HTTPサービス] &gt; [ログ]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.http-serviceの定義項目の「HTTPアクセスログの出力」、「形式」、「ローテーションタイプ」、「ログサイズ」、「ログ収集時間」、「世代数」</li> </ul> <p>ログファイルの出力先は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul> <p><b>Java EE DASサービスのHTTPアクセスログ</b></p> <p>ログの有効、ローテーションタイプ、世代数、形式は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [server-config] &gt; [HTTPサービス] &gt; [ログ]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド server-config.http-serviceの定義項目の「HTTPアクセスログの出力」、「形式」、「ローテーションタイプ」、「ログサイズ」、「ログ収集時間」、「世代数」</li> </ul> <p>ログファイルの出力先は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [server-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド server-config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## IIOPアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	iiop_access.log
デフォルトパス	<p><b>IJServerクラスタのIIOPアクセスログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\&lt;サーバーインスタンス名&gt;\logs\iiop\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/&lt;サーバーインスタンス名&gt;/logs/iiop/</p> <p><b>Java EE DASサービスのIIOPアクセスログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\iiop\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/iiop/</p>
世代数	デフォルト:2、最大値:999
サイズ	デフォルト:3MB、最大値:2000MB
レコード長	可変
ローテーション条件	ログサイズを超えた場合、古い情報は iiop_access.log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ssとなります。 YYYY_MM_DD-hh_mm_ssは、ローテーションが実行された時刻です。
マニュアル記載箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Java EE運用ガイド」の「Java EEアプリケーションのログ」</li> <li>「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「configs.config.log-service の定義項目」、「configs.config.iiop-service の定義項目」内の「ORBの追加プロパティ」</li> </ul>
設定箇所	<p>ログファイルの出力先は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] または [server-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

### HTTPトレースログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	trace.log
デフォルトパス	<p><b>IJServerクラスタのHTTPトレースログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\nodeagents\ijna\&lt;サーバーインスタンス名&gt;\logs\http\</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/&lt;サーバーインスタンス名&gt;/logs/http/</p>

	<p><b>Java EE DASサービスのHTTPトレースログ</b></p> <p><b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\logs\http</p> <p><b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/logs/http/</p>
世代数	デフォルト:10、最大値:999
サイズ	デフォルト:10MB、最大値:2000MB
レコード長	可変
ローテーション条件	<p>ログサイズを超えた場合、古い情報はtrace.log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ssとなります。</p> <p>前回のローテーションから1秒以内にローテーションが実行された場合は、trace.log_YYYY_MM_DD-hh_mm_ss.通し番号となります。</p> <p>YYYY_MM_DD-hh_mm_ssは、ローテーションが実行された時刻です。</p>
マニュアル記載箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Java EE運用ガイド」の「Java EEアプリケーションのログ」</li> <li>「リファレンスマニュアル(コマンド編)」の「configs.config.log-service の定義項目」、「configs.config.http-serviceの定義項目」</li> </ul>
設定箇所	<p><b>IJServerクラスタのHTTPトレースログ</b></p> <p>ログの有効、ログサイズ、世代数は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [HTTPサービス] &gt; [ログ]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.http-serviceの定義項目の「トレースログ」、「トレースログのサイズ」、「トレースログの世代数」</li> </ul> <p>ログファイルの出力先は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [クラスタ名-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul> <p><b>Java EE DASサービスのHTTPトレースログ</b></p> <p>ログの有効、ログサイズ、世代数は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [server-config] &gt; [HTTPサービス] &gt; [ログ]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド configs.config.http-serviceの定義項目の「トレースログ」、「トレースログのサイズ」、「トレースログの世代数」</li> </ul> <p>ログファイルの出力先は、以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソール [設定] &gt; [server-config] &gt; [ロガーの設定]</li> <li>asadminコマンドのsetサブコマンド server-config.log-serviceの定義項目の「ログ出力ディレクトリ」</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象

備考	なし
----	----

EE SJE

## メッセージプローカのログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	log.txt
デフォルトパス	<p style="background-color: #339933; color: white; padding: 2px;">Windows32/64</p> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\imq\instances\<メッセージプローカ名>\log <p style="background-color: #FF8C00; color: white; padding: 2px;">Solaris32/64 Linux32/64</p> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/imq/instances/<メッセージプローカ名>/log
世代数	デフォルト:10、最大値:10(固定)
サイズ	デフォルト:256MB、最大値:上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	ログ機能に関するプロパティである"imq.log.file.rolloverbytes"または"imq.log.file.rolloversecs"のどちらかの条件に該当した場合にローテーションされます。 ローテーション後、log_1.txt～log_9.txtのファイルが作成されます。
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「JMSの運用方法」－「メッセージプローカのログ」
設定箇所	ローテーションするログサイズおよび有効期間は、以下のログ機能に関するプロパティを使用して設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ログサイズ imq.log.file.rolloverbytes</li> <li>・ 有効期間 imq.log.file.rolloversecs</li> </ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

EE SJE

## メッセージプローカのアクセスログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	accesslog.txt
デフォルトパス	<p style="background-color: #339933; color: white; padding: 2px;">Windows32/64</p> C:\Interstage\F3FMisjee\var\domains\interstage\imq\instances\<メッセージプローカ名>\log <p style="background-color: #FF8C00; color: white; padding: 2px;">Solaris32/64 Linux32/64</p> /var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/imq/instances/<メッセージプローカ名>/log
世代数	デフォルト:9、最大値:9(固定)
サイズ	デフォルト:256MB、最大値:上限なし
レコード長	可変
ローテーション条件	ログ機能に関するプロパティである"imq.log.access.rolloverbytes"または"imq.log.access.rolloversecs"のどちらかの条件に該当した場合にローテーションされます。

	ローテーション後、accesslog_1.txt～accesslog_9.txtのファイルが作成されます。
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「JMSの運用方法」-「メッセージプローカのアクセスログ」
設定箇所	ローテーションするログサイズおよび有効期間は、以下のログ機能に関するプロパティを使用して設定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>・ ログサイズ imq.log.access.rolloverbytes</li><li>・ 有効期間 imq.log.access.rolloversecs</li></ul>
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## Interstage JMXサービス

### Interstage JMXサービスのログインログ

デフォルト出力	あり
デフォルトファイル名	isjmxlogin.log
デフォルトパス	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\jmx\var\log\isjmxruntimelog\ <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVisjmx/log/isjmxruntimelog/
世代数	デフォルト:2、最大値:2
サイズ	デフォルト:1MB、最大値:100MB
レコード長	可変
ローテーション条件	指定ログサイズを超えた場合、古い情報はisjmxlogin.log.oldとなります。
マニュアル記載箇所	「セキュリティシステム運用ガイド」の「セキュリティ監査証跡機能」-「ログインログ」
設定箇所	ログサイズは以下の環境定義ファイルのloginlogタグのmax属性で設定します。 <b>Windows32/64</b> C:\Interstage\jmx\etc\isjmx.xml <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /etc/opt/FJSVisjmx/isjmx.xml
iscollectinfo時の採取対象であるか	採取対象
備考	なし

## 付録B ポート番号

Interstage Application Serverが使用するポート番号は、システム上のアプリケーションを含むすべてのサービスにおいてそれぞれ異なるポート番号を設定する必要があります。万が一、同じポート番号を設定してサービスを運用した場合、クライアントからのアクセスができないなど、正常に動作することができません。以下に示すポート番号がすでに使用されている場合は、別の番号に再設定してください。



### エフェメラルポートについて

Interstage Application Serverが使用するポートが、エフェメラルポートと競合する場合があります。

エフェメラルポートとは、オペレーティングシステムが通信を行うために、一時的に割り当てるポートです。オペレーティングシステムのデフォルトの設定では、以下の範囲のポート番号が自動的に割り当てられます。

	Windows32/64	Solaris32/64	Linux32/64
エフェメラルポートの範囲	<ul style="list-style-type: none"><li>Windows Server(R) 2003の場合: 1024～5000</li><li>Windows Server(R) 2008以降の場合: 49152～65535</li></ul>	32768～65535	32768～61000

エフェメラルポートの範囲でInterstage Application Serverのポート番号を設定している場合、以下のどちらかの対処を行ってください。

- エフェメラルポートの範囲を、Interstage Application Serverが使用するポート番号の範囲外に変更します。エフェメラルポートの範囲の変更方法については、オペレーティングシステムのエフェメラルポートに対する変更方法に従ってください。
- Interstage Application Serverが使用するポート番号を、エフェメラルポートの範囲外に設定します。

### Well Knownポート(0から1023)について

ポート番号を設定する場合は、Well Knownポート(0から1023)と競合しないように注意して設定してください。

Solaris32/64 Linux32/64

Java EEにおいて、サービス運用ユーザーにシステム管理者(root)以外を設定した場合、IJServerクラスタ/Interstage Java EE DASサービス/Interstage Java EE Node Agentサービスが使用するポート番号にWell Knownポート(0から1023)の範囲を設定できません。

設定した場合、ポートを使用できず、Interstage Java EE DASサービス/Interstage Java EE Node Agentサービスが正常に動作しません。

### IPv6アドレスにバインドされるポート番号について

IPv6アドレスにバインドされるポート番号の利用については、「チューニングガイド」の「IPv6環境での運用について」を参照してください。

Interstage Application Serverが使用するポート番号を以下に示します。

サービス名/機能名	用途	ポート番号/ プロトコル	WS	SJE	EE
CORBAサービス	CORBAサービスのポート番号	8002/tcp (任意に変更可能)	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	CORBAサービスのSSLのポート番号	4433/tcp (任意に変更可能)	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

サービス名/機能名	用途	ポート番号/ プロトコル	WS	SJE	EE
Interstage HTTP Server	Interstage HTTP Serverのポート番号	80/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	バーチャルホストのポート番号	1から65535までの未使用のポート番号/tcp	○	○	○
	プロキシ機能使用時に、転送先と通信する際に使用するポート番号	不定/tcp	○	○	○
	<b>Solaris32/64 Linux32/64</b> 通信プロセス縮退時に、内部で通信する際に使用するポート番号	不定/tcp	○	○	○
IJServer(J2EE)	Interstage JMXサービスからの情報取得の要求を受け付けるポート番号	不定/tcp	—	○	○
	Interstage JMXサービスの再起動時に、Interstage JMXサービスとの接続を復元する際に使用するポート番号	不定/tcp	—	○	○
	Java監視機能で使用するポート番号	任意/tcp	—	○	○
Interstage JMX サービス	Interstage JMXサービスのポート番号	12210/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Interstage JMXサービスがInterstage管理コンソールの要求を受け付けるポート番号	12200/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Interstage JMXサービスがInterstage管理コンソールの要求をSSL通信(HTTPS)で受け付けるポート番号	12220/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Interstage JMXサービスがInterstage管理コンソールの要求をRMI通信で受け付けるポート番号	12230/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
Interstage管理コンソール	Interstage管理コンソール用Interstage HTTP Serverのポート番号	12000/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Interstage管理コンソール用Servletサービスのポート番号	8909/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	<b>Solaris32/64 Linux32/64</b> Interstage管理コンソール用Interstage HTTP Serverの通信プロセス縮退時に、内部で通信する際に使用するポート番号	不定/tcp	○	○	○
Servletサービス	Servletサービスのポート番号	任意/tcp	○	○	○
Interstage シングル・サインオン	セッション管理サーバのポート番号	10555/tcp (任意に変更可能)	—	○	○
Interstageディレクトリサービス	リポジトリのポート番号	389/tcp (任意に変更可能)	—	○	○
	リポジトリのSSLのポート番号	636/tcp (任意に変更可能)	—	○	○
	リポジトリの標準データベース(Interstage data store)が使用するポート番号	9700/tcp (任意に変更可能)	—	○	○
	リポジトリの標準データベース(Interstage data store)のデータストアが使用するポート番号	6000～65535のうちのリポジトリ生成時に使用されていない番号/tcp (任意に変更可能)	—	○	○

サービス名/機能名	用途	ポート番号/ プロトコル	WS	SJE	EE
JDK/JRE	rmiregistryコマンドが使用するポート番号	1099/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	rmidコマンドが使用するポート番号	1098/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	tnameservコマンドが使用するポート番号	900/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	orbdコマンドが使用するポート番号	1049/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	jconsoleコマンドが使用するポート番号	任意/tcp	○	○	○
	jhatコマンドが使用するポート番号	7000/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	jstatdコマンドが使用するポート番号	1099/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Java API:  java.rmi.server.UnicastRemoteObject#exportObject(Remote obj) が使用するポート番号	不定/tcp	○	○	○
	Java API:  java.net.ServerSocket.ServerSocket(int port) が使用するポート番号	不定/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Java API:  java.rmi.server.RMISocketFactory#createServerSocket(int port) が使用するポート番号	不定/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Java API:  javax.rmi.ssl.SslRMIServerSocketFactory#createServerSocket(int port) が使用するポート番号	不定/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Java API:  java.net.DatagramSocket#bind(SocketAddress addr) が使用するポート番号	不定/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	Java API:  java.net.Socket#bind(SocketAddress bindpoint) が使用するポート番号	不定/tcp	○	○	○
JServerクラスタ	HTTPリスナーのポート番号	28090/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	IIOPリスナーのポート番号	23700/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	SSL通信用のIIOPリスナーのポート番号	23820/tcp (任意に変更可能)	○	○	○

サービス名/機能名	用途	ポート番号/ プロトコル	WS	SJE	EE
	SSL通信クライアント認証用のIIOPリスナーのポート番号	23920/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
	JMXコネクタが使用するRMIレジストリの接続ポート	28686/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
Interstage Java EE DASサービス	運用管理用HTTPリスナーのポート	12001/tcp(任意に変更可能)	○	○	○
	HTTPリスナーのポート番号	28080/tcp(任意に変更可能)	○	○	○
	IIOPリスナーのポート番号	23600/tcp(任意に変更可能)	○	○	○
	SSL通信用のIIOPリスナーのポート番号	23601/tcp(任意に変更可能)	○	○	○
	SSL通信クライアント認証用のIIOPリスナーのポート番号	23602/tcp(任意に変更可能)	○	○	○
	JMXコネクタが使用するRMIレジストリの接続ポート	8686/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
Interstage Java EE Node Agentサービス	JMXコネクタが使用するRMIレジストリの接続ポート	29696/tcp (任意に変更可能)	○	○	○
メッセージブローカ	メッセージブローカのポート番号	7676/tcp(任意に変更可能)	—	○	○
	admin接続サービスのポート番号	不定/tcp(任意に変更可能)	—	○	○
	jms接続サービスのポート番号	不定/tcp(任意に変更可能)	—	○	○

## 注意

- Interstage HTTP Server 2.2が使用するポート番号については、「Interstage HTTP Server 2.2 運用ガイド」の「各種情報」-「ポート番号」を参照してください。
- Java EE 6機能が使用するポート番号については、「Java EE運用ガイド(Java EE 6編)」の「ポート番号」を参照してください。

## EE SJE CORBAサービス

### CORBAサービスのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	8002/tcp
マニュアル記載箇所	「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [システム] &gt; [環境設定]タブ &gt; [CORBAサービス詳細設定]の [ポート番号]</li> <li>以下の動作環境ファイル(config)のIIOP_port  <div style="background-color: #339933; color: white; padding: 2px;">Windows32/64</div>            C:\Interstage\ODWIN\etc\config  <div style="background-color: #FFA500; color: black; padding: 2px;">Solaris32/64</div> </li> </ul>

	/etc/opt/FSUNod/config <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /etc/opt/FJSVod/config
備考	なし

#### CORBAサービスのSSLのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	4433/tcp
マニュアル記載箇所	「チューニングガイド」の「CORBAサービスの動作環境ファイル」の「config」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [システム] &gt; [環境設定]タブ &gt; [CORBAサービス詳細設定]の [SSLリスンポート番号]</li> <li>以下の動作環境ファイル(config)のUNO_IIOP_ssl_port <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\ODWIN\etc\config <span style="background-color: #ff8c00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> /etc/opt/FSUNod/config <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /etc/opt/FJSVod/config</li> </ul>
備考	なし

#### Interstage HTTP Server

##### Interstage HTTP Serverのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	80/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」の「環境設定」-「環境定義ファイル」-「ポート番号とIPアドレスの設定」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [サービス] &gt; [Webサーバー] &gt; [Webサーバ名] &gt; [環境設定]タブ &gt; [ポート番号]</li> <li>以下の環境定義ファイルのListenディレクティブ <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C: \ Interstage \ F3FMihs \ servers \ [Web サーバ名 ] \ conf \ httpd.conf <span style="background-color: #ff8c00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバ名]/conf/httpd.conf</li> </ul>
備考	Webサーバでは、一般的に以下のポート番号を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>HTTP(SSL未使用時):80</li> <li>HTTPS(SSL使用時):443</li> </ul>

##### Interstage HTTP Serverのバーチャルホストのポート番号

固定/不定	固定
-------	----

ポート番号/プロトコル	1から65535までの未使用のポート番号/tcp
マニュアル記載箇所	「Interstage HTTP Server 運用ガイド」の「環境設定」－「環境定義ファイル」－「バーチャルホストの設定」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [サービス] &gt; [Webサーバ名] &gt; [Webサーバ名] &gt; [バーチャルホスト] &gt; [新規作成] &gt; [IPアドレス]および[ポート番号]</li> <li>Interstage管理コンソールの [サービス] &gt; [Webサーバ] &gt; [Webサーバ名] &gt; [バーチャルホスト] &gt; [バーチャルホスト名] &gt; [環境設定] &gt; [IPアドレス]および[ポート番号]</li> <li>以下の環境定義ファイルのListenディレクティブ、NameVirtualHostディレクティブ、&lt;VirtualHost&gt;セクション <b>Windows32/64</b> C:\Interstage\F3FMihs\servers\[Webサーバ名]\conf\httpd.conf <b>Solaris32/64 Linux32/64</b> /var/opt/FJSVihs/servers/[Webサーバ名]/conf/httpd.conf</li> </ul>
備考	なし

#### Interstage HTTP Serverのプロキシ機能使用時に、転送先と通信する際に使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	なし
ポート番号の設定箇所	なし
備考	使用するポート番号は、プロキシ機能使用時にエフェメラルポートが自動的に割り振られます。

#### Interstage HTTP Serverの通信プロセス縮退時に、内部で通信する際に使用するポート番号 **Solaris32/64**

**Linux32/64**

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	なし
ポート番号の設定箇所	なし
備考	使用するポート番号は、通信プロセス縮退時にエフェメラルポートが自動的に割り振られます。

**EE SJE IJServer(J2EE)**

#### Interstage JMXサービスからの情報取得の要求を受け付けるポート番号

固定/不定	不定
-------	----

ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	なし
ポート番号の設定箇所	なし
備考	使用するポート番号は、IJServer起動時にエフェメラルポートが自動的に割り振られます。

#### Interstage JMXサービスの再起動時に、Interstage JMXサービスとの接続を復元する際に使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	なし
ポート番号の設定箇所	なし
備考	使用するポート番号は、IJServer起動時にエフェメラルポートが自動的に割り振られます。

#### Java監視機能で使用するポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	任意/tcp
マニュアル記載箇所	「トラブルシューティング集」の「IJServer(J2EE)を使用する場合」
ポート番号の設定箇所	IJServerのJavaVMオプションに設定します。
備考	IJServerでJava監視機能を使用する場合にのみ、このポートが使用されます。

### Interstage JMXサービス

#### Interstage JMXサービスのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	12210/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「運用ガイド(基本編)」の「Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ」の「Interstage JMXサービスのカスタマイズ」
ポート番号の設定箇所	以下の環境定義ファイルの「port」タグのinternal属性 <span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\jmx\etc\isjmx.xml <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /etc/opt/FJSVisjmx/isjmx.xml
備考	なし

#### Interstage JMXサービスがInterstage管理コンソールの要求を受け付けるポート番号

固定/不定	固定
-------	----

ポート番号/プロトコル	12200/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「運用ガイド(基本編)」の「Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ」の「Interstage JMXサービスのカスタマイズ」
ポート番号の設定箇所	以下の環境定義ファイルの「port」タグのrmi属性 <span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\jmx\etc\isjmx.xml <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /etc/opt/FJSVisjmx/isjmx.xml
備考	なし

#### Interstage JMXサービスがInterstage管理コンソールの要求をSSL通信(HTTPS)で受け付けるポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	12220/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「運用ガイド(基本編)」の「Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ」の「Interstage JMXサービスのカスタマイズ」
ポート番号の設定箇所	以下の環境定義ファイルの「port」タグのhttps属性 <span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\jmx\etc\isjmx.xml <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /etc/opt/FJSVisjmx/isjmx.xml
備考	なし

#### Interstage JMXサービスがInterstage管理コンソールの要求をRMI通信で受け付けるポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	12230/tcp(任意に変更可能) 指定を省略した場合には、未使用のポートが自動的に使用されます。
マニュアル記載箇所	「運用ガイド(基本編)」の「Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ」の「Interstage JMXサービスのカスタマイズ」
ポート番号の設定箇所	以下の環境定義ファイルの「port」タグのrmiinvoke属性 <span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\jmx\etc\isjmx.xml <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64 Linux32/64</span> /etc/opt/FJSVisjmx/isjmx.xml
備考	なし

### Interstage管理コンソール

#### Interstage管理コンソール用Interstage HTTP Serverのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	12000/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「運用ガイド(基本編)」の「Interstage管理コンソールの構成」－「Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ」
ポート番号の設定箇所	以下の環境定義ファイルのListenディレクティブ <span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\gui\etc\httpd.conf

	Solaris32/64 Linux32/64 /etc/opt/FJSVisgui/httpd.conf
備考	なし

#### Interstage管理コンソール用Servletサービスのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	8909/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「運用ガイド(基本編)」の「Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ」の「Interstage管理コンソール用Servletサービスのポート番号の変更」
ポート番号の設定箇所	<p style="background-color: #e0f2e0; padding: 2px;"><b>Windows32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>%IS_HOME% ¥ F3FMjs2su ¥ conf ¥ jswatch.conf の [containername].port 定義</li> <li>%IS_HOME% ¥ F3FMjs2su ¥ conf ¥ jsgw_apapi.conf の ApJServDefaultPort 定義</li> <li>%IS_HOME%¥F3FMjs2su¥conf¥jscontainer.xml の Parameter タグ</li> </ul> <p style="background-color: #e0f2e0; padding: 2px;"><b>Solaris32/64 Linux32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>/etc/opt/FJSVjs2su/jswatch.conf の [containername].port 定義</li> <li>/etc/opt/FJSVjs2su/jsgw_apapi.conf の ApJServDefaultPort 定義</li> <li>/etc/opt/FJSVjs2su/jscontainer.xml の Parameter タグ</li> </ul>
備考	なし

#### Interstage管理コンソール用Interstage HTTP Serverの通信プロセス縮退時に、内部で通信する際に使用するポート番号

**Solaris32/64 Linux32/64**

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	なし
ポート番号の設定箇所	なし
備考	使用するポート番号は、通信プロセス縮退時にエフェメラルポートが自動的に割り振られます。

### Servletサービス

#### Servletサービスのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	任意/tcp
マニュアル記載箇所	「使用上の注意」の「各サービスで使用するポート番号の設定について」
ポート番号の設定箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li>Servletコンテナ側の設定 以下のいずれか</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>— Interstage管理コンソールの [ワークユニット] &gt; [新規作成]タブ &gt; [Servletコンテナ設定] &gt; [ポート番号]</li> <li>— Interstage管理コンソールの [ワークユニット] &gt; 「ワークユニット名」 &gt; [環境設定]タブ &gt; [詳 細設定] &gt; [Servletコンテナ設定] &gt; [ポート番号]</li> </ul> <p>• Webサーバコネクタ 以下のいずれか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>— Interstage管理コンソールの [Webサーバ] &gt; 「Webサーバ名」 &gt; [Webサーバコネクタ] &gt; [新規作成]タブ &gt; [ServletコンテナのIPアドレス:ポート番号]</li> <li>— Interstage管理コンソールの [Webサーバ] &gt; 「Webサーバ名」 &gt; [Webサーバコネクタ] &gt; 「ワークユニット名」 &gt; [ServletコンテナのIPアドレス:ポート番 号]</li> </ul>
	 <b>注意</b> <p>上記のWebサーバコネクタの設定は、WebサーバコネクタとServletコンテナが別システム([システム] &gt; [環境設定]タブ &gt; [Servletサービスの詳細設定] &gt; [Webサーバとワークユニットを同一のマシンで運用する]で[運用しない]を選択)の場合のみ有効です。</p>
備考	なし

## EE SJE | Interstage シングル・サインオン

### セッション管理サーバのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	10555/tcp (任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Interstage管理コンソール ヘルプ」
ポート番号の設定箇所	Interstage管理コンソールの [システム] > [セキュリティ] > [シングル・サインオン] > [認証基盤] > [リポジトリサーバ] > [環境設定]タブ > [セッション管理詳細設定[表示]] > [通信の設定] > [ポート番号]
備考	なし

## EE SJE | Interstageディレクトリサービス

### リポジトリのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	389/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「ディレクトリサービス運用ガイド」の「リポジトリの作成」
ポート番号の設定箇所	以下のいずれか。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [システム] &gt; [サービス] &gt; [リポジトリ] &gt; [新規作成]タブの[通常(非SSL)ポート番号]</li> <li>irepconfigコマンドの「createサブコマンド」および「modifyサブコマンド」のリポジトリ環境定義ファイルで指定する「nonssl_port(通常(非SSL)ポート番号)」</li> </ul>
備考	なし

#### リポジトリのSSLのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	636/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「ディレクトリサービス運用ガイド」の「リポジトリの作成」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage管理コンソールの [システム] &gt; [サービス] &gt; [リポジトリ] &gt; [新規作成]タブの[SSLポート番号]</li> <li>irepconfigコマンドの「createサブコマンド」および「modifyサブコマンド」のリポジトリ環境定義ファイルで指定する「ssl_port(SSLポート番号)」</li> </ul>
備考	なし

#### リポジトリの標準データベース(Interstage data store)が使用するポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	9700/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	<p><b>Windows32/64</b> 「インストールガイド」の「Interstage data store」</p> <p><b>Solaris32/64</b> 「インストールガイド」の「その他」「注意事項」-「Interstage data storeを使用する場合の注意事項」</p> <p><b>Linux32/64</b> 「インストールガイド」の「Interstage data store」</p>
ポート番号の設定箇所	<p><b>Windows32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>確認方法 以下のファイルの、「OMS_SERVICE」に定義されている値 %IS_HOME%\Enabler\server\param\enabler.conf</li> <li>設定方法 %IS_HOME%\Enabler\server\bin\omschangeport.exe -u "新しいポート番号"</li> </ul> <p><b>Solaris32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>確認方法 以下のファイルの、「OMS_SERVICE」に定義されている値 /opt/FJSVena/server/param/enabler.conf</li> <li>設定方法 /opt/FJSVena/server/bin/omschangeport -u "新しいポート番号"</li> </ul>

	<p><b>Linux32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>確認方法 以下のファイルの、「OMS_SERVICE」に定義されている値 <code>/opt/FJSVena/Enabler/server/param/enabler.conf</code></li> <li>設定方法 <code>/opt/FJSVena/Enabler/server/bin/omschangeport -u "新しいポート番号"</code> 詳細は、「マニュアル記載箇所」のマニュアルを参照してください。</li> </ul>
備考	なし

#### リポジトリの標準データベース(Interstage data store)のデータストアが使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	6000～65535のうちのリポジトリ生成時に使用されていない番号/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	<p><b>Windows32/64</b> 「インストールガイド」の「Interstage data store」</p> <p><b>Solaris32/64</b> 「インストールガイド」の「その他」-「注意事項」-「Interstage data storeを使用する場合の注意事項」</p> <p><b>Linux32/64</b> 「インストールガイド」の「Interstage data store」</p>
ポート番号の設定箇所	<p><b>Windows32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>確認方法 <code>%IS_HOME%\Enabler\server\bin\omslist.exe -l</code>で出力される「port」の値</li> <li>設定方法 <code>%IS_HOME%\Enabler\server\bin\omschangeport.exe "リポジトリ名" -pn "新しいポート番号"</code></li> </ul> <p><b>Solaris32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>確認方法 <code>/opt/FJSVena/server/bin/omslist -l</code>で出力される「port」の値</li> <li>設定方法 <code>/opt/FJSVena/server/bin/omschangeport "リポジトリ名" -pn "新しいポート番号"</code></li> </ul> <p><b>Linux32/64</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>確認方法 <code>/opt/FJSVena/Enabler/server/bin/omslist -l</code>で出力される「port」の値</li> <li>設定方法 <code>/opt/FJSVena/Enabler/server/bin/omschangeport "リポジトリ名" -pn "新しいポート番号"</code></li> </ul> <p>詳細は、「マニュアル記載箇所」のマニュアルを参照してください。</p>
備考	なし

#### JDK/JRE

以下、各ポートの詳細説明の表中に「表内の記述」欄の記述があった場合、次の読み替えを行ってください。

表内の記述	読み替え	
	JDK/JRE 6の場合	JDK/JRE 7の場合
JDKドキュメント	JDK(TM)6ドキュメント	Java Platform Standard Edition 7 Documentation
API仕様	Java(TM) Platform, Standard Edition 6 API仕様	Java(TM) Platform, Standard Edition 7 API Specification

#### rmiregistryコマンドが使用するポート番号

固定/不定	省略時固定
ポート番号/プロトコル	1099/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「JDKツールとユーティリティ」の「rmiregistry」
ポート番号の設定箇所	引数 port で設定
備考	なし

#### rmidコマンドが使用するポート番号

固定/不定	省略時固定
ポート番号/プロトコル	1098/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「JDKツールとユーティリティ」の「rmid」
ポート番号の設定箇所	オプション -port で設定
備考	なし

#### tnameservコマンドが使用するポート番号

固定/不定	省略時固定
ポート番号/プロトコル	900/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「JDKツールとユーティリティ」の「tnameserv」
ポート番号の設定箇所	オプション -ORBInitialPort で設定
備考	なし

#### orbdコマンドが使用するポート番号

固定/不定	省略時固定
ポート番号/プロトコル	1049/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「JDKツールとユーティリティ」の「orbd」
ポート番号の設定箇所	オプション -port で設定
備考	なし

#### jconsoleコマンドが使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「JDKツールとユーティリティ」の「jconsole」
ポート番号の設定箇所	なし
備考	なし

#### jhatコマンドが使用するポート番号

固定/不定	省略時固定
ポート番号/プロトコル	7000/tcp
マニュアル記載箇所	「JDK(TM) 6 ドキュメント」の「JDKツールとユーティリティ」の「jhat」
ポート番号の設定箇所	オプション -port で設定
備考	なし

#### jstatdコマンドが使用するポート番号

固定/不定	省略時固定
ポート番号/プロトコル	1099/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「JDKツールとユーティリティ」の「jstatd」
ポート番号の設定箇所	オプション -p で設定
備考	デフォルトポートまたは-pオプションで指定されたポート上にRMIレジストリが見つからない場合、-pオプションで指定されたポート、または-pオプションが省略されている場合は、デフォルトポートで、RMIレジストリが作成されます。

#### Java API: java.rmi.server.UnicastRemoteObject#exportObject(Remote obj)が使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「API仕様」の「java.rmi.server.UnicastRemoteObject」
ポート番号の設定箇所	なし
備考	なし

#### Java API: java.net.ServerSocket.ServerSocket(int port)が使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp

マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「API仕様」の「java.net.ServerSocket」
ポート番号の設定箇所	引数 port で設定
備考	なし

#### Java API: `java.rmi.server.RMISocketFactory#createServerSocket(int port)`が使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「API仕様」の「java.rmi.server.RMISocketFactory」
ポート番号の設定箇所	引数 port で設定
備考	なし

#### Java API: `javax.rmi.ssl.SslRMIServerSocketFactory#createServerSocket(int port)`が使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「API仕様」の「javax.rmi.ssl.SslRMIServerSocketFactory」
ポート番号の設定箇所	引数 port で設定
備考	なし

#### Java API: `java.net.DatagramSocket#bind(SocketAddress addr)`が使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「API仕様」の「java.net.DatagramSocket」
ポート番号の設定箇所	引数 addr で設定
備考	なし

#### Java API: `java.net.Socket#bind(SocketAddress bindpoint)`が使用するポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp
マニュアル記載箇所	「JDKドキュメント」の「API仕様」の「java.net.Socket」
ポート番号の設定箇所	なし
備考	なし

## IJServerクラスタ

### HTTPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	28090/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「定義時に利用できるプロパティ」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• Interstage Java EE管理コンソール Interstage Java EE管理コンソールで設定するインスタンス定義項目のプロパティ"HTTP_LISTENER_PORT"</li><li>• asadmin setサブコマンドで以下のシステムプロパティの値を変更します。 HTTP_LISTENER_PORT</li></ul>
備考	ポート番号はシステムプロパティとして定義されており、IJServerクラスタ作成時またはサーバーインスタンス追加時に自動採番されます。

### IIOPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	23700/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「定義時に利用できるプロパティ」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• Interstage Java EE管理コンソール Interstage Java EE管理コンソールで設定するインスタンス定義項目のプロパティ"IIOP_LISTENER_PORT"</li><li>• asadmin setサブコマンドで以下のシステムプロパティの値を変更します。 IIOP_LISTENER_PORT</li></ul>
備考	ポート番号はシステムプロパティとして定義されており、IJServerクラスタ作成時またはサーバーインスタンス追加時に自動採番されます。

### SSL通信用のIIOPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	23820/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「定義時に利用できるプロパティ」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• Interstage Java EE管理コンソール Interstage Java EE管理コンソールで設定するインスタンス定義項目のプロパティ"IIOP_SSL_LISTENER_PORT"</li><li>• asadmin setサブコマンドで以下のシステムプロパティの値を変更します。 IIOP_SSL_LISTENER_PORT</li></ul>

備考	ポート番号はシステムプロパティとして定義されており、IJServerクラスタ作成時またはサーバーインスタンス追加時に自動採番されます。
----	---

#### SSL通信クライアント認証用のIIOPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	23920/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「定義時に利用できるプロパティ」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Interstage Java EE管理コンソール Interstage Java EE管理コンソールで設定するインスタンス定義項目のプロパティ"IIOP_SSL_MUTUALAUTH_PORT"</li> <li>• asadmin setサブコマンドで以下のシステムプロパティの値を変更します。 IIOP_SSL_MUTUALAUTH_PORT</li> </ul>
備考	ポート番号はシステムプロパティとして定義されており、IJServerクラスタ作成時またはサーバーインスタンス追加時に自動採番されます。

#### JMXコネクタが使用するRMILエジストリの接続ポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	28686/tcp (任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「定義時に利用できるプロパティ」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Interstage Java EE管理コンソール Interstage Java EE管理コンソールで設定するインスタンス定義項目のプロパティ"JMX_SYSTEM_CONNECTOR_PORT "</li> <li>• asadmin setサブコマンドで以下のシステムプロパティの値を変更します。 JMX_SYSTEM_CONNECTOR_PORT</li> </ul>
備考	ポート番号はシステムプロパティとして定義されており、IJServerクラスタ作成時またはサーバーインスタンス追加時に自動採番されます。

#### Interstage Java EE DASサービス

##### 運用管理用HTTPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	12001/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「HTTPサービスの定義項目」 「チューニングガイド」の「Interstage Java EE DASサービスのチューニング」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Interstage Java EE管理コンソール 設定&gt;server-config&gt;HTTPサービス&gt;HTTPリスナー&gt;admin-listener&gt;リスナーポート</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>asadmin setサブコマンドで以下の定義項目を更新します。 server-config.http-service.http-listener.admin-listener.port</li> </ul>
備考	ポート番号は、デフォルト値を記載しています。ポート番号の値はインストール時にも指定できます。

#### HTTPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	28080/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「HTTPサービスの定義項目」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage Java EE管理コンソール 設定&gt;server-config&gt;HTTP サービス&gt; HTTP リスナー&gt; default&gt; リスナーポート</li> <li>asadmin setサブコマンドで以下の定義項目を更新します。 server-config.http-service.http-listener.default.port</li> </ul>
備考	ポート番号は、デフォルト値を記載しています。ポート番号の値はインストール時にも指定できます。

#### IIOPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	23600/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「IIOPサービスの定義項目」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage Java EE管理コンソール 設定&gt;server-config&gt;ORB&gt; IIOP リスナー&gt; orb-listener-1&gt;リスナーポート</li> <li>asadmin setサブコマンドで以下の定義項目を更新します。 server-config.iiop-service.iiop-listener.orb-listener-1.port</li> </ul>
備考	ポート番号は、デフォルト値を記載しています。ポート番号の値はインストール時にも指定できます。

#### SSL通信用のIIOPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	23601/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「IIOPサービスの定義項目」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interstage Java EE管理コンソール 設定&gt;server-config&gt;ORB&gt; IIOP リスナー&gt; SSL&gt;リスナーポート</li> <li>asadmin setサブコマンドで以下の定義項目を更新します。 server-config.iiop-service.iiop-listener.SSL.port</li> </ul>

備考	ポート番号は、デフォルト値を記載しています。ポート番号の値はインストール時にも指定できます。
----	--

#### SSL通信クライアント認証用のIIOPリスナーのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	23602/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「IIOPサービスの定義項目」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Interstage Java EE管理コンソール 設定 &gt; server-config&gt;ORB&gt; IIOP リスナー &gt; SSL_MUTUALAUTH&gt;リスナーポート</li> <li>• asadmin setサブコマンドで以下の定義項目を更新します。 server-config.iiop-service.iiop-listener.SSL_MUTUALAUTH.port</li> </ul>
備考	ポート番号は、デフォルト値を記載しています。ポート番号の値はインストール時にも指定できます。

#### JMXコネクタが使用するRMIレジストリの接続ポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	8686/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「管理サービスの定義項目」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Interstage Java EE管理コンソール 設定&gt; server-config&gt; 管理サービス&gt; system</li> <li>• asadmin setサブコマンドで以下の定義項目を更新します。 server-config.admin-service.jmx-connector.system.port</li> </ul>
備考	ポート番号は、デフォルト値を記載しています。ポート番号の値はインストール時にも指定できます。

#### Interstage Java EE Node Agentサービス

##### JMXコネクタが使用するRMIレジストリの接続ポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	29696/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「Interstage Java EE Node Agentサービスの定義項目」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Interstage Java EE管理コンソール ノードエージェント&gt; ijnaのJMXタブ</li> <li>• asadmin setサブコマンドで以下の定義項目を更新します。 node-agent.ijna.jmx-connector.port</li> </ul>
備考	ポート番号は、デフォルト値を記載しています。

## メッセージプローカのポート番号

固定/不定	固定
ポート番号/プロトコル	7676/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「メッセージプローカの運用」
ポート番号の設定箇所	<p>以下のいずれかで設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>コマンドによる起動の場合 imqbrokerdコマンド実行時に、-portオプションに指定します。</li> <li>サービス化による起動の場合  <span style="background-color: #e0f2e0; padding: 2px;">Windows32/64</span>            imqsvcadmin installサブコマンド実行時に、-argsオプションのパラメタの-portオプションに指定します。  <span style="background-color: #ffccbc; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #ffccbc; padding: 2px;">Linux32/64</span>            rcスクリプトの以下の定義項目を変更します。  <b>BROKER_PORT</b> </li> </ul>
備考	なし

## admin接続サービスのポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「ポートマッパー」
ポート番号の設定箇所	<p>以下の接続サービスに関するプロパティを変更します。</p> <b>imq.admin.tcp.port</b>
備考	ポート番号を設定しない場合は、メッセージプローカの起動時にエフェメラルポートが自動的に割り振られます。

## jms接続サービスのポート番号

固定/不定	不定
ポート番号/プロトコル	不定/tcp(任意に変更可能)
マニュアル記載箇所	「Java EE運用ガイド」の「ポートマッパー」
ポート番号の設定箇所	<p>以下の接続サービスに関するプロパティを変更します。</p> <b>imq.jms.tcp.port</b>
備考	ポート番号を設定しない場合は、メッセージプローカの起動時にエフェメラルポートが自動的に割り振られます。

## 付録C プロセス情報

Interstage Application Serverで監視が必要な常駐プロセスについて記載します。



### 注意

#### プロセス名について

Windows32/64

“C:\Interstage”は、Interstage Application Serverのインストールパスです。  
実際のインストール環境にあわせて読み替えてください。

Solaris32/64 Linux32/64

“ps -ef”コマンドの出力結果です。

#### 常駐プロセス一覧

Windows32/64

機能名	項目番号	プロセス名	WS	SJE	EE
Interstage data store プロジェクト	01	C:\Interstage\Enabler\server\bin\omsd.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	02	C:\Interstage\Enabler\server\bin\omsservd.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
イベントサー ビス	03	C:\Interstage\bin\esdmnmain.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	04	C:\Interstage\bin\eslogdaemon.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
アプリケー ション実行機 能	05	C:\Interstage\bin\extp_is.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	06	C:\Interstage\bin\extp_momo.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	07	C:\Interstage\bin\extp_momo_func.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Webサーバ (Interstage HTTP Server)	08	C:\Interstage\F3FMihs\bin\Apache.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Interstage管 理コンソー ル	09	C:\Interstage\F3FMihs\bin\Apache.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	10	C:\Interstage\gui\bin\isgui_com_service.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Interstage ディレクトリ サービス	11	C:\Interstage\IREP\sbin\ireplog.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	12	C:\Interstage\IREP\sbin\irepmanage.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	13	C:\Interstage\IREP\sbin\irepslapd.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	14	C:\Interstage\IREP\sbin\irepslurpd.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Java EE	15	C:\Interstage\JDK6\bin\java.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	16	C:\Interstage\JDK6\bin\javaw.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	17	C:\Interstage\F3FMisjee\imq\bin\imqbrokersvc.exe	—	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Interstage JMXサービ ス	18	なし	—	—	—
	19	C:\Interstage\bin\isjmxwrdp.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	20	インストール時のJDK/JREの選択により異なります。 JDKの場合 C:\Interstage\JDK6\bin\java.exe JREの場合 C:\Interstage\JRE6\bin\java.exe	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

機能名	項目番号	プロセス名	WS	SJE	EE
Interstage管理コンソール用Servletサービス	21	インストール時のJDK/JREの選択により異なります。 JDKの場合 C:\Interstage\JDK6\bin\java.exe JREの場合 C:\Interstage\JRE6\bin\java.exe	○	○	○
	22	C:\Interstage\F3FMjs2su\bin\jswatch2.exe	○	○	○
MessageQueueDirector	23	C:\Interstage\MessageQueueDirector\bin\mqdopctl.exe	—	—	○
MQ連携サービス	24	<b>Windows32</b> %MQDBRIDGE_BIN%\mqdbserv.exe	—	—	○
	25	<b>Windows32</b> %MQDBRIDGE_BIN%\mqdbsvc.exe	—	—	○
CORBAサービス	26	%windir%\system32\Naming.exe	—	○	○
	27	%windir%\system32\InterfaceRep_e.exe	—	○	○
	28	%windir%\system32\InterfaceRep_Cache_s.exe	—	○	○
	29	C:\Interstage\odwin\bin\InterfaceRep_s.exe	—	○	○
	30	%windir%\system32\odstart.exe	○	○	○
	31	C:\Interstage\odwin\bin\odprocwatch.exe	○	○	○
データベース連携サービス	32	C:\Interstage\ots\bin\TranFactory.exe	—	○	○
	33	C:\Interstage\ots\bin\logdaemon.exe	—	○	○
	34	C:\Interstage\ots\bin\otsmnger.exe	—	○	○
	35	C:\Interstage\ots\bin\otsrecovery.exe	—	○	○
	36	otsstartrscコマンドの-pgオプションに指定したパス パス、プロセス名ともユーザ指定です。	—	○	○
	37	configファイルのPATHに指定したjavaのパス パス、プロセス名ともユーザ指定です。	—	○	○
Interstage シングル・ไซンオン	38	C:\Interstage\bin\ssologd.exe	—	○	○
	39	C:\Interstage\F3FMssso\ssootcsv\bin\ssossmgr.exe	—	○	○
故障監視	40	C:\Interstage\bin\f3fmsvmond.exe	—	○	○
	41	C:\Interstage\bin\f3fmsvmonobservd.exe	—	○	○
コンポーネントランザクションサービス	42	C:\Interstage\td\bin\ispzstart.exe	—	○	○
	43	なし	—	—	—
	44	なし	—	—	—
	45	なし	—	—	—
	46	C:\Interstage\bin\istageapid.exe	—	○	○
	47	<b>Windows32</b> C:\Interstage\td\bin\florb.exe	—	—	○
	48	C:\Interstage\td\bin\manage.exe	○	○	○
	49	C:\Interstage\td\bin\odmanage.exe	○	○	○
	50	<b>Windows32</b> C:\Interstage\td\bin\orbd.exe	—	—	○
	51	C:\Interstage\td\bin\watch.exe	○	○	○
Interstage管理コマンド	52	C:\Interstage\bin\ismanage.exe	○	○	○

機能名	項目番号	プロセス名	WS	SJE	EE
(Interstage 統合コマン ド)	53	C:\Interstage\bin\jswatch.exe	—	○	○

**Solaris32/64**

機能名	項目番号	パッケージ名	プロセス名	WS	SJE	EE
Interstage data storeリ ポジトリ	01	FJSVena	/opt/FJSVena/server/bin/omsd	—	○	○
	02	FJSVena	/opt/FJSVena/server/bin/omsservd	—	○	○
イベントサー ビス	03	FJSVes	/opt/FJSVes/bin/esdmnmain	—	○	○
	04	FJSVes	/opt/FJSVes/bin/eslogdaemon	—	○	○
アプリケー ション実行機 能	05	FSUNextp	/opt/FSUNextp/bin/extp_is	○	○	○
	06	FSUNextp	/opt/FSUNextp/bin/extp_momo	○	○	○
	07	FSUNextp	/opt/FSUNextp/bin/extp_momo_func	○	○	○
Webサーバ (Interstage HTTP Server)	08	FJSVihs	/opt/FJSVihs/bin/httpd	○	○	○
Interstage管 理コンソー ル	09	FJSVihs	/opt/FJSVihs/bin/httpd	○	○	○
	10	なし	なし	—	—	—
Interstage ディレクトリ サービス	11	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/ireplog	—	○	○
	12	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/irepmanage	—	○	○
	13	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/irepslapd	—	○	○
	14	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/irepslurpd	—	○	○
Java EE	15	FJSVisjee	/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java - Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/ FJSVisjee/doma	○	○	○
	16	FJSVisjee	/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java - Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/ FJSVisjee/node	○	○	○
	17	FJSVisjee	/opt/FJSVisjee/imq/bin/imqbrokerd	—	○	○
Interstage JMXサービ ス	18	FJSVisjmx	/opt/FJSVisjmx/lib/isjmxmanage	○	○	○
	19	FJSVisjmx	/opt/FJSVisjmx/lib/isjmxwrrpd	○	○	○
	20	FJSVisjmx	インストール時のJDK/JREの選択により異なります。  JDKの場合 /opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java JREの場合 /opt/FJSVawjbk/jre6/bin/java	○	○	○
Interstage管 理コンソー ル用Servlet サービス	21	FJSVjs2su	インストール時のJDK/JREの選択により異なります。  JDKの場合 /opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java JREの場合 /opt/FJSVawjbk/jre6/bin/java	○	○	○
	22	FJSVjs2su	jswatch2	○	○	○

機能名	項目番号	パッケージ名	プロセス名	WS	SJE	EE
MessageQueueDirector	23	FJSVmqd	<b>Solaris32</b> /opt/FJSVmqd/bin//mqdopctl	—	—	○
MQ連携サービス	24	FJSVmqdb	<b>Solaris32</b> /opt/FJSVmqdb/bin/mqdbserv	—	—	○
	25	FJSVmqdb	<b>Solaris32</b> /opt/FJSVmqdb/bin/mqdbsvcstart	—	—	○
CORBAサービス	26	FSUNod	/opt/FSUNod/bin/CosNaming_s	—	○	○
	27	FSUNod	/opt/FSUNod/bin/InterfaceRep_Cache_e	—	○	○
	28	FSUNod	/opt/FSUNod/bin/InterfaceRep_Cache_s_Obf	—	○	○
	29	FSUNod	/opt/FSUNod/bin/InterfaceRep_s_Obf	—	○	○
	30	FSUNod	/opt/FSUNod/bin/OD_start	○	○	○
	31	FSUNod	/opt/FSUNod/bin/odprocwatch	○	○	○
データベース連携サービス	32	FSUNots	<b>Solaris32</b> /opt/FSUNots/bin/TranFactory	—	○	○
	33	FSUNots	<b>Solaris32</b> /opt/FSUNots/bin/logdaemon	—	○	○
	34	FSUNots	<b>Solaris32</b> /opt/FSUNots/bin/otsmnger	—	○	○
	35	FSUNots	<b>Solaris32</b> /opt/FSUNots/bin/otsrecovery	—	○	○
	36	FSUNots	<b>Solaris32</b> otsstartscコマンドの-pgオプションに指定した パス パス、プロセス名ともユーザ指定です。	—	○	○
	37	FSUNots	<b>Solaris32</b> configファイルのPATHに指定したjavaのパス パス、プロセス名ともユーザ指定です。	—	○	○
Interstage シングル・ไซンオン	38	FJSVssocm	/opt/FJSVssocm/bin/ssologd	—	○	○
	39	FJSVssosv	/opt/FJSVssosv/bin/ssossmgr	—	○	○
故障監視	40	FJSVsvmon	/opt/FJSVsvmon/lib/f3fmsvmmond	—	○	○
	41	FJSVsvmon	/opt/FJSVsvmon/lib/f3fmsvmmonobservd	—	○	○
コンポーネントランザクションサービス	42	FSUNtd	/opt/FSUNtd/isp/bin/ispzstart	—	○	○
	43	FSUNtd	/opt/FSUNtd/isp/lib/ispsubad	—	○	○
	44	FSUNtd	/opt/FSUNtd/isp/lib/ispsubad7	—	○	○
	45	FSUNtd	/opt/FSUNtd/isp/lib/ispsubad8	—	○	○
	46	FSUNtd	/opt/FSUNtd/lib/istageapid	—	○	○
	47	FSUNtd	<b>Solaris32</b> /opt/FSUNtd/lib/lorb	—	—	○
	48	FSUNtd	/opt/FSUNtd/lib/manage	○	○	○
	49	FSUNtd	/opt/FSUNtd/lib/odmanage	○	○	○

機能名	項目番号	パッケージ名	プロセス名	WS	SJE	EE
	50	FSUNtd	Solaris32 /opt/FSUNtd/lib/orbd	—	—	○
	51	FSUNtd	/opt/FSUNtd/lib/watch	○	○	○
Interstage管理コマンド (Interstage統合コマンド)	52	FJSVtdis	/opt/FSUNtd/lib/ismanage	○	○	○
	53	FJSVtdis	/opt/FSUNtd/lib/iswatch	—	○	○

[Linux32/64]

機能名	項目番号	パッケージ名	プロセス名	WS	SJE	EE
Interstage data store ポジトリ	01	FJSVena	/opt/FJSVena/Enabler/server/bin/omsd	—	○	○
	02	FJSVena	/opt/FJSVena/Enabler/server/bin/omsservd	—	○	○
イベントサービス	03	FJSVes	/opt/FJSVes/bin/esdmnmain	—	○	○
	04	FJSVes	/opt/FJSVes/bin/eslogdaemon	—	○	○
アプリケーション実行機能	05	FJSVextp	/opt/FJSVextp/bin/extp_is	○	○	○
	06	FJSVextp	/opt/FJSVextp/bin/extp_momo	○	○	○
	07	FJSVextp	/opt/FJSVextp/bin/extp_momo_func	○	○	○
Webサーバ (Interstage HTTP Server)	08	FJSVihs	/opt/FJSVihs/bin/httpd	○	○	○
Interstage 管理コンソール	09	FJSVihs	/opt/FJSVihs/bin/httpd	○	○	○
	10	なし	なし	—	—	—
Interstage ディレクトリサービス	11	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/ireplog	—	○	○
	12	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/irepmanange	—	○	○
	13	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/irepslapd	—	○	○
	14	FJSVirep	/opt/FJSVirep/sbin/irepslurpd	—	○	○
Java EE	15	FJSVisjee	/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java -Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/FJSVisjee/domains/interstage ~以下略~	○	○	○
	16	FJSVisjee	/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java -Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/agent ~以下略~	○	○	○
	17	FJSVisjee	/opt/FJSVisjee/imq/bin/imqbrokerd	—	○	○
Interstage JMXサービス	18	FJSVisjmx	/opt/FJSVisjmx/lib/isjmxmanage	○	○	○
	19	FJSVisjmx	/opt/FJSVisjmx/lib/isjmxwprd	○	○	○
	20	FJSVisjmx	インストール時のJDK/JREの選択により異なります。 JDKの場合 /opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java JREの場合 /opt/FJSVawjbk/jre6/bin/java	○	○	○

機能名	項目番号	パッケージ名	プロセス名	WS	SJE	EE
Interstage管理コンソール用Servletサービス	21	FJSVjs2su	インストール時のJDK/JREの選択により異なります。 JDKの場合 /opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java JREの場合 /opt/FJSVawjbk/jre6/bin/java	○	○	○
	22	FJSVjs2su	jswatch2	○	○	○
MessageQueueDirector	23	FJSVmqd	/opt/FJSVmqd/bin//mqdopctl	—	—	○
MQ連携サービス	24	なし	なし	—	—	—
	25	なし	なし	—	—	—
CORBAサービス	26	FJSVod	/opt/FJSVod/bin/CosNaming_s	—	○	○
	27	FJSVod	/opt/FJSVod/bin/InterfaceRep_Cache_e	—	○	○
	28	FJSVod	/opt/FJSVod/bin/InterfaceRep_Cache_s_Obf	—	○	○
	29	FJSVod	/opt/FJSVod/bin/InterfaceRep_s_Obf	—	○	○
	30	FJSVod	/opt/FJSVod/bin/OD_start	○	○	○
	31	FJSVod	/opt/FJSVod/bin/odprocwatch	○	○	○
データベース連携サービス	32	FJSVots	/bin/TranFactory	—	○	○
	33	FJSVots	/opt/FJSVots/bin/logdaemon	—	○	○
	34	FJSVots	/opt/FJSVots/bin/otsmnger	—	○	○
	35	FJSVots	/opt/FJSVots/bin/otsrecovery	—	○	○
	36	FJSVots	otsstartscコマンドの-pgオプションに指定した パス パス、プロセス名ともユーザ指定です。	—	○	○
	37	FJSVots	configファイルのPATHに指定したjavaのパス パス、プロセス名ともユーザ指定です。	—	○	○
Interstage シングル・サイ ンオン	38	FJSVssocm	/opt/FJSVssocm/bin/ssologd	—	○	○
	39	FJSVssosv	/opt/FJSVssosv/bin/ssossmgr	—	○	○
故障監視	40	FJSVsvmon	/opt/FJSVsvmon/lib/f3fmsvmmond	—	○	○
	41	FJSVsvmon	/opt/FJSVsvmon/lib/f3fmsvmmonobservd	—	○	○
コンポーネントランザク ションサービス	42	FJSVtd	/opt/FJSVtd/isp/bin/ispzstart	—	○	○
	43	FJSVtd	なし	—	—	—
	44	FJSVtd	なし	—	—	—
	45	FJSVtd	なし	—	—	—
	46	FJSVtd	/opt/FJSVtd/lib/istageapid	—	○	○
	47	FJSVtd	Linux32 /opt/FJSVtd/lib/lorb	—	—	○
	48	FJSVtd	/opt/FJSVtd/lib/manage	○	○	○
	49	FJSVtd	/opt/FJSVtd/lib/odmanage	○	○	○
	50	FJSVtd	Linux32 /opt/FJSVtd/lib/orbd	—	—	○
	51	FJSVtd	/opt/FJSVtd/lib/watch	○	○	○

機能名	項目番号	パッケージ名	プロセス名	WS	SJE	EE
Interstage 管理コマンド (Interstage 統合コマンド)	52	FJSVtdis	/opt/FJSVtd/lib/ismanage	○	○	○
	53	FJSVtdis	/opt/FJSVtd/lib/iswatch	—	○	○

## 注意

- Interstage HTTP Server 2.2で監視が必要な常駐プロセスについては、「Interstage HTTP Server 2.2 運用ガイド」の「各種情報」-「プロセス情報」を参照してください。
- Java EE 6機能で監視が必要なプロセス情報については、「Java EE運用ガイド(Java EE 6編)」の「プロセス情報」を参照してください。

## プロセスの説明

### 注意

#### “クラスタの場合”について

Interstage Application Server Enterprise Editionでクラスタ構成の環境下の場合に、プロセス監視ソフトで該当プロセスを監視する必要があるかどうか、を記載しています。

#### 項目番号:01

プロセス名	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\Enabler\server\bin\omsd.exe <b>Solaris32/64</b> /opt/FJSVena/server/bin/omsd <b>Linux32/64</b> /opt/FJSVena/Enabler/server/bin/omsd
プロセス数	1 (リポジトリ数に依存)
機能概要	データストアごとに存在し、データストアへの入出力を行います。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	デーモンプロセスであるためプロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	リポジトリを起動していないときは、プロセスも起動していないため、監視する場合は注意が必要です。 Interstage data storeはIDS(Smart Repository)以外のコンポーネントも使用しているため注意が必要です。
起動コマンド/停止コマンド	監視は必要ですが、プロセスダウン時の自動再起動はしません。状況を調査後に再起動を判断する必要があります。

#### 項目番号:02

プロセス名	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\\$Interstage\\$Enabler\\$server\\$bin\\$omsservd.exe <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> /opt/FJSVena/server/bin/omsservd <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVena/Enabler/server/bin/omsservd
プロセス数	1
機能概要	クライアントからのデータストア接続要求に対して必要な情報をクライアントに提供する、クライアントとデータストア間のブローカーです。
常駐について	必ず常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	デーモンプロセスであるためプロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	Interstage data storeはIDS(Smart Repository)以外のコンポーネントも使用しているため注意が必要です。 <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> インストールディレクトリによりps -efのパスが異なります。
起動コマンド/ 停止コマンド	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> サービスより起動/停止してください。 <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> /opt/FJSVena/server/bin/enablerstart /opt/FJSVena/server/bin/enablerstop <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVena/Enabler/server/bin/enablerstart /opt/FJSVena/Enabler/server/bin/enablerstop

### 項目:03

プロセス名	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\\$Interstage\\$bin\\$esdmnmain.exe <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #c00000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVes/bin/esdmnmain
プロセス数	1
機能概要	イベントサービス使用時必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	イベントサービスのデーモンプロセスであるため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\\$Interstage\\$bin\\$esstart.exe C:\\$Interstage\\$bin\\$esstop.exe

	<span style="background-color: orange; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: red; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span>
	/opt/FJSVes/bin/esstart
	/opt/FJSVes/bin/esstop

項番:04

プロセス名	<span style="background-color: green; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> C:\¥Interstage\¥bin\¥eslogdaemon.exe
	<span style="background-color: orange; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: red; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVes/bin/eslogdaemon
プロセス数	1
機能概要	イベントサービス使用時必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	イベントサービスのログ出力のデーモンプロセスであるため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<span style="background-color: green; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> C:\¥Interstage\¥bin\¥esstart.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥esstop.exe
	<span style="background-color: orange; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: red; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVes/bin/esstart /opt/FJSVes/bin/esstop

項番:05

プロセス名	<span style="background-color: green; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> C:\¥Interstage\¥bin\¥extp_is.exe
	<span style="background-color: orange; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> /opt/FSUNextp/bin/extp_is
	<span style="background-color: red; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVextp/bin/extp_is
プロセス数	1
機能概要	TransactionDirectorの管理を行う必須プロセスです。
常駐について	必ず常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	TransactionDirector内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<span style="background-color: green; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> C:\¥Interstage\¥bin\¥isstart.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥isstop.exe

	<table border="0"> <tr> <td style="width: 10%;"><b>Solaris32/64</b></td><td>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</td></tr> <tr> <td><b>Linux32/64</b></td><td>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</td></tr> </table>	<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop	<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop
<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop				
<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop				

項番:06

プロセス名	<table border="0"> <tr> <td style="width: 10%;"><b>Windows32/64</b></td><td>C:\¥Interstage\¥bin\¥extp_momo.exe</td></tr> <tr> <td><b>Solaris32/64</b></td><td>/opt/FSUNextp/bin/extp_momo</td></tr> <tr> <td><b>Linux32/64</b></td><td>/opt/FJSVextp/bin/extp_momo</td></tr> </table>	<b>Windows32/64</b>	C:\¥Interstage\¥bin\¥extp_momo.exe	<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNextp/bin/extp_momo	<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVextp/bin/extp_momo
<b>Windows32/64</b>	C:\¥Interstage\¥bin\¥extp_momo.exe						
<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNextp/bin/extp_momo						
<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVextp/bin/extp_momo						
プロセス数	1						
機能概要	TransactionDirectorの管理を行う必須プロセスです。						
常駐について	必ず常駐						
プロセスの監視	不要						
クラスタの場合	クラスタ非対応						
監視の説明	TransactionDirector内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。						
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。						
起動コマンド/ 停止コマンド	<table border="0"> <tr> <td style="width: 10%;"><b>Windows32/64</b></td> <td>C:\¥Interstage\¥bin\¥isstart.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥isstop.exe</td> </tr> <tr> <td><b>Solaris32/64</b></td> <td>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</td> </tr> <tr> <td><b>Linux32/64</b></td> <td>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</td> </tr> </table>	<b>Windows32/64</b>	C:\¥Interstage\¥bin\¥isstart.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥isstop.exe	<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop	<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop
<b>Windows32/64</b>	C:\¥Interstage\¥bin\¥isstart.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥isstop.exe						
<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop						
<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop						

項番:07

プロセス名	<table border="0"> <tr> <td style="width: 10%;"><b>Windows32/64</b></td><td>C:\¥Interstage\¥bin\¥extp_momo_func.exe</td></tr> <tr> <td><b>Solaris32/64</b></td><td>/opt/FSUNextp/bin/extp_momo_func</td></tr> <tr> <td><b>Linux32/64</b></td><td>/opt/FJSVextp/bin/extp_momo_func</td></tr> </table>	<b>Windows32/64</b>	C:\¥Interstage\¥bin\¥extp_momo_func.exe	<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNextp/bin/extp_momo_func	<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVextp/bin/extp_momo_func
<b>Windows32/64</b>	C:\¥Interstage\¥bin\¥extp_momo_func.exe						
<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNextp/bin/extp_momo_func						
<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVextp/bin/extp_momo_func						
プロセス数	1						
機能概要	TransactionDirectorの管理を行う必須プロセスです。						
常駐について	必ず常駐						

プロセスの監視	不要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	TransactionDirector内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMihs\bin\Apache.exe C:\Interstage\F3FMihs\bin\httpd</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

#### 項目:08

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMihs\var\pid\{Webサーバ名}.pid</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVihs/var/.pid/{Webサーバ名}.pid</p>
プロセス数	<p>Webサーバ数×1</p> <p> <b>注意</b></p> <p>プロセスは、複数起動されていますが、以下のプロセス管理ファイルに記載されているプロセスIDのプロセスだけを監視してください。なお、以下のプロセス管理ファイルは、Webサーバ起動中にだけ存在します。</p> <p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMihs\var\pid\{Webサーバ名}.pid</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVihs/var/.pid/{Webサーバ名}.pid</p>
機能概要	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>Webサーバ(Interstage HTTP Server)の起動プロセスです。通信スレッドを監視します。</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>Webサーバ(Interstage HTTP Server)のデーモンプロセスです。通信プロセスを監視します。</p>
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	該当プロセスが異常終了した場合は、自動起動手段がないため、プロセス監視ソフトでの監視する必要があります。 ただし、クラスタ運用中に該当プロセスが異常終了した場合、運用系ノード

	ドと待機系ノードが切り替わるため、プロセス監視ソフトで監視する必要はありません。
備考	複数のWebサーバ運用時は、Webサーバごとにプロセスを監視する必要があります。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <pre>C:\Interstage\bin\ihssstart C:\Interstage\bin\ihssstop または サービスより起動/停止してください。</pre> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <pre>/opt/FJSVihs/bin/ihssstart /opt/FJSVihs/bin/ihssstop または /opt/FJSVihs/bin/apachectl start /opt/FJSVihs/bin/apachectl stop</pre>

項目番号:09

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <pre>C:\Interstage\F3FMihs\bin\Apache.exe</pre> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <pre>/opt/FJSVihs/bin/httpd</pre>
プロセス数	<p>1</p> <p> <b>注意</b></p> <p>プロセスは、複数起動されていますが、以下のプロセス管理ファイルに記載されているプロセスIDのプロセスだけを監視してください。なお、以下のプロセス管理ファイルは、Webサーバ起動中にだけ存在します。</p> <p><b>Windows32/64</b></p> <pre>C:\Interstage\gui\var\tmp\httpd.pid</pre> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <pre>/var/opt/FJSVisgui/tmp/httpd.pid</pre>
機能概要	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>Interstage HTTP Server(Interstage管理コンソール用)の起動プロセスです。通信スレッドを監視します。</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>Interstage HTTP Server(Interstage管理コンソール用)のデーモンプロセスです。通信プロセスを監視します。</p>
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	該当プロセスが異常終了した場合は、自動起動手段がないため、プロセス監視ソフトでの監視する必要があります。
備考	

起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Windows32/64</b>
	Windows(R)の[管理ツール]→[サービス]からサービス「Interstage Operation Tool(FJapache)」を起動します。
	Windows(R)の[管理ツール]→[サービス]からサービス「Interstage Operation Tool(FJapache)」を停止します。
	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b>
	/opt/FJSVisgui/bin/S99isstartoptool start /opt/FJSVisgui/bin/S99isstartoptool stop

項目:10

プロセス名	<b>Windows32/64</b>
	C:\Interstage\gui\bin\isgui_com_service.exe
プロセス数	1
機能概要	Interstage管理コンソール用のプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	該当プロセスが異常終了した場合は、自動起動手段がないため、プロセス監視ソフトでの監視する必要があります。
備考	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> 本プロセスは、存在しません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Windows32/64</b> Windows(R)の[管理ツール]→[サービス]からサービス「Interstage Operation Tool」を起動します。 Windows(R)の[管理ツール]→[サービス]からサービス「Interstage Operation Tool」を停止します。

項目:11

プロセス名	<b>Windows32/64</b>
	C:\Interstage\IREP\sbin\ireplog.exe
	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b>
	/opt/FJSVirep/sbin/ireplog
プロセス数	1 (リポジトリ数に依存)
機能概要	Interstage Directory Serviceのアクセスログ制御プロセスです。
常駐について	必ず常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	自動リカバリにより再起動されるため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Windows32/64</b> サービスより起動/停止してください。

	<span style="background-color: #FFCCBC; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span>
	/opt/FJSVirep/bin/irepstart /opt/FJSVirep/bin/irepstop

項番:12

プロセス名	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span>
	C:\Interstage\IREP\sbin\irepmanage.exe
	<span style="background-color: #FFCCBC; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span>
	/opt/FJSVirep/sbin/irepmanage
プロセス数	1 (リポジトリ数に依存)
機能概要	Interstage Directory Serviceの管理プロセスです。
常駐について	必ず常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	デーモンプロセスであるため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span>
	サービスより起動/停止してください。
	<span style="background-color: #FFCCBC; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span>
	/opt/FJSVirep/bin/irepstart /opt/FJSVirep/bin/irepstop

項番:13

プロセス名	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span>
	C:\Interstage\IREP\sbin\irepslapd.exe
	<span style="background-color: #FFCCBC; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span>
	/opt/FJSVirep/sbin/irepslapd
プロセス数	1 (リポジトリ数に依存)
機能概要	Interstage Directory Serviceのリポジトリ本体です。
常駐について	必ず常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	デーモンプロセスであるため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span>
	サービスより起動/停止してください。
	<span style="background-color: #FFCCBC; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span>
	/opt/FJSVirep/bin/irepstart /opt/FJSVirep/bin/irepstop

項番:14

プロセス名	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span>
	C:\Interstage\IREP\sbin\irepslurpd.exe

	<span style="background-color: #FFA500; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #FF0000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> <code>/opt/FJSVirep/sbin/irepslurpd</code>
プロセス数	1 (リポジトリ数に依存)
機能概要	Interstage Directory Serviceのレプリケーション本体です。
常駐について	必ず常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	デーモンプロセスであるため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	<span style="background-color: #FF0000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> 標準データベース(Interstage data store)使用時ののみのため、PG版のみです。
起動コマンド/ 停止コマンド	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> サービスより起動/停止してください。 <span style="background-color: #FFA500; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #FF0000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> <code>/opt/FJSVirep/bin/irepstart</code> <code>/opt/FJSVirep/bin/irepstop</code>

項目:15

プロセス名	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> <code>C:\Interstage\JDK6\bin\java.exe</code> <span style="background-color: #FFA500; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <code>/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java -Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/FJSVisjee/domains/interstage</code> <span style="background-color: #FF0000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> <code>/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java -Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/FJSVisjee/domains/interstage ~以下略~</code>
プロセス数	<span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> 1 <span style="background-color: #FFA500; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #FF0000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> 1
機能概要	Interstage Java EE DASサービスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	本サービスがダウンしてもランタイムの動作には影響無いため、監視は不要です。
備考	起動状態の場合、以下のファイルによりpidを特定可能です。 <span style="background-color: #008000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Windows32/64</span> <code>C:\ Interstage\domains\interstage\config\_.com_sun_appserv_pid</code> <span style="background-color: #FFA500; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #FF0000; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> <code>/var/opt/FJSVisjee/domains/interstage/config/_.com_sun_appserv_pid</code>

起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMisjee\bin\ijdasstart C:\Interstage\F3FMisjee\bin\ijdasstop</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVisjee/bin/ijdasstart /opt/FJSVisjee/bin/ijdasstop</p>
-------------------	---

項目番号:16

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\JDK6\bin\javaw.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java -Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/FJSVisjee/node</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java -Dcom.sun.aas.instanceRoot=/var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/agent ~以下略~</p>
プロセス数	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>1</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>1</p>
機能概要	Interstage Java EE Node Agentサービスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	本サービスがダウンした場合、配下のIIServerクラスタの監視機能が利用できなくなるため、監視する必要があります。 クラスタ環境の場合、Interstage Application Server側で本サービスを監視する手順を提供しているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	<p><b>Solaris32/64</b></p> <p>psコマンドの結果が途中で切れるため、プロセスを特定できません。 起動状態の場合、以下ファイルによりpidを特定可能です。</p> <p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\ Interstage \ F3FMisjee \ nodeagents \ ijna \ agent \ config \ __com_sun_appserv_pid</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/var/opt/FJSVisjee/nodeagents/ijna/agent/config/.__com_sun_appserv_pid</p>
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMisjee\bin\ijnastart C:\Interstage\F3FMisjee\bin\ijnastop</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVisjee/bin/ijnastart /opt/FJSVisjee/bin/ijnastop</p>

項番:17

プロセス名	<b>Windows32/64</b> C:\¥Interstage\¥F3FMisjee\¥imq\¥bin\¥imqbrokersvc.exe <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /opt/FJSVisjee/imq/bin/imqbrokerd
プロセス数	<b>Windows32/64</b> 1 <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> 運用に依存
機能概要	JavaEE JMS(メッセージブローカ)機能です。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	JavaEE JMS機能を使用する場合には、必須のプロセスであるため監視が必要です。
備考	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> サービス化するメッセージブローカ数に応じてプロセス数が変化します。
起動コマンド/ 停止コマンド	サービスより起動/停止してください。   <b>注意</b> ----- 停止コマンドを実行した場合にIDとパスワードの入力が必要なため、プロセス監視ソフトによるコマンド操作はできません。 -----

項番:18

プロセス名	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /opt/FJSVisjmx/lib/isjmxtomanage
プロセス数	1
機能概要	Interstage JMXサービス用管理プロセスです。
常駐について	必ず常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	必要
監視の説明	デーモンプロセスであるためプロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b> /opt/FJSVisjmx/bin/isjmxtomanage /opt/FJSVisjmx/bin/isjmxtostop

項番:19

プロセス名	<b>Windows32/64</b> C:\¥Interstage\¥bin\¥isjmxxrpd.exe
-------	---

	<b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b>  /opt/FJSVisjmx/lib/isjmxwrd
プロセス数	1
機能概要	Interstage JMXサービスプロセスです。 (Interstage管理コンソールの運用操作に必須のプロセスです。)
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	<b>Windows32/64</b>  Interstage管理コンソール用のプロセスで監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。  <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b>  Interstage JMXサービス用管理プロセスで監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Windows32/64</b>  サービス「Interstage Operation Tool」より起動/停止してください。  <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b>  /opt/FJSVisjmx/bin/isjmxstart /opt/FJSVisjmx/bin/isjmxstop

項目:20

プロセス名	<b>Windows32/64</b>  インストール時のJDK/JREの選択により異なります。  JDKの場合 C:\Interstage\JDK6\bin\java.exe JREの場合 C:\Interstage\JRE6\bin\java.exe  <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b>  インストール時のJDK/JREの選択により異なります。  JDKの場合 /opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java JREの場合 /opt/FJSVawjbk/jre6/bin/java
プロセス数	1
機能概要	Interstage JMXサービス用常駐プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	<b>Windows32/64</b>  Interstage管理コンソール用のプロセスで監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。  <b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b>  Interstage JMXサービス用管理プロセスで監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	起動したプロセスのプロセスIDは、以下のファイルに記載されています。

	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>Interstageインストールディレクトリ¥jmx¥var¥log¥isjmxmin.pid</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVisjmxBin/var/log/isjmxmin.pid</p>
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>サービス「Interstage Operation Tool」より起動/停止してください。</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVisjmxBin/bin/isjmxitart /opt/FJSVisjmxBin/bin/isjmxitstop</p>

項番:21

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>インストール時のJDK/JREの選択により異なります。</p> <p>JDKの場合 C:\Interstage\JDK6\bin\java.exe JREの場合 C:\Interstage\JRE6\bin\java.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>インストール時のJDK/JREの選択により異なります。</p> <p>JDKの場合 /opt/FJSVawjbk/jdk6/bin/java JREの場合 /opt/FJSVawjbk/jre6/bin/java</p>
プロセス数	1
機能概要	Interstage管理コンソール用Servletサービスのサーブレット・コンテナです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	Interstage管理コンソール用Servletサービスのコンテナ監視プロセスにより監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMjs2su\bin\jssvstart.exe C:\Interstage\F3FMjs2su\bin\jssvstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVjs2su/bin/jssvstart /opt/FJSVjs2su/bin/jssvstop</p>

項番:22

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMjs2su\bin\jswatch2.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>jswatch2</p>
プロセス数	1
機能概要	Interstage管理コンソール用Servletサービスのコンテナ監視プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐

プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	Interstage管理コンソール用Servletサービス使用時の必須プロセスであり、自動復旧しないため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\F3FMjs2su\bin\jssvstart.exe C:\Interstage\F3FMjs2su\bin\jssvstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVjs2su/bin/jssvstart /opt/FJSVjs2su/bin/jssvstop</p>

項目:23

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\MessageQueueDirector\bin\mqdopctl.exe</p> <p><b>Solaris32</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVmqd/bin//mqdopctl</p>
プロセス数	1以上
機能概要	MQD 運用コントロールプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	MQDが起動しているときには必ず存在しているべきプロセスなので、監視が必要です。
備考	<p>起動しているMQDシステムの数によって、起動するプロセス数は変化します。</p> <p><b>Solaris32</b></p> <p>第一引数がMQDシステム名です。</p>
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>Windowsのサービスで MessageQueueDirector MQDシステム名を起動/停止します。</p> <p><b>Solaris32</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVmqd/bin/mqdstr /opt/FJSVmqd/bin/mqdstp</p>

項目:24

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>%MQDBRIDGE_BIN%\mqdbserv.exe</p> <p><b>Solaris32</b></p> <p>/opt/FJSVmqdb/bin/mqdbserv</p>
プロセス数	運用に依存
機能概要	MQDBRIDGEシステムプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐

プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	MQDBRIDGEサービスにより監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	サービス定義に定義されることにより、MQDBRIDGEサービスから再起動されます。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <pre>%MQDBRIDGE_BIN%\mqdbstart.exe %MQDBRIDGE_BIN%\mqdbstop.exe</pre> <p><b>Solaris32</b></p> <pre>/opt/FJSVmqdb/bin/mqdbstart /opt/FJSVmqdb/bin/mqdbstop</pre>

項番:25

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <pre>%MQDBRIDGE_BIN%\mqdbsvc.exe</pre> <p><b>Solaris32</b></p> <pre>/opt/FJSVmqdb/bin/mqdbsvcstart</pre>
プロセス数	1
機能概要	MQDBRIDGEシステムの監視を行うサービスプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	MQDBRIDGEシステムを監視する親プロセスのため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <pre>%MQDBRIDGE_BIN%\mqdbsvcstart.exe %MQDBRIDGE_BIN%\mqdbsvcstop.exe</pre> <p><b>Solaris32</b></p> <pre>/opt/FJSVmqdb/bin/mqdbsvcstart /opt/FJSVmqdb/bin/mqdbsvcstop</pre>

項番:26

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <pre>%windir%\system32\Naming.exe</pre> <p><b>Solaris32/64</b></p> <pre>/opt/FSUNod/bin/CosNaming_s</pre> <p><b>Linux32/64</b></p> <pre>/opt/FJSVod/bin/CosNaming_s</pre>
プロセス数	1
機能概要	ネーミングサービスプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐

プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項目:27

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>%windir%\system32\InterfaceRep_e.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNod/bin/InterfaceRep_Cache_e</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVod/bin/InterfaceRep_Cache_e</p>
プロセス数	1
機能概要	インターフェースリポジトリキャッシュプロセス(EJB用)です。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項目:28

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>%windir%\system32\InterfaceRep_Cache_s.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNod/bin/InterfaceRep_Cache_s_Obf</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVod/bin/InterfaceRep_Cache_s_Obf</p>
プロセス数	1
機能概要	インターフェースリポジトリキャッシュプロセス(標準)です。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項目:29

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\odwin\bin\InterfaceRep_s.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNod/bin/InterfaceRep_s_Obf</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVod/bin/InterfaceRep_s_Obf</p>
プロセス数	1
機能概要	インターフェースリポジトリ本体プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	Sharedサーバであるため、アクセスがあった場合は自動起動されます。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p>

	<table border="0"> <tr> <td style="width: 10%;"><b>Solaris32/64</b></td><td>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</td></tr> <tr> <td><b>Linux32/64</b></td><td>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</td></tr> </table>	<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop	<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop
<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop				
<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop				

項目番号:30

プロセス名	<table border="0"> <tr> <td style="width: 10%;"><b>Windows32/64</b></td><td>%windir%\system32\odstart.exe</td></tr> <tr> <td><b>Solaris32/64</b></td><td>/opt/FSUNod/bin/OD_start</td></tr> <tr> <td><b>Linux32/64</b></td><td>/opt/FJSVod/bin/OD_start</td></tr> </table>	<b>Windows32/64</b>	%windir%\system32\odstart.exe	<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNod/bin/OD_start	<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVod/bin/OD_start
<b>Windows32/64</b>	%windir%\system32\odstart.exe						
<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNod/bin/OD_start						
<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVod/bin/OD_start						
プロセス数	1						
機能概要	CORBAサービスの管理を行う必須プロセスです。						
常駐について	機能を使用する場合、常駐						
プロセスの監視	<table border="0"> <tr> <td><b>EE</b></td> <td><b>SJE</b> 不要</td> </tr> <tr> <td colspan="2"><b>WS</b> 必要</td> </tr> </table>	<b>EE</b>	<b>SJE</b> 不要	<b>WS</b> 必要			
<b>EE</b>	<b>SJE</b> 不要						
<b>WS</b> 必要							
クラスタの場合	不要						
監視の説明	<p><b>EE</b> Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。 クラスタの場合、クラスタ側で監視するため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。</p> <p><b>SJE</b> Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。 クラスタは、本エディションでは未サポートです。</p> <p><b>WS</b> 必須プロセスのため監視する必要があります。(Interstage Application Server内部の監視機構はありません)。 クラスタは、本エディションでは未サポートです。</p>						
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。						
起動コマンド/ 停止コマンド	<table border="0"> <tr> <td style="width: 10%;"><b>Windows32/64</b></td> <td>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</td> </tr> <tr> <td><b>Solaris32/64</b></td> <td>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</td> </tr> <tr> <td><b>Linux32/64</b></td> <td>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</td> </tr> </table>	<b>Windows32/64</b>	C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe	<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop	<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop
<b>Windows32/64</b>	C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe						
<b>Solaris32/64</b>	/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop						
<b>Linux32/64</b>	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop						

項目番号:31

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\¥Interstage\¥odwin\¥bin\¥odprocwatch.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNod/bin/odprocwatch</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVod/bin/odprocwatch</p>
プロセス数	1
機能概要	CORBAプロセスの生死監視を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	CORBAサービスを監視するプロセスのため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	OD_startが起動するプロセスであるため、単独で再起動できません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\¥Interstage\¥bin\¥isstart.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項番:32

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\¥Interstage\¥ots\¥bin\¥TranFactory.exe</p> <p><b>Solaris32</b></p> <p>/opt/FSUNots/bin/TranFactory</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/bin/TranFactory</p>
プロセス数	1
機能概要	データベース連携サービスのトランザクション管理プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	otsmngerにより監視されます。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\¥Interstage\¥bin\¥isstart.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥isstop.exe</p>

	<div style="background-color: #FFD700; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Solaris32/64</div> /opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop
	<div style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Linux32/64</div> /opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop

項目:33

プロセス名	<div style="background-color: #3CB371; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Windows32/64</div> C:\Interstage\ots\bin\logdaemon.exe
	<div style="background-color: #FFD700; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Solaris32</div> /opt/FSUNots/bin/logdaemon
	<div style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Linux32/64</div> /opt/FJSVots/bin/otsmnger
プロセス数	1
機能概要	データベース連携サービスのログトレース管理プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	otsmngerにより監視されます。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<div style="background-color: #3CB371; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Windows32/64</div> C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe
	<div style="background-color: #FFD700; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Solaris32/64</div> /opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop
	<div style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Linux32/64</div> /opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop

項目:34

プロセス名	<div style="background-color: #3CB371; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Windows32/64</div> C:\Interstage\ots\bin\otsmnger.exe
	<div style="background-color: #FFD700; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Solaris32</div> /opt/FSUNots/bin/otsmnger
	<div style="background-color: #DC143C; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Linux32/64</div> /opt/FJSVots/bin/otsmnger
プロセス数	1
機能概要	データベース連携サービスのシステム管理プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要

監視の説明	iswatchにて監視されるため不要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項目:35

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\ots\bin\otsrecovery.exe</p> <p><b>Solaris32</b></p> <p>/opt/FSUNots/bin/otsrecovery</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVots/bin/otsrecovery</p>
プロセス数	1
機能概要	データベース連携サービスのリカバリ管理プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	otsmngerにより監視されます。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項目:36

プロセス名	<p><b>Windows32/64 Solaris32 Linux32/64</b></p> <p>otsstartrscコマンドの-pgオプションに指定したパス パス、プロセス名ともユーザ指定です。</p>
プロセス数	ユーザ指定
機能概要	データベース連携サービスのOTS用リソース管理プログラムです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要

クラスタの場合	不要
監視の説明	otsmngerにより監視されます。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\¥Interstage\¥bin\¥otsstartrsc.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥otsstoprsc.exe</p> <p><b>Solaris32</b></p> <p>/opt/FSUNots/bin/otsstartrsc /opt/FSUNots/bin/otsstoprsc</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVots/bin/otsstartrsc /opt/FJSVots/bin/otsstoprsc</p>

項目:37

プロセス名	<p><b>Windows32/64 Solaris32 Linux32/64</b></p> <p>configファイルのPATHに指定したjavaのパス パス、プロセス名ともユーザ指定です。</p>
プロセス数	ユーザ指定
機能概要	データベース連携サービスのJTS用リソース管理プログラムです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	otsmngerにより監視されます。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\¥Interstage\¥bin\¥otsstartrsc.exe C:\¥Interstage\¥bin\¥otsstoprsc.exe</p> <p><b>Solaris32</b></p> <p>/opt/FSUNots/bin/otsstartrsc /opt/FSUNots/bin/otsstoprsc</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVots/bin/otsstartrsc /opt/FJSVots/bin/otsstoprsc</p>

項目:38

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\¥Interstage\¥bin\¥ssologd.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FJSVssocm/bin/ssologd</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVssocm/bin/ssologd</p>
プロセス数	<ul style="list-style-type: none"> <li>統合Windows認証機能、および認証サーバ間連携機能のどちらも使用していない場合</li> </ul> <p>0</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>統合Windows認証機能、または認証サーバ間連携機能のどちらかを使用している場合</li> </ul> <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>統合Windows認証機能、および認証サーバ間連携機能を両方とも使用している場合</li> </ul> <p>3</p>
機能概要	Interstage シングル・サインオンの認証サーバのアクセスログ、および保守ログの出力を行うプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	必要(備考を参照してください)
監視の説明	<p>プロセスがダウンしていると、以下のログが採取されなくなるため、監視が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>認証サーバのアクセスログ</li> <li>統合Windows認証アプリケーションの保守ログ</li> <li>認証サーバ間連携ログ</li> <li>認証サーバ間連携サービスの保守ログ</li> </ul>
備考	リポジトリサーバをクラスタで運用する構成において、認証サーバ上で本プロセスの監視が必要となります。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p>Interstage シングル・サインオンの認証サーバが組み込まれたInterstage HTTP Serverの起動により起動されます。</p> <p>コマンド名は、<a href="#">FJSVihs</a>を参照してください。</p>

項目:39

プロセス名	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\F3FMssov\soatcsv\bin\ssossmgr.exe <span style="background-color: #ff8c00; color: white; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #ff0000; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVssosv/bin/ssossmgr
プロセス数	1
機能概要	Interstage シングル・サインオンのセッションを管理するプロセスです。セッションの管理を行っていない運用の場合には、このプロセスは使用されません。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	セッションの管理を行う運用の場合は必須デーモンプロセスのため、監視が必要です。 クラスタの場合は、本プロセス監視用の状態遷移プロジェクトを提供しているため監視は不要です。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	Interstage シングル・サインオンのリポジトリサーバが組み込まれたInterstage HTTP Serverの起動/停止により起動/停止されます。 コマンド名は、 <a href="#">FJSVihs</a> を参照してください。

項目:40

プロセス名	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\bin\f3fmsvmond.exe <span style="background-color: #ff8c00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #dc143c; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVsvmon/lib/f3fmsvmond
プロセス数	1
機能概要	Webサーバコネクタの故障監視機能を実現するプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	不要
監視の説明	f3fmsvmonobservdにより監視を行っているため、監視は不要です。
備考	再起動は、f3fmsvmonobservdとf3fmsvmondの両プロセスが存在しない場合のみ起動可能です。また、その後Webサーバの再起動を行うことで故障監視が再開されます。 Web Packageでは起動されません。
起動コマンド/ 停止コマンド	非公開です。 再起動しないでください。

項目:41

プロセス名	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\bin\f3fmsvmonobservd.exe <span style="background-color: #ff8c00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> <span style="background-color: #dc143c; color: white; padding: 2px 5px;">Linux32/64</span> /opt/FJSVsvmon/lib/f3fmsvmonobservd
プロセス数	1
機能概要	Webサーバコネクタ故障監視機能プロセスを監視するプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	不要
監視の説明	Webサーバコネクタの設定において、故障監視を行う設定がされた場合に必須のプロセスであるため、監視が必要です。
備考	再起動は、f3fmsvmonobservdとf3fmsvmondの両プロセスが存在しない場合のみ起動可能です。また、その後Webサーバの再起動を行うことで故障監視が再開されます。 Web Packageでは起動されません。
起動コマンド/ 停止コマンド	非公開です。 再起動しないでください。

項目:42

プロセス名	<span style="background-color: #2e6b2e; color: white; padding: 2px 5px;">Windows32/64</span> C:\Interstage\td\bin\ispzstart.exe <span style="background-color: #ff8c00; color: black; padding: 2px 5px;">Solaris32/64</span> /opt/FSUNtd/isp/bin/ispzstart
プロセス数	1

機能概要	リアルタイム監視時の性能測定環境の設定を行うプロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	任意
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	Interstageの監視体系に組み込まれていません。 性能情報取得なので仮にダウンしても業務への影響は少ないため、クラスタ切り替えが必要かどうかは検討してください。
備考	
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <pre>C:\\$Interstage\\$td\\$bin\\$ispmakeenv.exe C:\\$Interstage\\$td\\$bin\\$ispdeleteenv.exe</pre> <p><b>Solaris32/64</b></p> <pre>/opt/FSUNtd/isp/bin/ispmakeenv /opt/FSUNtd/isp/bin/ispdeleteenv</pre> <p><b>Linux32/64</b></p> <pre>/opt/FJSVtd/isp/bin/ispmakeenv /opt/FJSVtd/isp/bin/ispdeleteenv</pre>

項番:43

プロセス名	<b>Solaris32/64</b>  /opt/FSUNtd/isp/lib/ispsubad
プロセス数	1
機能概要	性能監視ツールのデーモン(リアルタイム監視用)です。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	任意
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	Interstageの監視体系に組み込まれていません。 性能情報取得なので仮にダウンしても業務への影響は少ないため、クラスタ切り替えが必要かどうかは検討してください。
備考	<p><b>Windows32/64</b> <b>Linux32/64</b></p> <p>プロセスは存在しません。</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>OS V/Lに応じていずれか1つのプロセスのみ常駐します。</p>
起動コマンド/ 停止コマンド	ありません(OSから起動されます)。

項番:44

プロセス名	<b>Solaris32/64</b>  /opt/FSUNtd/isp/lib/ispsubad7
プロセス数	1
機能概要	性能監視ツールのデーモン(リアルタイム監視用)です。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	任意
クラスタの場合	クラスタ非対応

監視の説明	Interstageの監視体系に組み込まれていません。 性能情報取得なので仮にダウンしても業務への影響は少ないため、クラスタ切り替えが必要かどうかは検討してください。
備考	<b>Windows32/64</b> <b>Linux32/64</b> プロセスは存在しません。 <b>Solaris32/64</b> OS V/Lに応じていずれか1つのプロセスのみ常駐します。
起動コマンド/ 停止コマンド	ありません(OSから起動されます)。

項番:45

プロセス名	<b>Solaris32/64</b> /opt/FSUNtd/isp/lib/ispsubad8
プロセス数	1
機能概要	性能監視ツールのデーモン(リアルタイム監視用)です。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	任意
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	Interstageの監視体系に組み込まれていません。 性能情報取得なので仮にダウンしても業務への影響は少ないため、クラスタ切り替えが必要かどうかは検討してください。
備考	<b>Windows32/64</b> <b>Linux32/64</b> プロセスは存在しません。 <b>Solaris32/64</b> OS V/Lに応じていずれか1つのプロセスのみ常駐します。
起動コマンド/ 停止コマンド	ありません(OSから起動されます)。

項番:46

プロセス名	<b>Windows32/64</b> C:\Interstage\bin\istageapid.exe <b>Solaris32/64</b> /opt/FSUNtd/lib/istageapid <b>Linux32/64</b> /opt/FJSVtd/lib/istageapid
プロセス数	1
機能概要	Interstage Application ServerのAPI処理を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。

起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>
-------------------	--

項目:47

プロセス名	<p><b>Windows32</b></p> <p>C:\Interstage\td\bin\lorb.exe</p> <p><b>Solaris32</b></p> <p>/opt/FSUNtd/lib/lorb</p> <p><b>Linux32</b></p> <p>/opt/FJSVtd/lib/lorb</p>
プロセス数	1
機能概要	TransactionDirectorの管理を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	TransactionDirector内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項目:48

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\td\bin\manage.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/lib/manage</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/lib/manage</p>
-------	---

プロセス数	1
機能概要	TransactionDirectorの管理を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項目:49

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\td\bin\odmanage.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/lib/odmanage</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/lib/odmanage</p>
プロセス数	1
機能概要	TransactionDirectorの管理を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	不要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	TransactionDirector内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

項番:50

プロセス名	<b>Windows32</b>	
	C:\\$Interstage\\$td\\$bin\\$orbd.exe	
	<b>Solaris32</b>	
	/opt/FSUNtd/lib/orbd	
	<b>Linux32</b>	
	/opt/FJSVtd/lib/orbd	
プロセス数	1	
機能概要	TransactionDirectorの管理を行う必須プロセスです。	
常駐について	機能を使用する場合、常駐	
プロセスの監視	不要	
クラスタの場合	クラスタ非対応	
監視の説明	TransactionDirector内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。	
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。	
起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Windows32/64</b>	
	C:\\$Interstage\\$bin\\$isstart.exe	
	C:\\$Interstage\\$bin\\$isstop.exe	
	<b>Solaris32/64</b>	
	/opt/FSUNtd/bin/isstart	
	/opt/FSUNtd/bin/isstop	
	<b>Linux32/64</b>	
	/opt/FJSVtd/bin/isstart	
	/opt/FJSVtd/bin/isstop	

項番:51

プロセス名	<b>Windows32/64</b>
	C:\\$Interstage\\$td\\$bin\\$watch.exe
	<b>Solaris32/64</b>
	/opt/FSUNtd/lib/watch
	<b>Linux32/64</b>
	/opt/FJSVtd/lib/watch
プロセス数	1
機能概要	TransactionDirectorの監視を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	TransactionDirector内の各プロセスを監視する親プロセスであるため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。

起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Windows32/64</b>
	C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe
	<b>Solaris32/64</b>  /opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop

<b>Linux32/64</b>	<b>Windows32/64</b>
	/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop
	<b>Linux32/64</b>

項目番号:52

プロセス名	<b>Windows32/64</b>  C:\Interstage\bin\ismanage.exe
	<b>Solaris32/64</b>  /opt/FSUNtd/lib/ismanage
	<b>Linux32/64</b>  /opt/FJSVtd/lib/ismanage
プロセス数	1
機能概要	<b>EE SJE</b> Interstage Application Serverの監視を行う必須プロセスです。  <b>WS</b> Interstage Application Serverの管理を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	<b>EE SJE</b> 不要  <b>WS</b> 必要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	<b>EE SJE</b> Interstage Application Server内部で監視を行っているため、プロセス監視ソフトでの監視は不要です。  <b>WS</b> 該当プロセスが異常終了した場合、自動起動手段がないためプロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<b>Windows32/64</b>  C:\Interstage\bin\isstart.exe C:\Interstage\bin\isstop.exe
	<b>Solaris32/64</b>  /opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop
	<b>Linux32/64</b>  /opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop

項目番号:53

プロセス名	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\\$Interstage\\$bin\\$iswatch.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/lib/iswatch</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/lib/iswatch</p>
プロセス数	1
機能概要	Interstage Application Serverの監視を行う必須プロセスです。
常駐について	機能を使用する場合、常駐
プロセスの監視	必要
クラスタの場合	クラスタ非対応
監視の説明	Interstage Application Server内の各プロセスを監視する親プロセスであるため、プロセス監視ソフトでの監視が必要です。
備考	異常終了した場合は障害の可能性があるため、自動的に再起動することはできません。
起動コマンド/ 停止コマンド	<p><b>Windows32/64</b></p> <p>C:\\$Interstage\\$bin\\$isstart.exe C:\\$Interstage\\$bin\\$isstop.exe</p> <p><b>Solaris32/64</b></p> <p>/opt/FSUNtd/bin/isstart /opt/FSUNtd/bin/isstop</p> <p><b>Linux32/64</b></p> <p>/opt/FJSVtd/bin/isstart /opt/FJSVtd/bin/isstop</p>

## 付録D メッセージ情報

Interstage Application Serverで監視が必要なメッセージについて説明します。

### 注意

- Interstage HTTP Server 2.2で監視が必要なメッセージについては、「Interstage HTTP Server 2.2 運用ガイド」の「各種情報」-「メッセージ情報」を参照してください。
- Java EE 6機能で監視が必要なメッセージ情報については、「Java EE運用ガイド(Java EE 6編)」の「メッセージ情報」を参照してください。

### D.1 イベントログ Windows32/64

Windowsの場合、監視が必要なメッセージはイベントログに出力されます。

Interstage Application Serverが通知する異常をツール等で監視する場合、以下の情報をもとに、イベントログの異常系メッセージを監視してください。

#### 異常系メッセージの特定情報

ログの種類	ソース名	監視条件	WS	SJE	EE
アプリケーション	F3FMes	エラー種別が「情報」レベル以外	—	○	○
	F3FMextp	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMIhs	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMIrep	エラー種別が「情報」レベル以外	—	○	○
	F3FMImis	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMImisjee	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMImisjmx	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMIjms	エラー種別が「情報」レベル以外	—	○	○
	F3FMIjs2su	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMIjs5	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMIssrc	エラー種別が「情報」レベル以外	—	○	○
	F3FMIssrs	エラー種別が「情報」レベル以外	—	—	○
	F3FMod	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMIots	エラー種別が「情報」レベル以外	—	○	○
	F3FMIssso	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	F3FMIsvmon	エラー種別が「情報」レベル以外	—	○	○
	F3FMItd	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○
	FJSVmqdb	エラー種別が「情報」レベル以外	—	—	○
	FujitsuEnabler	エラー種別が「情報」レベル以外 <small>注1)</small>	—	○	○
INTERSTAGE EJB	エラー種別が「情報」レベル以外	○	○	○	
ISPerf	エラー種別が「情報」レベル以外	—	○	○	

ログの種類	ソース名	監視条件	WS	SJE	EE
	MessageQueueDirector	エラー種別が「情報」レベル以外	—	—	○

#### 注1)

以下のメッセージは「情報」レベルのメッセージのため、監視対象にする必要はありません。

ソース名	エラー種別(種類)	本文(部分一致)
FujitsuEnabler	FujitsuEnabler	Info: disc space becomes too small
		Info message from segment size check

## D.2 syslog

SolarisまたはLinuxの場合、監視が必要なメッセージはsyslogに出力されます。

Interstage Application Serverが通知する異常をツール等で監視する場合、以下の情報をもとに、syslogの異常系メッセージを監視してください。

### 出力先ディレクトリ

Solaris32/64

/var/adm/messages

Linux32/64

/var/log/messages

### メッセージの出力形式

形式1

ラベル:△エラー種別:△メッセージテキスト



“:”は半角コロン、“△”は1文字の半角空白です。

### 説明

ラベル	エラー種別	メッセージテキスト
製品(機能)を特定する文字列	「情報」または「INFO」 <a href="#">注1)</a>	任意の文字列
	「警告」または「WARNING」 <a href="#">注1)</a>	
	「エラー」または「ERROR」 <a href="#">注1)</a>	

注1) Solaris32

MQ連携サービスの場合は、「Infomation」、「Warning」、「Error」です。

## 出力例

```
UX:IS: ERROR: is20102:INTERSTAGE unable to start Reason code(12)
```

## 形式2

```
エラー種別△メッセージID:△メッセージテキスト
```



### 注意

“:”は半角コロン、“△”は1文字の半角空白です。

## 説明

エラー種別	メッセージID	メッセージテキスト
( info)	“IJServer(固定文字)”+数字5桁(ゼロサプレスなし)	任意の文字列
( warn)		
(error)		



### 注意

“(”、“)”は半角括弧です。また、“info”、“warn”は、先頭に1文字の半角空白があります。

## 出力例

```
(error) IJServer12044: Web Application does not respond. Web Application has timed out. ~(以降、略)
```

## 形式3

```
ラベル△メッセージID:△メッセージテキスト
```



### 注意

“:”は半角コロン、“△”は1文字の半角空白です。

## 説明

ラベル	メッセージID	メッセージテキスト
IJServer(固定文字)	IJServer11103(固定文字)	任意の文字列

## 出力例

```
IJServer: IJServer11103: change owner failed. code=9
```

## 出力メッセージのファシリティ、プライオリティ(レベル)

ファシリティ	エラー種別	プライオリティ(レベル)
daemon	「情報」または「INFO」 <a href="#">注1)</a>	info notice
	「警告」または「WARNING」 <a href="#">注1)</a>	notice <a href="#">注2)</a> warn warning
	「エラー」または「ERROR」 <a href="#">注1)</a>	err error

ファシリティ	エラー種別	プライオリティ(レベル)
		crit alert emerg

注1) Solaris32

MQ連携サービスの場合は、「Infomation」、「Warning」、「Error」です。

注2) Solaris32

MQ連携サービスの場合だけ該当します。

### 異常系メッセージの特定情報

出力形式	ラベル/メッセージID	監視条件	WS	SJE	EE
形式1	IJServer	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	ISJEE	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	<span style="background-color: #ffffcc; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32</span> UX: FJSVmldb[mqdbsvc]	エラー種別が「情報」または「Infomation」以外	—	—	○
	UX:DEP	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:EJB	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	○	○
	UX:ENABLER	エラー種別が「情報」または「INFO」以外 <span style="color: blue;">注1)</span>	○	○	○
	UX:ES	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	○	○
	UX:extp	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:FJSVjs2su	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:IHS	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:IJServer	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:IREP	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	○	○
	UX:IS	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:ISJ2EE	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:JMS	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	○	○
	UX:JSSRC	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	○	○
	UX:JSSRS	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	—	○
	<span style="background-color: #ffffcc; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32</span> <span style="background-color: #ffcccc; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> UX:MQD	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	—	○
	UX:OD	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	<span style="background-color: #ffffcc; border: 1px solid black; padding: 2px;">Solaris32</span> <span style="background-color: #ffcccc; border: 1px solid black; padding: 2px;">Linux32/64</span> UX:OTS	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	○	○
	UX:SSO	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
	UX:SvMon	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	—	○	○
	UX:TD	エラー種別が「情報」または「INFO」以外	○	○	○
形式2	“IJServer(固定文字)”+数字5桁	エラー種別が「(info)」以外	○	○	○

出力形式	ラベル/メッセージID	監視条件	WS	SJE	EE
形式3	“IJServer(固定文字)”/ IJServer11103(固定文字)	ラベルおよびメッセージIDの一致	○	○	○

注1)

以下のメッセージは「情報」レベルのメッセージのため、監視対象にする必要はありません。

メッセージを特定する条件(文字列)
Info: disc space becomes too small
Info message from segment size check

## 付録E Java実行環境に関する情報

本製品では、複数のJava実行環境を提供しています。

Java実行環境と組合せ可能なJava(JDK/JRE)とWebサーバ連携(Interstage HTTP Server/Interstage HTTP Server 2.2)について、以下のとおりです。

- ・ ○:組合せできます。
- ・ ×:組合せできません。

### EE [SJE] 提供機能(サーバパッケージ)

	Java (注1)		Webサーバ連携 (注2)	
	JDK 6	JDK 7	Interstage HTTP Server	Interstage HTTP Server 2.2
J2EE 1.4	○	×	○	×
Java EE 5 (注3)	○	×	○	×
Java EE 6	○ (注4)	○	×	○

注1)JREとの組合せは、「J2EE 1.4のServlet」だけ可能です。

注2)各Webサーバ用のWebサーバコネクタが必要です。

注3)標準でインストールされるJava EEアプリケーションの実行環境です。

注4)「JDK 6」と組み合わせて使用する場合にも、「JDK 7」は必須のためインストールされます。

### EE [SJE] 提供機能(クライアントパッケージ)

	Java	
	JDK/JRE 6	JDK/JRE 7
J2EE 1.4	○	×
Java EE 5 (注)	○	×
Java EE 6	○	○

注)標準でインストールされるJava EEクライアント機能です。

### WS 提供機能

	Java		Webサーバ連携 (注1)	
	JDK 6	JDK 7	Interstage HTTP Server	Interstage HTTP Server 2.2
Webフロントシステムの構築向けのJava EE 5機能 (注2)	○	×	○	×
Webフロントシステムの構築向けの	○ (注3)	○	×	○

	Java		Webサーバ連携 (注1)	
	JDK 6	JDK 7	Interstage HTTP Server	Interstage HTTP Server 2.2
Java EE 6機能				

注1) 各Webサーバ用のWebサーバコネクタが必要です。

注2) 標準でインストールされるWebアプリケーションの実行環境です。

注3) 「JDK 6」と組み合わせて使用する場合にも、「JDK 7」は必須のためインストールされます。

# 索引

## [数字]

64bit版Solarisの製品と、他のSolaris製品間の差異について 47

## [C]

C/C++関連.....	17
C/C++関連の開発環境.....	12
COBOL関連.....	17
COBOL関連の開発環境.....	15
CORBAサービス／コンポーネントランザクションサービス／イベントサービス／データベース連携サービス.....	34

## [J]

Java EEのシステム設計.....	6
Java実行環境に関する情報.....	159
Javaの開発環境.....	11

## [L]

Linux for Intel64上での資源の移行についての注意事項.....	45
Linux for Intel64の製品と、他のLinux製品間の差異について	45
Linux上のアプリケーションの移行における注意事項.....	44

## [M]

MessageQueueDirector使用時に必要なソフトウェア.....	37
MQ連携サービス使用時に必要なソフトウェア.....	38

## [N]

non-global zone作成時の注意事項.....	43
------------------------------	----

## [S]

Solaris 10で使用する場合の注意事項.....	42
Solaris 11で使用する場合の注意事項.....	43
Solarisゾーンでの運用について.....	42

## [W]

Web PackageによるWebサーバ.....	4
Webサーバ.....	29
Webサーバ経由の運用.....	7
Windows Server(R) x64 Editions上での資源の移行についての注意事項.....	40
Windows Server(R) x64 Editionsの製品と、他のWindows製品間の差異について.....	40

## [あ]

アプリケーション開発時に必要なソフトウェア.....	11
アプリケーション実行時に必要なクライアント側のソフトウェア	34
アプリケーション実行時に必要なソフトウェア.....	17
イベントログ.....	154
運用監視関連.....	30
主な運用形態.....	6

## [か]

管理コンソール.....	30
クラスタシステム.....	1
グローバルサーバ／PRIMEFORCEのInterstage連携時に必要なソフトウェア.....	39
高信頼機能.....	32

## [さ]

システム形態.....	6
システム構成.....	1
syslog.....	155
シングルサーバ(スタンドアロン).....	1
シングル・サインオン.....	3
セキュリティ.....	29
その他.....	33,36
ソフトウェア.....	11,17
ソフトウェア条件.....	11

## [た]

単数マシンでの多重プロセス運用.....	7
データベース関連(Interstage ディレクトリサービス).....	24
データベース関連(J2EE).....	26
データベース関連(Java EE).....	19
データベース関連(データベース連携サービス).....	22
動作OSの違いによる注意事項.....	40

## [は]

負荷分散システム.....	2
複数マシンでの多重プロセス運用.....	8
フレームワーク.....	17,32,36
プロセス情報.....	117
ポート番号.....	97

## [ま]

マルチ言語サービスのシステム設計.....	10
マルチサーバ.....	3
メッセージ情報.....	154

## [ら]

ログ情報.....	51
-----------	----